居る物を脱いでなと、間に合して上げましたもの、何卒あの櫛ばかりは、御免なされて下されませ。伊「可いわ、夫程な櫛なら借りぬ、そんなら外の物何ぞ貸せ。岩「何と云うて、何がムり升もので。伊「エ、聒しいわい。何なりと都合して出せ。岩「ハイ。ト愛ひのこなし色々あつて、着て居る着物脱ぐと淺黄の長下着になりて着物を疊み渡す。伊「左樣なら、是なりとお間に合せて下さりませ。伊「何だこりや汝が着物、是が若干貸すものか、是じや足りない、もつと出せ。岩「それじやと云ふて無理ばつかり仰しやる、何も無い者を。伊「聒しいわい、わりや夫でも好な男には貸すであらうナ。岩「モシ貴方、好な男とはそりや誰でムり升る。伊「わりや間夫が有るであらう。岩「エ、如何してマア。伊「知るまいと思ふか、間夫が有るであらうが。岩「モシ云ふ事と云はぬ事がムり升る、私が間夫したといふ證據がムり升か、シテ又何處の誰でムり升、サア承りませう、是ばかりは承りませねばなりませぬわいナア。伊「サア其人は。岩「其者はへ。伊「サそれは〇ヲ、爾うだ、小兵衛と譯があるであらう。伊「エ、何、小兵衛と、シテ夫には證據がムり升か。伊「證據な。岩「證據はへ。伊「サア證據は無いが、何でも可笑な素振であつた。岩「證據も無いに其樣に難非難付けるは、こりや何ぞ御了簡がムり升るか。伊「サア了簡が有る、イヤサ了簡も譯も無いけれど、俺が貸せと云ふ物を貸さぬ故、疑ふのだ。岩「それじやといふて、無い物が如何して。伊「ナニまた外に。ト伊右衛門障子家臺を見ると蚊帳の釣りあるを見付て。幸あの蚊帳を質に遣らう。ト立懸り取らうとするを、お岩留めて。岩「モシこちの人、此蚊帳ばかりは堪忍して下さんせ、坊主が蚊に喰れ升、私は構いませぬが、子が可愛相でムり升わいナア。伊「ソレ見やれ、子を庇護立する顏で、やつぱり惜いのだ〳〵。岩「イエ〳〵何の惜い事はムりませぬが、坊主が蚊に喰れ升る故。伊「子が蚊に喰れうが汝が死なうが構ふ者か。岩「チエ、、、。ト伊右衛門の顏を怨めし相に見てわつと泣きて。「そりや貴方餘りでムりませうがナ。伊「何が餘りだ、忌々しい其泣面、エヽ面倒なアノ蚊帳を。ト立掛るをお岩引留め挑み合ふて、トヾ伊右衛門振切る、お岩アッと倒るゝ。岩「アヽ顏が痛い〳〵。ト伊右衛門是を構はず蚊帳を取つて來て。伊「ドリや行かうか。ト伊右衛

門行くを又留めて。岩「此蚊帳許は、何卒やめて下さんせ。伊「エヽ面倒な、放せやい。岩「どうぞ是は、子が蚊に喰れ升、堪忍して下され。伊「エヽ放しやアがらぬか。ト酷う引奪る、トお岩指の爪離るゝ。岩「アイタヽヽヽ、爪が離れましたわいナア。ト倒るゝ、其間に伊右衛門門へ出て。伊「之も照月の一軸が欲しいばかりで、辛く當るも。ト思入あつて。「ドリヤ一トぶちあてうか。ト時の鐘にて向ふへ這入る、トお岩指を押へ轉んで苦む。岩「こちの人、何卒其蚊帳ばかりは何卒。ト起上りて見て。「モウ行かしやんしたか、アイタヽヽヽ、邪見な男ではあるぞいなう、アヽ顔が痛い〳〵。ト顔と指を抱へ苦む、此時向ふより宅悦戻つて來て門口へ這入り。宅「今戻りました○ヤお前はお岩様、又血の道か如何なされました〳〵。岩「ヲヽ宅悦殿、今こちの人が戻らしやんして、何ぞ質に置く物貸せと云はしやんしたけれど、何も無い故斷り云ふたら聞入れず、そこで私の着物脱いで上げた其上に、まだ何ぞ出せと云ふて、いろ〳〵な難題ばかり、其上にあの蚊帳を出せと云しやんす故、此子が蚊に喰れると、段々事譯云ふても聞入れず、私が留たを振切り此様に爪まで離して行しやんしたわいなア。宅「ドレドレそれは〳〵邪見なお人だ。ヲヽ痛みませう、血止を付けて、エヽ情無い人じやナア。宅「アヽ顔が痛い〳〵。宅「申し〳〵逆上して血が上つたら惡い氣を落付けて、暫くお臥みなされませ。ト此時赤子泣く、是にてお岩立つて顔を押へ。子を添乳せんと寢轉び蚊を追ひ、二枚屏風を引廻す、ト宅悦いろ〳〵と捨臺詞あつて。宅「ヤレ〳〵可愛さうに蚊が澤山居るに、ドレ〳〵蚊燻を仕懸けて上げませう。ト火鉢へ蚊燻などして居る、時の鐘凄き合方になり、行燈を出して燈心を入れ、油をさゝんとして。宅「南無三油が斷れた、ドレ〳〵油を買ふて來よう、申しお岩様油買ふてまいり升、一寸留守をお頼み申し升る、お岩様〳〵。岩「アイ〳〵。ト起上る、トお岩の顔、眺への異形に變る。宅悦見て惚りして。宅「ヤアヽヽヽお岩様の顔が。岩「きつう逆上してならんわいナア。宅「マアマア恐ろしい。ト云懸り思入ある、お岩は心付かず居る。「トリヤ油を買ふて來ようか。ト振向き見て。「アヽ南無阿彌陀佛。ト門口へ出て。「マアマア如何いふもので、彼の様な顔にならしやんした事じや、もう一目と。ト

又立歸り覗いて。まるで化物だ。岩「まだ行しやんせんかいナア。宅「今鼻緒を直して居ました。ト恐ろしいといふこなし、捨臺詞にて向ふへ這入る、お岩立上り火鉢の蚊燻など、氣を付け始終苦み居る。此時入相の鐘合方にて橋懸りより伊右衛門窺ひ出て、そつと門口より覗いて見て、お岩の顔を見て恟りし。伊「ヤあの樣にも變るものか、こりや思案し變へずば成らぬわい。ト時の鐘、又門より覗いて。「まるで化物だ。ト思案して花道へ懸る、ト向ふより宅悅油さし持つて戻つて來る、伊右衛門行逢ひ宅悅恟りして。宅「モシモシ、伊右衛門樣〳〵あのお岩樣の顔が、とひやうもない者になり升た、御覽なされ升たか。伊「ヲヽ見た〳〵、何も騷ぐ事は無い、高が斯うだ、喜兵衛殿の娘を女房に貰ふ約束故、邪魔になるはあのお岩、砒藥を以てあの樣に、變る姿を幸ひに、去つて了ふ魂膽だ、コレ宅悅、貴樣にも賴みが有るコレ。ト叫くこなし。……宅「正眞正銘賴まれたのじや、其樣子は伊右衛門殿、アノ喜兵衛の娘を女房にするにつけ、邪魔になるお岩、どうぞ間夫をしてくれ、夫を難につけ叩き出すといふ魂膽、コレまだ其上に、今日喜兵衛が所より寄越した血の道の藥といふは大毒藥、不具に變る藥を呑ませ、伊右衛門殿に愛想盡させ、先方を去りてくり、跡で喜兵衛が娘と一ッにならうといふ工みで厶るわい。岩「ヤヽヽヽヽヽヽヽそんなら喜兵衛と馴合ふて。宅「貧乏な世帶せうより、大金持の伊藤氏へ、聟に行く心と最前の咄し、夫故に私に間夫をしてくれ、首尾よく行けば褒美、厭だと云つたら眞二ッと、刀を拔いて退引ならず、是非なく心にも無き不義を云ひ懸け升た、樣子は斯の通りで厶り升る。岩「チエヽヽ口惜しや腹立や、其心では父樣の、敵も討つては下さんすまい、嫉ましいは喜兵衛親子、主のある者を横戀慕、此上は逢ふて恨を。ト行きかけるを宅悅留めて。宅「モシ其顔では。岩「何其顔とは。宅「疾に形は變つてあるぞへ。岩「エヽヽドレ、鏡。ト此內悔しき思入、宅悅手早く鏡を取つて。宅「ハイ〳〵。ト お岩に鏡を差付ける、ちよつと見て。岩「ハア、、。ト鏡を捨てヽ恟りし。宅「ソレ見なされ、其樣な顔に。ト お岩怖々鏡を見、まだ得心せず、後に誰やら居るかと思ふこなしにて、後を見たり色々あつて櫛を取り差して見ると我顔故。岩「ハア。ト泣出す。宅「尤じや〳〵、如何もせう事が。岩「此上は誰を怨みん。

喜兵衛親子に逢ふて存分云ふて、約束を變替させて腹を癒んソレ。ト駈出さうとするを宅悅留める、トお岩こなしあつて氣を變へ。「イヤ〳〵此儘行くも女子の恥、髮搔上げて鐵漿つけて、存分云ふて○宅悅殿ちつと鏡臺と、鐵漿つけ道具を下され早う〳〵。宅「マア明日の事にでもなされませ。宅「エ、、取つて下されと云ふに。ト腹立て、云ふ、此時宅悅鏡臺と鐵漿つけ道具を持つて來る、お岩向ふを見詰めて悔しきこなし、鏡に向ひ又はハアと泣く、ト獨吟になり此獨吟の內宅悅に髮を梳せる、產後の髮ゆゑ解けぬこなし痛いといふ思入れにて自分に解く、仕替髮にて毛拔けることあつて夫れより鐵漿つける。此內始終誂へ獨吟の切に、行燈に宅悅火を燈す、トお岩鐵漿つけ丁ひ、髮搔き薙で拔けたる髮の毛を手に丸めて。「チエ、怨めしや伊藤親子、嫉ましや伊右衛門殿、人に恨が有るものか無いものか、檜木山の火は檜木より生ずると、我も焦るゝ胸の炎、思ひ知らさん待つて居よや。ト髮の毛を絞る、よき程に轉けてある衝立の障子へ、血がたら〳〵と流れる。ト障子血に染る、宅悅見て恟り顫ふ。お岩は血の上つたる思入にて、ウンとたぢたぢと件の柱へ凭れる。トハアとお岩倒る　。宅悅恟りして駈寄り見て驚き。岩「ヤア〳〵大變〳〵、お岩樣こりや最前の脇差が柱に立つて居て、お岩樣は死んだ〳〵。ト大きに慌てるこなし遊り駈廻り。こりや斯うしては居られぬ、あの樣な惡い伊右衛門、又俺がわざになるであう、些とも早く爾うじや〳〵。と行燈蹴返し逸散に駈出で、橋懸へ逃げて這入る。ト時の鐘合方になり、向ふより伊右門提灯つけて出で花道にて。伊「宅悅が首尾よくやれば重疊、假令其方が行かずとも、あの樣な顏になつもの、どうして女房に成るものか、マア樣子を窺ひソレ。ト門口へ來て窺ひ物音せぬ故、さてはといふこなしにて、そつと內へ這入る、暗やみ故。「お岩、宅悅〳〵、ト呼べど返事なき故、行燈を出して提灯を移し遊りを見る、トお岩倒れて居る故恟りし拖上げて。「コレお岩如何致した。ト見て。「ヤ見れは肩先餘程の深傷ハテナア。ト思入、此時後の押入頻りに內より叩く、ト押入の戶を明けて小兵衛を曳摺出す。「サア小兵衛め、儕が小手が緩んで居る故、女房お岩を殺したに相違あるまい。有りやうに申せ。ト是れにて小兵衛跪く。伊右衛門見て。「ハア猿轡を箝

めてある故物が云へぬか、ドレ取つて遣るに依つて譯を申せ。ト猿轡を取つてやる、ト小兵衛ほつと息つぐこなし。少「ヤレ〳〵有難う厶り升る、何卒御了簡下されませ。伊「何を申す、コレ了簡で事が濟まうか、女房お岩を何故殺した。少「エ、如何して私が、是には段々譯が。伊「譯もへちまも有るものか、コレうぬが脇差で殺してあるからは、何でも儕が手に懸けたに違は無い、うぬどうして。ト小兵衛を引き執へる所へ、ばた〳〵にて向ふより長藏官藏走り出て來て門口へ來て。長「扨伊右衛門殿、目出たい事が厶るて、喜兵衛殿が今宵祝言致したいとの事、御承知なればお悦びなされい〳〵。長「夫故態々お報に參つた、是非共お連れ申さねば我々が、兩人「濟みませぬて。伊「夫は忝いが、孰も大變が厶る、只今宿元へ歸つて見れば、お岩が討れて居ました、詮議致せば小兵衛が脇差、殊に此者の手が弛んであれば不審の一ッ、這奴に違ひは厶らぬ、此上は詮議致しませう。兩人「よく厶る。ト是より小兵衛を執へ酷くする。伊右衛門兩人に指圖して。伊「ソレ其奴が指を一本〳〵切落し、白狀させて下されい。兩人「承知いたした。ト小兵衛を執へ指を一本〳〵切る、ト此時誂へあつて小兵衛の指蛇となる。小兵衛苦むこなしにて。少「ア、どの樣になされても知らぬ〳〵。お岩樣を殺した覺えは厶りませぬ。お疑を露し何卒私が願の妙藥を下さりませ。伊「ヤアのぶとい奴、妙藥所かお岩の敵はうぬであらう。少「更々覺えは厶りませぬ。何卒疑をお露しなされて下さりませ、何卒お願ひで厶り升る。長「這奴め太い奴、打倒して云はせませう。宮「ひつそ殺して了うが可い。ト三人して小兵衛を打据える。伊右衛門刀の背打する。ト小兵衛苦み。少「エ、存じも寄らぬ難題に、假令此身は死するとも、恨は民谷伊右衛門。三人「そりやかつたいの殆らみだ。伊「凡夫さかりに祟りがあらうか。馬鹿な事を。三人「とうどう往生致しました。伊「後日の人口を遁る爲、這奴の死骸はお岩と一緒に、鳶や烏の餌食となし、日數杉戸の板返し、浮名を流す水葬禮。長「成程そ、お岩小兵衛の間男と。宮「云ひ觸したら後日の禍。伊「遁るゝ工夫はソレ。ト指圖する。兩人「合點だ。ト兩人押入の戸を外して、小兵衛の死骸縛り手足を板へ打付ける。伊「お岩の死骸も其裏へ打付けて、裏手の川へナア。兩人「心得て

ムる。伊「拙者は是より君が許へ、今宵は晴の緣結び。長「邪魔は拂ふて、首尾よう參つた。宮「御遠慮無しに些とも早う。伊「參るでムらう。兩人「目出たい門出に。ト長藏はお岩の死骸、官藏は小兵衛の死骸を伊右衛門に見せる、但しお岩の死骸は吹替なり。伊右衛門につたり笑ふて。伊「ドリヤ參らうか。ト橋懸りへ這入る。兩人は死骸を縛付ける。時の鐘宜しく此道具返し。

○

本舞臺元の伊藤の屋敷になる、上手障子家臺に床を敷き、其上にお梅下着にて待つて居る體、二重の上に喜兵衛、お弓、乳母おまき幷び居る、時の鐘しんみりとした合方にて道具止る。

喜「最早しらせが有りさうなものじやて。弓「爾うでムんす、さりながら產婦もあるし、內の場合が惡うムんせうわいナ。まき「モウ御得心の上は、お案じなされ升ないナア。梅「お目に懸らぬ內は、どうも心が。喜「落付くまい。他も心が落付かぬ。弓「まき「遲い事でムり升るなア。此時橋懸りより伊右衛

門出來り枝折を明けてすつと這入る。伊「嘸お待兼でムらう、いろ〳〵取込だ儀がムて、思はぬ遲刻。喜「ヲ、伊右衛門殿か、皆が待兼娘は猶の事。弓「大抵待つた事じやムらぬわいなア。まき「サア〳〵是へお越なされませ。伊「然らば。ト二重舞臺へ伊右衛門上る。「何から申さうやら、先刻お內から戻りまして內の樣子を見れば、お岩と日雇ひ仲間の小兵衛と不義働き居るを見付け、據無く武士の習、兩人共に仕留め、諸人の見せしめの爲に、裏手の川へ戸板に打付け流しましたれば、最早心置く事は無し、御安堵なされて娘御と、夫婦になされて下されい。喜「ヤ、思はざる凶事、併し拙者は娘の爲に先は、重疊目出たい吉左右。梅「そんなら貴方のお家樣は、小兵衛とやらと。弓「密通の顯れ、殺されたといなう。まき「日頃のお願ひ此方の身には。まき「目出たい〳〵。喜「併し餘程夜も更たれば、萬事は明日取極めませう。梅「何卒お願。伊「左樣致さう。弓「私は奧へ乳母と一緒に。まき「參りませう。喜「拙者はこれにて宿置の微睡み。伊「左樣なら就も方。皆々「おやすみなされませ。ト おまき二重の下へ喜兵衛が床敷て屏風立てる、奧へ式禮してお弓と共に

這入る、物凄き合方になり伊右衛門床の上へ上る。伊「イヤもう嘸お待兼でムらう、其の效あつて今宵は相互に打解けて語ひませう。ト此臺詞の内薄どろどろにて、鼠出てお梅に纒ふと無言にて後へ倒るゝ。伊右衛門拾臺詞にて、上手の家體へ行く、始終薄ドロ〳〵。伊「コレお梅殿、其樣に恥かしがることは無い、最早さしあひ無い、今宵は緩りと二世の堅めをコレお梅殿。ト云ふと仕懸にて、お梅の身體よりお岩の顏出て。岩「怨めしいこちの人。伊「ヤヽお岩か南無阿彌。一刀に首をぽんと切る、トよき所へお梅が死骸と本まの首落つる、伊右衛門見て恟りし。扨てはお岩と思ひつるに、お梅であつたかヤ、、、、○舅殿大變でムる、不思議な凶事にてお梅を。ト二重下の屏風を明ける。ト小兵衛伊右衛門の子を抱いて喰殺して居る、伊右衛門恟りする。小「旦那樣藥を下せへ。ト手を出す。是も一刀に首を切る、トよき所へ喜兵衛の死骸と本首出る。伊右衛門見て恟りして。伊「ヤ、、、、扨は小兵衛と見えたるは舅殿が。之も二人が○恐ろしい。ト刀を捨て尻居にへたる。ト木の頭。執念じやよナア。トきざみ拍子木、此見得宜しく拍子幕。

（いろは假名四谷怪談第二段）

河竹新七

現代に及びて九代目團十郎、五代目菊五郎等の榮えし間に立作者たりし、二世河竹新七(二四七六—二五五三)三世河竹新七(二五〇二—二五六一)はまた南北の門流より出でし者とす。この外三升二三次、花笠文京以下多くの作者ありと雖も、皆學なく識なき劇間者流にして史上注意すべき創作を出せるなく、改作補綴を事としていづこにも清新の氣を認むること能はざるものゝみなり。

脚本の價値

蓋し歌舞伎は俳優の物にして作者の物にあらず、さきに津打治兵衛が「作者は役者の氣がぬをするが家業にて」と云へる精神は、いづこまでも附隨せるを以て少しく氣概ある文學者は、甘じて此等の作に從事するを好ざりしが如し。脚本は純粹なる戲曲として詩中最も價貴き物なるべきに、わが國のそれに散文の馬琴、淨瑠璃の近松に比肩すべき文學者を出すこと能はざりしは、全くこれが爲に外ならず。俳優の跋扈は明治の現代に至りても尚其の餘勢を存す、新脚本の作せらるゝもの相續いて出づるが如しと雖も、未だ會心のものあるに出逢はず。十餘年來新派の藝風生じて、脚本にまた新しきものを試用す。

何時かは其意義に於ける劇詩も作出せらるべきか。これ吾人の鶴首して待望する所なり。

歌舞伎の世界

因に記す。當代の歌舞伎狂言は、その取材卽ち舞臺面の性質によりて大凡四種に別たる、これを世界と云ふ。初の淨瑠璃は多く歌舞狂言の筋を借り、後の歌舞伎はまた、淨瑠璃の改作補綴甚だ多ければ、この四種の世界の分類はまた淨瑠璃文學にも通ずべし。

王代物

一王代物。禁中の事件、公卿の狀態等總じて朝家に關する筋を仕組めるもの。淨瑠璃にては「大內裏大友眞鳥」、「妹脊山婦女庭訓」の類。歌舞伎には「競伊勢物語」、「天滿宮菜種御供」の類是なり。

時代物

二時代物。歷史物の中にても所謂武家に關する事件にして、源平、北條、足利、菊地、大友等の軍記に材料を取れるものなり。「義經千本櫻」、「北條時賴記」、「國性爺合戰」の如き卽ちこれたり

御家物

三御家物。同代の武家社會に起れる大事件を仕組めるものにして、時代にもあらねば又世話とも云ふべからず。是に尙騷動と復讐との二別おるべし。「仙代萩」「鏡山」の如きは御家騷動に屬し、「伊賀越」、「忠臣藏」の如きは復讐ものと云ふべし。

世話物

四世話物。同代の平民社會に起れる事件を趣向とせるもの。これにも男達と情死との二別をおくべし。演劇中これに屬するもの甚だ多し

又後代正本の版行せらるゝに至りし頃より脚本(正本或は臺帳)の書式始と一定せられまづ始に舞臺の模樣、大道具小道具の配置より衣裳鳴物、淨瑠璃の文句、及び臺詞に順序正しく書き連れたるものにして、殊に臺詞は脚本の重要部たるは云ふまでもなく各人の臺詞毎に頭に一を引き、役者の思ひ入れある所には○を挿み、仕草ある所には臺詞の次に一段下してトの字を記し、その下に仕ぐさを書く、これをト書といへり。

以上の脚本及び前節の歌謠は、德川期全體に亘れる發達にして、特に沈滯時代の文學と見るべきものならねども、これを各時代に分たんこと極めて困難にして、理解にも甚だ不便を感ずる點多ければ茲に集めて一節とせるなり。讀者諸氏の諒察を請ふ。

第五節　擬古文學

文運東遷

賀茂眞淵

寶暦、明和、安永、天明の間は前期の韻文漸く惰氣を帶びて、後期の散文未だ其の光を發揮するに至らず、たゞ平民の勢力によりて發展したりし大阪が、漸く衰頽し來れる間に、殺伐木强なる武士に横行せられたる江戸が、次第に文藝に馴れ染むべき機運に進みつゝありし時代なりき。換言すれば文運方に東遷して徳川文學第二の精華を幕下の江戸に繁榮ならしむべき地盤を建設しつゝありし間と見るを得べし。この期に於て特に注意すべきは、國民の自覺と漢學勃興の反動とによりて起れる國學の研究が、此の時に及びて江戸に根據を据ゑ、陰に陽に殆ど凡ての文藝に影響を與へしといふ事なり。今爰に少しく之が根本動機の一たりし國學の狀況及び國學者の製作につきて敍ぶべし。

享保の頃京都の荷田春滿、國學を唱道し、復興の風を鼓吹せしことは既に前期の條にてこれを述べたり。其の門に賀茂眞淵(二三五七―二四二九)あり。遠州濱松の。人岡部を氏とす。農家に生れて旅宿に養はれ、初は漢籍を學びて詩文をもよくせしが、享保十八年三十七歳にして大志を立て、京に上りて荷田氏の門に遊び、深く國學の精を極む。後十年寛保三年初めて學を齋して江戸に出で、博く子弟に敎へしが、延享三年田安家に聘せられてよりは其名聲大に振ひ、致仕して後濱町に田舍の風を擬し、自ら縣居(あがたゐ)と稱せしより、人皆名を云はずして縣居の大人と呼べり。彼が主義とする所は、師が古典研究の本意に一歩を進めて、歌文の標準を純朴なる奈良朝に求むるのみならず、萬事を擧げて古の單調にかへさんと欲するものなりき。さればその著書數十種、多く考古註解に關し、斯道の後輩を啓發し指導せる事甚多く、自作の歌文亦皆古調を主とし、研究によりて得たる伎倆を以て能ふ限に古語古句を運用し、意(こゝろ)古にかへり言葉古を用ゐて、全く古き文學を再生せしめんことに勉めたり。契沖長流は古典を研究したりき。されど自ら萬葉集の歌を詠まんとまではつとめざりき。その美醜及び文學としての價値は暫くおきて、この特色は眞淵翁に至つて始めて見る所の特色なり。

縣居歌集三卷、賀茂翁家集五卷は翁が創作を收めたるもの。

岡部の家にてよめる

年どしに　しぬびまつれば　ふる里に　在すがごとく

常はしも　思ひてしものを　何しかも　もとな歸りて
逢ふ人に　言とひぬれば　父のみの　父は在さず
母そばの　母も在さず　然はあれど　吾妹なねの
かしらには　白髮生ひて　かなどより　出づるを見れば
母刀自は　いましにけりと　立ち走り　入りてし見れば
面には　皺かきたりて　よろぼへる　吾をしも見て
いもなねは　父來ましぬと　いぶかしみ　思ひたりけり
かたみに　言をも問はず　白玉の　涙かきたり
むかひ居て　古しぬぶ　事ぞさねおほき

原　月

播磨路や夕霧はれて久方の月おしてれりいなみ野の原

彼は、明和六年十月七十三歳にして江戸に歿す。其の門人甚だ多し。就中本居宣長、村田春海、橘千蔭、荒木田久老、建部綾足、田中道麿、小野古道、掛取魚彦、加藤美樹、塙保巳一等最も名あり。

本居宣長

本居宣長(一三九〇―一四六一)。勢州松阪の人、木綿問屋小津三四右衛門定利の子たり。享保十五年を以て生る。廿三歳の時、京に出でゝ醫を學びしが、側、契沖、眞淵の著書を讀んで大に感じ、數年の後、鄕里に歸りて醫を開き、其間頻に古典を修む。たゞ〳〵眞淵翁命によりて山城、大和、伊勢を廻り、又松阪に來る。宣長悅んで之を旅館に訪ひ、請うて弟子となる。時に年三十二歳なり。これより其の敎を奉じて深く古典を研究し、殊に古事記に關しては心血をそゝぎ、以後三十餘年間研究と著述とに專心從事したりき。さればその著作約六十種。古事記傳四十四卷の大を始め、宣命には歷朝詔詞解三卷、萬葉集には玉の小琴二卷、古今集には遠鏡六卷、新古今集には美濃家苞五卷、源氏物語には玉の小櫛九卷、及び音韻語學に關するものまで、今尙斯界の良書として重んぜらるるもの甚だ多し。

宣長の著作

宣長の門下

春滿、眞淵によりて開拓せられたる國學は、實に彼に及びて秩序整然として學術としての體形を成就せるかの感あり。其の門下に名を連ぬるもの數百人、就中本居春庭、同大平、鈴木朗、藤井高尙、平田篤胤、石川依平、伴信友、夏目甕麿、橘本稻彥等有名なり。豈に盛ならずや。その創作を收めたるを

鈴廼舍集七卷とす。文辭もとより古を主とすと雖も、師翁の如く高きに失せず、用語の整頓せることは一歩を進めたり。

述懷

昨日は今日の昔にてはかなくのみすぎに過ぎ行く世の中をつくづくと思へばあはれわが世も幾程ぞや。手を折りて數ふれば早や三十路にも餘りにけり。命長くて七十八十生けらむにてだに早く半は過ぎぬるよと思へば、まだ世ごもれる樣なる身も行先程なき心地のみして心細くぞ覺ゆる。

かくのみはかなく心なき木草鳥獸の同じつらになにすとしもなく明し暮しつつ生ける限の世をつくしていたづらに苔の下に朽ちはてなんはいと口惜しく云ふかひなかるべきことと思ふにも、萬に至り少くつたなき身にしあれば、何事をし出でゝかは世の人にも數まへられ、無からん後の世に朽ちせぬ名をだに止めましと、いとゞ人に似ぬ愚ささへ取りそひて悲しく心うかりけり。さりとてはた身をえうなきものにはふらかしつべきにもあらず、かくのみ拙く愚なる心ながら何業にまれ怠りなくわが心に入れて勉めたらむに、遂には一つのゆえづけてなのゆにし出づるふしもなどかなからんとあいなだのみにかゝりてなむ。

○

あめはるゝ軒のしづくを涙にてなく音おちくる山ほとゝぎす

里遠みたどる末のゝ夕ぐれにしるべうれしく立つ烟かな

敷島の大和心を人とはゞ朝日に匂ふ山櫻花

宣長と同門にして特に歌文に秀でたるを村田春海、橘千蔭の二人とす。春海（二四〇六―二四七一）は江戸の人、通稱平四郎、錦織齋、琴後翁等と號す。初漢籍を學びて詩文をよくし、後、縣門に入りて古典を學びしかば、唐宋八家の風格を移して巧に之を和文に施し、取捨折衷して別に一家をなせり。其の歌文を集めたるを琴後集十五卷とす。

王昭君

雪まじり　霰みだれて　夜もすがら　北吹く風の
あらましき　夜床の上に　つくづくと　枕そばだて

來し方を　思ひ出づれど　人の世は　夢なりけりな
しづだまき　賤しき吾も　宮姫と　數まへられて
小籠の内に　いつかれし世は　綾錦　袖にかされて
白玉を　かづらにしつゝ　ます鏡　見る面影の
かぐはしき　花のゑまひを　我ながら　われとたのみて
大君の　めぐみの露し　普くは　もれじとこそは
思ひつゝ　ありけるものを　さがなきや　筆にまかする
寫繪は　あらぬすさびの　僞を　正しもあへぬ
うきふしは　せんすべをなみ　いひしらぬ　國の境に
遙々と　出で立つ道に　おき添はる　袂の露の
消えかへり　引き留めたる　駒の上に　暫しかきなす
曲の緒の　絶えぬうらみを　はるけなむ　世こそ知られね
をしからぬ　命と思へど　塵の身の　散りも失せなで
春立てど　花も匂はず　秋來ても　紅葉も見えぬ

橘千蔭

荒山の　岩がきこもる　伏庵に　われにもあらで
いたづらに　年は重ねつ　思ひきや　言もかよはぬ
國人を　夫とむつびて　手弱女の　まとひもなれぬ
皮衣　袖さしかへて　諸寢せむとは

反歌

春の日の光もうすき古塚に草のみどりやいかにのこせる

橘千蔭(二三九五―二四六六)。加藤氏、江戸の人、幕府の與力たり。歌文をよくし書畫に亘る。家の集をうけらが花五卷とす。

隅田川のほとりなる石濱の庵にて雨の中に作れる文

は月はつか餘り秋のけはひのなつかしくて例の隅田川のほとり石濱の庵に行きて宿りぬ。有明の月の匂も霧たちわたる曙のさまも、所から世に似ぬものから、こゝは雨のそぼふる日なむことにあはれは深かりける、もとよりかやふける庵なれば、音だになくて軒のしづくのみつよくおちそむるより、籬の萩の下葉の色付きたるが、ほろ〳〵と散るも哀れなり。水の面は

うごくともなくて鏡の如くなるに、雲のこきうすきうつろひて、かつ浮びかつ消ゆる水沫にこそ、雨のけはひはしるかりけれ。みをの一すぢはさしひく汐にもまじらで、とはに花田の色に流れいにて沖に出づめり。これや水上の秩父の山のまし水の落ち來るならむ。打向ふ岸のはり原のみ、濃き墨がきの如くなるが中に、はゝその黄ばみたるは、さすがにほのかに見えでそのひまゝより、長き隄の見えわたるに、つゝみのをちなる梢は、やう〳〵にうす墨もてかきけちたらむが如く、いとしも遙げきは、たゞなびかぬ烟とのみぞ見ゆる。

國學者の輩出

春海、千蔭等共に多くの門下を敎ふ。就中春海の門下高田與清、岸本由豆流、清水濱臣等、千蔭の門下大石千引、加茂季鷹等最も名あり。又加藤美樹の門に上田秋成あり、荒木田久老の門に足代弘訓あり、塙保巳一の門に中山信名、屋代弘賢、石原正明あり、彼等又次々に門流を出して國學に貢獻する所少からず。此外此等の系統に屬せざる學者橘守部、石川雅望、村田了阿、富士谷成章、狩谷望之、伴蒿蹊、谷川士清等も相尋で競ひ起り、辯難攻擊、爲に古典研究の蒙を啓き幽を

徳川初期の和歌

復古派の和歌

あらはせる所甚だ多く。安永、天明より文化、文政に亘れる間は、實に國學の隆盛期を以て稱すべし。されど云ふまでもなく國學は學術研究にして文學創作にはあらず、此等學者は兼ねて歌、文をも製作したりと雖も、そは專門的研究によりて得たる結果を演繹試用したりといふに止り、嚴密なる意味に於ける創作とは見るべからず。言ひ換ふれば彼等の歌文は擬古にして、新しき人心の琴線に觸れたる自然の聲にはあらず、古典を研究せる人の間に弄ばれたる復古的興味にして、一般國民の嗜好とは云ふべからざりき。

たゞし此の間、復古的國學の以外に立ちて、和歌の道をなせるものなきにあらず。これより先、從來の所謂師範家の流を受けたる歌人に烏丸光廣(二二二三—二二九八)、有賀長伯(二三二一—二三九七)あり。流石に元祿の盛時に逢ひて、多少清新の調を試みたりしが、師範家の形式論は尙滔々たる無學者の間に行れて、其の說と作と殆ど聽くべからず、見るに堪へざりき。この風に反抗して起れる者は卽ち復古學派の國學にして、其の研究の主義のみならず、歌文の創作をも併せて尙古の風に從はしめんとする、一種の不自然の調に向ひしてと

小澤蘆庵

は前に述べたる所の如し。されば宣長、春海等も多少不知不識の間に新調を出したる跡を示すと雖も、未だその癖を脱して創作の本義に還れるものにあらざりき。不完全乍らもこの本義の自覺に到達せる者は、むしろ舊派の歌流に屬する京都の小澤蘆庵(一三八三—一四六一)なり。彼はもと尾張の人、武技を能くす。歌を冷泉爲村卿に學びて出藍の譽あり。人となり方正にして忠孝を重んじ、志士蒲生君平を好遇せし事あり。歌は舊派の用語に定限を付し天才を束縛するの愚なるを喝破せりと雖も、また當代の國學者が多く古を尙びて己を僞る多きにも與せず、古語もよく己に同化して平易淡懷必ず眞心を

蘆庵の主義

歌はんと欲したりき。即ち曰はく「あまねく世にみち〳〵て誰も知れることばをもて卅一文字につゞくるを歌といふなり」と、又「おのがいはるべき程を知りて心を平易にして理正しき詞をもて一筋につゞくれば自らよく聞えて別にならふことなし」と。尙歌つて曰はく「ひにしへは大根はしかみにならなすびひるほし瓜も歌にてそよめ」と。

人の世の富は草葉におく露の風の間を待つ光なりけり

今朝見れば燒野の原となりにけりこゝや昨日の玉敷の庭

今は世をうづまさ人になりはてゝ都は雲のよそにこそ見れ

大井川月と花との朧夜にひとり霞まぬ浪の音哉

香川景樹

彼が立脚地は師範家の傳統と復古學派の學癖と鼎立して、然も最も有望なるものなりき。この主義を祖述大成して一世を風靡せる者は、同じく京都に住せる香川景樹(一四三〇—一五〇三)となす。蘆庵が享和元年七月七十九歲を以て歿せる時は、彼が三十四歲の時なりき。

主義

景樹はもと因幡鳥取の人、本姓は荒井氏、桂園と號す。幼にして歌才あり。京に出でゝ香川黃中に學び、後養はれて其の家をつぎぬ。常に弟子に誨へて曰はく、歌は詞を主として談理をなすべきにあらずと。堂上流及び復古流の風を顧ずして頻りに新語を用ゐぬ。蓋し彼の歌學に於て蘆庵に一歩を進めたるものは、歌の意と詞とを相應せしめて聲調を整ふべしとせる點にあり。今古の傑作いづれかこの實を得ざりしものぞ。或は規を嚴にして用語を束縛し、或は古を尙びて一も二も昔に從はんとする如きは、眞に美術の何物たるを

覺らざるもの〻所爲なり。末代の景樹に至りてこの了解を見たるは、消えかかりし少さき和歌の燈、再び微光を顯せるにも譬ふべし。此の時や國學の大勢は所謂平田流の神道と、語學的研究とに專らなりし間なるを以て、この歌學は彼等學者輩の大なる抵抗を受けず、一代の秀才を招いで其の門下に集らしめぬ。穗井田忠友(二四五二—二五〇七)、八田知紀(二四五九—二五三三)、渡忠秋、熊谷直好(二四四二—二五二二)は彼の四天王と稱せらる。天保十四年三月歿す。年七十六。家集を桂園一枝二卷とす。(文政十一年版、改後、拾遺集一卷の編あり。)彼れが歌學及び學殖を覗ふべきものに、古今集正義、新學異見、百首異見等あり。其の門下の明治の世に生存せるもの少なからず。殊に渡忠秋の如きは今代に桂園派の勢力を扶殖するに與つて力ありき。今宮中御歌所は多く此の派に屬する歌人を有す。

門下

おぼつかなおぼろ〳〵と我妹子が垣根も見えぬ春の夜の月

徒に思ひし峰の一つ松こよひ月こそすみのぼりけれ

あさなぎに網引やすらむ菅浦のかすみを傳ふ海士の呼聲

おぼつかな木の間にみゆる三日月もちるばかりなる木枯の風

夢ならでたど〳〵しきは目に見えぬ神をしるべの敷島の道

おりたちて昨日かつみしせり川のたけだのはらに秋風ぞ吹く

長歌の消長

平安朝以後跡絕えたりし長歌が、眞淵等の復古派によりて形のみながらも回復せられたりしに、桂園派起りて歌權全く其の手に歸してより、長歌また殆ど煙滅せり。畢竟一種の貴族的文學として、其の消長はわが全國民文學上に重大なる位置を有する物にはあらざれども、細く長き國風として尙多少の注意を拂ひ置かざるべからざる事項なり。

第五章　隆盛時代(二四四七—二五二七)

大御所の治世

第一節　文化文政の江戸

德川氏江戸に府を開きしより茲に一百八十年、代を重ぬること十代、內治外交次第に繁きを加ふるに至れりと雖も、幕下の江戸は、今や盛なる文華の中心となり、士民上下既に泰平になれて、苟も安逸を希ふの風を生じ來り、天明、寬政、享和、文化、文政、天保の御所家齋十一代の將軍として職に備れるより、天明、寬政、享和、文化、文政、天保の

間は德川氏榮華その頂點に達し、下には國民の自覺と外交の刺激とによりて、次第に武家の世の傾くをも覺らざりし頃なりき。この間凡そ五十年、さてこそ變れげにその昔御堂關白が繁榮身に極まりて子孫の福德をこの一代に枯せしにも比しつべきか。平安朝の泰平は藤氏の安逸を意味し、都鄙遠近は必ずしも叛亂盜賊の憂無きにあらざりき。大御所の殿中年立ちかへりて靜けき風枝を鳴さずと見えしも、實は外交のこと、海防のこと、大に議すべく、尊王的精神次第に志士の間に充實しつゝありし間なるを忘るべからず。家慶、家定、家茂を經て慶喜に至り、大政を奉還して代は王政の古に復りたる事、恰も賴通教通に傳へて、大權、院の御手に收められ、藤氏はたゞ員に備はるに過ぎざりし運命と相似たらずや。されど藤氏の安逸は優雅なる多くの文學を出したりき。寛政以降の江戸また多くの文學を產出せしむるを得たりしなり。たゞし、文運東遷して上方の韻文衰へ、之に代りて江戸に浮瑠璃榮えし由は前に述べしが、ついで、脚本、小說、俳諧ともに出でゝ江戸の文壇を賑はし、文化、文政、天保を經て現今明治の初年に及びしなり。此の中特に江戸文學として尊重すべきものは韻文にあらずして寧ろ散文小說にありとす。藤氏榮華の間、歌人に公任、和泉式部等あり、拾遺集、拾遺抄等の選述、歌合、歌の論の盛なるものありきと雖も、畢竟世は散文小說、隨筆、日記によりて代表せらるゝと軌を一にすと見て可なるべし。今當代の隆盛なる散文を敍するに當りては、まづ古きに溯りて其の原始の狀態より覗はざるべからず。蓋し江戸の散文は、第一期、第二期の京阪文學を繼承せりと云ふよりは、別に其等の期に於て江戸に生長せるものと見るを當とするによりてなり。俳諧、狂句等の輕文學もまたこの第三期を兼ねてこの期に敍すべし。これ理解に便なるものあるを信ずればなり。

第二節　俳文學

德川文學の第三期に於て重要なる文學が、一般に沈滯せる間、國學の隆盛につれて和歌の活動のやゝ見るべきものありしが如く、俳諧の短き詩形にもまた多少の活動ありしを見る。

和歌流行して師範家生じ、師範家生じて和歌邪道に陷りたりしと同じく、元祿以後、點取俳諧の流行は却つて俳諧を弄して、佶倔の風俗の調となさしめし

由は前に云ひぬ。この間に於て尚注意すべき價値あるものは、伊勢派より出でたる綿屋希因、白井鳥酔、美濃派の系によれる横井也有等なるべし。

盗人の後で棒ふる柳かな　希因
筒井筒朽ちにけらしな苦の花　同
桐の實のふかれ〳〵て初時雨　同
雛棚や昔ありける女顔　鳥酔
閑古鳥舟は向ふの岸にあり　同
門々の闇からふえる踊哉　同
初午や柳は緑小豆めし　也有
井戸堀の浮世に出たる暑さかな　同
火將は負れて出るや盆狩　同
追剝のながめて通す紙衣かな　同

かくて安永、天明に及び、輕薄邪曲に陥りし俳壇に於て、鳥酔、也有等に殘存せる斯道の光明をたどりて、正風の復興を成就せるものあり。谷口蕪村（一七二六—一七八四）、炭太祇（一七一四—一七七一）、浦樗良、加舎白雄、加藤曉臺、大島蓼太、高桑闌更、高井几董となす。

元祿の昔に於ける芭蕉の俳味は、豪放なる談林風に對して幽遠閑寂の趣ありしに、これは纖巧機警にして肇調の美を尚ぶ點に差異はありと雖も、失はれんとせる詩界を復活せしめて、俳諧を文壇上の物となさん事に勉めたる點に於ては其の軌を一にす。天明の俳人は常に自ら蕉風と稱しぬ。たゞ其の向ふ所が新しかりしのみ。

白菊に露置き得たり置きえたり　嵐山
のこりそめぬる今朝の月かげ　几董
借馬に秋を涼しくまたがりて　樗良
濃酒ありと婦の申しけり　蕪村
小暗きと明きと燭の二所　董山
手こねの香爐うち守りつゝ
かくて世に四位となるべき身なりしを　村

野上の君が色にしづみぬ　　良

（一夜四吟の一節）

俳諧の本義は二句の附け方、三句の移の外、一卷の首尾の上に妙趣を要する物なるに、當代の俳諧は二三句の附味には機警の趣を有するも、全篇の始終に於て甚だ單調なるの憾あるは、此時代の彼の時代に及ばざる點なるべきか。されどこの特色は確に俳句の上には成功せり。元祿の蕉風は比較的單調なる閑寂主義によりて、自然界を題目とする事多かりしに、これは多端に人事を觀破してその內面をも描寫せんとしたるは、題材の一轉進と言はざるべからず。もとより自然界の客觀的描寫にも見るべきもの少からず。

蕉村。谷口、また與謝を姓とす。攝津の人、夜半亭と號す。若年江戸に出でゝ早野巴人（其角の門人、後雪門に入る。）に學び、滔々たる俳壇點取と酒色とに忙はしく、名利の宗匠數十を以て數ふるが間に立ちて、徐に彼が錦心を練磨せりき。彼が師巴人は既に時弊に入ること少き俳家たりしなり。

蕉村

巴人

鳴きながら河越す蟬の日影かな

女郎花折るや觀世が駕のうち

埋火や野邊なつかしき蕗の薹

蕉村の句

蕉村彼に就いて俳を學ぶや、極めて自由なる思想を鼓吹せりき。蕉村の「昔を今」の序に曰はく「亡師予に示して曰はくそれ俳諧の道や必ず師の句法に泥むべからず時に化し忽焉として前後相顧みざる如くなるべしとぞ此の一棒下に頓悟してやゝ俳諧の自在を知れり」と。

柳散り水涸れ石ところ〴〵

腰ぬけの妻美しき炬燵かな

うは風に蚊の流れゆく野河かな

鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな

御手討の夫婦なりしを更衣

さしぬきを足でぬぐ夜や朧月

五月雨や大河を前に家二軒

負けまじき相撲を寢物語かな

太祇

春雨や網が袂に小提灯

春の海日ぬもすのたり〳〵かな

龜山へ通ふ大工や雉子の聲

太祇。姓は炭、江戸の人、後、京に上りて彼の地に住む。その長とする所は人事にあり。

蕪村の多面なるには一歩を讓ると雖も、佶倔卑俗を離れてよく俗事を美化せる手腕、決して凡と云ふべからず。天明の俳壇は彼の爲に大に振へるものと云るべきなり。

年玉や利かぬ薬の瞽三代

藪入の寢るや一人の親の前

欺いて行きぬけ寺や朧月

朝寒や旅の宿たる人の聲

寐よといふ寐覺の夫や小夜砧

行く程に都の塔や秋の空

樗良

白雄

踊らせぬ娘つれ行く十夜かな

犬を打つ石の扨て無し冬の月

樗良。志摩の人、始め伊勢派の乙由に學び、後蕪村と共に天明の新風を唱ふ。その才固より蕪村に及ばざること遠しと雖も、平淡にして雅趣を有し、當時伊勢派の俗調を拔出す。

山寺や誰も參らぬ涅槃像

火とぼしてあはれに見ゆる螢かな

長き夜をさま〳〵思ひあかしけり

兄弟が同じ聲なる鉢叩

我庵は榎ばかりの落葉かな

白雄。は、信州上田の人、春秋庵と號す。江戸に烏酔に學びて多くの門下を敎ふ。纖麗の作風よく敍景に長ず。

美しや春は白魚かいわり菜

二またになりて霞める野川哉

土舟や蜆こぼるゝ水の音　　曉臺

人戀し火ともし頃を櫻ちる

花芥子に組んで落ちたる雀かな

めくら子の端居淋しき木槿かな

曉臺。尾州名古屋の人、蕉村に私淑す。その句遒勁を以て聞さる。

雪解や深山ぐもりを啼く鳥　　蓼太

日暮れたり三井寺を下る春の人

蜩のなけば瓢の花落ちぬ

秋の山ところ〴〵に烟たつ

恐にかへる曉聲や鉢叩

秋の雨胡弓の絲に泣く夜かな

蓼太。江戸の人、吏登に學び蕉村に模せりと雖も、漸く耳近くして俗氣を帶ぶるに至りしは、既に後世月並派の先驅たるものか。俗間に傳唱せらるゝ句二三を例せば。

世の中は三日見ぬ間の櫻かな

五月雨や或夜ひそかに松の月

ひつとしてもどれば庭に柳哉

馬借りてかはる〴〵に霞けり

更くる夜や炭もて炭をくだく音

闌更。加州金澤の人、希因に學びて京に住す。平淡溫雅の中、少しく卑俗の風を帶ぶ。

川船や雲雀啼き立つ右左　　闌更

五月雨や鼠の廻る古葛籠

冷飯に秋立つ獨住居かな

枯蘆の日に〳〵折れて流れけり

尙同代の俳士中主なるものゝ二三を云へば、

愛き戀に似し曉や年忘　　青蘿

蘭の香や袴著習ふ女の童　　麥水

家遠し海苔干す女何諷ふ　移竹
しみ〳〵と秋を惜みぬ二三人　嘯山
萩の花一もと手折る長さかな　百明
朝寒や閼の扉の開く音　蝶夢
大佛の柱潛るや春の雨　二柳
黒髪の顔へこぼるゝ砧かな　涼帒
山水に病後の僧の苦吟かな　召波
春の寒たとへば蕗の苦みかな　成美
門口に風呂たく春の泊かな　几董
朝霧や二人起きたる臺所　同

蕪村太祇等によりて復活せられたる俳諧は、恰も古今集の古を望める新古今集の當時の如し。而も定家、家隆等の明星凋落して世は二條、冷泉等師範家の説を尊奉するに至りしは、文政、天保に及びて俳諧が卑俗に陷り雅致なく趣味なき野談平語となり下れるに比すべし。これらの傾向を代表するものは成田蒼虬、櫻井梅室等とす。

俳諧の頽落

刀もさゝで同役へ行く　蒼虬
歯の薬こぼれぬ樣にもの云ふて　梅室
うつくしけれど酒は手強き　蒼虬
ろの羽根の袖にかゝるを涼しがり　梅室
うなりの長き芝の大鐘　蒼虬
木戸明けて鍵を下げたる有明に　梅室
菊に寢たがる犬たゝきけり　蒼虬
宮樣の御用の芋はこゝらから　梅室
無分別にはからかふが無駄　蒼虬

櫻持ちて人は歸るに旅の空　蒼虬
鶯や隣まで來て隙のいる　同
靜なるものを尤めて秋の月　同

元日や鬼ひしぐ手も膝の上　梅室

湯屋の嗅人見下して御慶かな　同

名月や草木に劣る人の影　同

更に雅趣ある所を見出し得ざるにあらずや。たゞ此の間に小林一茶(二四二三―二四八七)あり、洒脱にして滑稽の作に長ず、談林に似て談林ならず、地口に近くして毫も野卑なる憾なきは、他に於て比を見ざるものあり。

陽炎や手に下駄はいて善光寺

下谷一番の顔して衣がへ

キリ〳〵しやんとして咲く桔梗かな

行秋を尾花がさらば〳〵かな

下駄ころりからりきやつらが夕涼

されどこはひとり一茶に於てこれを見るのみ、他の滔々者流に至りては既に墮落陋俗、濟ふべからざるものあるに至れり。

俳諧は斯くの如くにして俗調に陷りぬ。されば市井の間之を弄ぶもの日に

多きを加ふと雖も、そは無學者俗輩の尚入るに易かりしが爲にして、文壇爲に多幸なりしにはあらざりき。かくて數十年の後、明治の近代に新派の勃興を見るまでは、此の調は文壇以外に下層社會の翫物となり畢りぬ。

俳家の着眼は自然を寫し人事を撮るに他と自ら異る趣を有す。此の着眼を散文上に移したる者は所謂俳文なり。芭蕉以來この風の文數々出で、許六が編せる風俗文選中多くこれらを載す。

鹿島記行　芭蕉

洛の貞室、須磨の浦の月見に行きて、

松かげや月は三五夜大納言

といひけむ、狂夫のむかしもなつかしきまゝに、此秋鹿島山の月見んとて思ひ立つことあり。伴ふ二人、ひとりは浪客の士、一人は水雲の僧、僧は鴉の如くなる墨の衣に、三衣の袋を襟に打ちかけ、出山の尊像を厨子にあがめ入れて脊中にせおふ。杖曳きならして、無門の關もさはるものなく、天地に獨歩して出でぬ。今ひとりは僧にもあらず俗にもあらず、鳥鼠の間に名をか

うふりの、鳥なき島にも渡りぬべくて、門より船に乗りて、行徳といふ所に至る。船をあがれば馬にのらず、細脛の力ためさむと歩行よりぞ行く。甲斐國よりある人の得させたる、檜もてつくれる笠を、おの〳〵戴きよそひて、やはたと云ふ里を過ぐれば、かまがいの原といふ廣き野あり。春甸の一千里とかや、目も遙に見渡さるゝ、筑波山むかふに高く二峰ならび立てり。かの唐土の雙劍の峰ありと聞えしは、廬山の一隅なり。

雪は申さず先むら、さきの筑波かな

とは我門人嵐雪が句なり、すべて此山は日本武尊の言葉をつたへて、連歌する人のはじめにも名つけたり。和歌なくばあるべからず、句なくば過ぐべからず、誠に愛すべき山の姿なりけらし。萩は錦を地に敷けらんやうにて、爲仲が長櫃に折入れて、都の土産に持たせたるも、風流にくらからず、きちかう女郎花かるかや尾花みだれ合うて、小男鹿の妻戀ふ聲いとあはれなり。野の駒、所得がほにむれありく又あはれなり。日既に暮れかゝる程に、利根川のほとりふさといふ所につく。此川にて鮭の網代といふものをたくみて武江の市にひさぐものあり。宵の程その漁家に入りてやすらふ。夜の宿腥し。月くまなく晴れけるまゝに、夜船さしくだして鹿島に至る。盡より雨しきりに降りて、見らるべくもあらず。麓に根本寺のさきの和尚、今は世を遁れて此所におはしけるといふを聞きて、尋ね入てふしぬ。頗る人をして深省を發せしむと吟じけむ、暫く清淨の心を得るに似たり。曉の空いさゝか晴れぬるを、和尚おどろかし玉ふれば、人々驚き出でぬ。月の光雨の音、たゞあはれなる景色のみ胸に滿ちて、いふべき言の葉もなし。はるばると月見に來たるかひなきこそ、ほいなきわざなれど、かのなにがしの女すら、時鳥の歌得讀まで歸りわづらひしも、我爲にはよき荷擔の人ならむかし。

月はやし梢は雨を持ちながら　芭蕉

雨に寢て竹おきかへる月見哉　曾良

姨捨山賦　樗良

更科の月明らかなる八月八日の夜、姨捨山に登れば、鏡臺山は冠が岳のむかふにたてり。筑摩川花やかに麓をめぐり、雲井橋は名のみして水上の月を

やどす。田毎の水の音は、ひとへに山の松風にしらべあへり。寶が池、蛙が池、更科近く流れ、稻荷山、八幡の里、川中島は白雲のたち居に見え隱る。吹く風精神をせめて直しく、見るものの目に動きてあはれなり、粥をすゝり香を炷して、しばらく石上に心をすます。

自然人事の觀察に趣味あるが中にも、簡潔と機智とは此の種の文の特色とする所なるが、安永、天明の間、俳諧再興の頃に當りて出でたる横井也有（二三六二―二四四三）に至りてこれを大成し、和漢の故事と通俗の人事とを說いて意想天外より落つるの觀あり。彼は尾張の士、性洒落にして俳をよくす。文集の勝れたるものを「鶉衣」とす。行文輕妙、滑稽を恣にして卑俗に陷らず。蓋し滑稽文の上乘なるものなり。

百蟲譜

蛙は古今の序にかゝれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。おぼろ月夜の風靜まりて遠くきこゆるはよし。古池に飛んで翁の目さましたれば、このものゝ事さらにも誘りがたし。

芋蟲は腹たつものにたとへ、毛蟲はむづかしき爺の號とす。春むし客むしは名のみにして蟲ならず。油蟲と云ふは蟲にありて惡まれず、人にありてきらはる。蟹のあゆみに譬ふべきものこそなけれ、たゞ原吉原を籠にのりて、富士をながめ行く人には似たり。

借物の辨

昔男ありて、身代もならの京、春日の里にかす人ありてかりにいにけるより、やどとなき雲の上人も、かりにだにやは君はこざらんと、露深草の深入りしたまへば、鬼の樣なるものゝふも霜月頃よりは、地藏顏して人にたのむのかりがねは、尾羽うち枯して春きても越路にもかへらず、かりの宿に心とむなと人をだに諫むる先達も、からでは現世の立ち難きにや、二季の臺所には懸乞の衆生來りて、色衣の長老これが爲に拜み給へば、又ある寺には有德の知識ありて、これはこちから貸し付けてきりの算用滯れば、貧なる檀方を呵責し給ふ。

近年新派の俳句勃興せると共に、この風の散文も人の試むる所となり、特に寫

生文として、小品にも小說にも應用せられ、率直にして古典的束縛を離れたる一種の風骨は、現代文壇の一部を彩る物となるに至れり。

第三節　狂文學

冠附と前句附

物盛にして必ず分岐を生ず、茲に俳諧の附合より一轉したるものに冠附及び前句附といふあり。冠附とは上に五文字を題として之に七五の句を附け、前句附とは七七の句を題として別に五七五の句を作るにあり。德川氏の初より早く始りしものゝ如く、元祿十三年の頃の古本に既にこの事見え、寶曆、明和以後盛に行る。

題　一二町　　附　行ひてはたゝく雪の下駄
同　いつの間に　　同　片しは失せて雛の後家
同　いろ〳〵に　　同　つかふ寡の一つ鍋　〔冠句附の例〕
題　きびしかりけり〳〵
附　日の本はそらまでとゞく假名遣
江の島のしけは嘶の種になり

川柳の狂句

てゝ親はいつも母より目が屆き
御地頭は米のかげにもたかくなり　〔前句附の例〕

寶曆、明和より安永、天明に亘りて前句附の點者に柄井八右衞門あり。號を綠亭川柳と云ひ、達眼を以て人に推さる。前句附の題を廢して單獨なる附句のみの短詩を始む。彼の創始に係るによりて川柳と稱し、その內容が、俳句は寂の中に自然、人事を歌ふ優長なる趣味を特色とするに反し、川柳は用語の何たるを選ばず、うがちの中に滑稽を求めて、警句よく人の興を催すを性質とするが故に、また狂句とも稱せらる。

一時のはぢ一生の德となり
結納をおつかなそうに覗いて見
小便もせずに平家は船に乘り
ねがはくは嫁の死水とる氣なり
そへ乳してつひ洗濯が夢になり
武者一人叱られて居る土用干

狂歌

末長くいびる盃姑さし

湯殿から忘れた時分よめは出る

風ふけばどころか女房あらしなり

仙人さまあとぬれ手でだきおこし

門口に下女が親父はいなゝかせ

何とも申しかねぬから借りに來る

仲人は酔うて云ふのがほんのこと

喰ひますかなどゝ文王側へより

川柳の狂句が俳句の優雅より一轉したると殆ど軌を同じうして、和歌の狂態を弄ぶものに狂歌（狂歌は興歌にて興に乘じて戯れたる也との説もあり。）あり。由來わが國民の快濶性は早く萬葉集中に戯歌を有し、古今集中に誹諧歌の名ありしが、佛教的冥想の感化ある所、未だ充分の發展を見ることなくして近古の世に下りぬ。鎌倉、室町の代に及びて戯曲に狂言の一藝世の迎ふる所となりしが如く、歌にも滑稽諧謔のものを生じ、建保二年（一八七四）東北院念佛の時、上流の人々十二番の職人を題目として歌合せることあり、（群書類從雜部に收む。）其の後（年代未詳）これに倣ひて鎌倉鶴岡八幡放生會に於ても、十二番職人歌合の戯をなせし由傳ふ。されどこの體を狂歌と稱して世の弄ぶ所となりしは、室町幕府の世以後なるべし。（平家物語に、仲綱の「伊勢武者は皆緋威の鎧著て宇治のあじろにかゝりけるかなとあるも狂歌の體なれど、この稱はなし。太平記十四に「其比延武二年）何某なる嗚呼の者かしたりけむ、内裏の扉に一首の狂歌たぞ書きたりける。賢王の横言に成る世中は上を下へぞ歸したりけるなどあるぞこの名の物に見えたる始なるべき。永正に狂歌合（一卷、永正五年正月二日會合。左右十番より成る。群書類從雜部に收む。）あり。土佐光信畫と稱する七十一番職人盡歌合（群書類從雜部に收む。）もまた多くの趣味ある狂歌を有す。

左　鍛　治

月にねぬ宿とや人の思ふらむいつも絶えせぬ相槌の音

右　番　匠

墨がねの直きをたゞす身なれども傾く月にかゝはりぞなき　（京北院職人歌合）

左

思ひ寢の程も恥し正月のもちひを食ふと夢に見しかな

右

御祝のよそにさゞめく響をもきかぬ耳こそびんぼうげなれ　（永正狂歌合）

山陰や木の下やみの黒米のつきいでゝこそしらけそめけれ

豆かくるさはりもいとゞまさる哉せとの高木の葉がくれの月　（七十一番職人歌合）

徳川時代に入りて連歌の變態たる俳諧の流行せし頃、京阪の俳師にして、側、狂歌を作れるもの往々出づ。嬉遊笑覽に「後世は連歌師また俳諧師の詠りしを、專ら好みてよめるは、建仁寺雄長老、八幡山信海、生白庵行風、江戸に徳元、卜養、未得等就中聞えたり云々」と。狂歌詠方初心式に

半井卜養風

布袋殿しんかんしんとして御座る内にはいもひもしんも有

生白堂行風風

一番の風の手なみに雪氷川下さして雑（サラ）〳〵〳〵

豐藏坊信海風

何にやら似たもの人のあだ口はまことに浮世の嵯峨の松葺

落首雜談風

鯛屋貞柳

木綿物著たる男はさもなくて絹きる人の慾のふかさよ

元祿の頃難波に鯛屋貞柳（二三一四―二三九四）あり。淨瑠璃作者紀海音の實兄たり。八幡山の信海に師事して狂歌を學ぶ。その友、奈良古梅園、大なる墨を造り「て禁裏の叡覽に供したりしを

月ならで雲の上まですみ登る是はいかなるゆえんなるらん

と狂じ、これより油煙齋の號あり。享保十九年八十一歳にして歿す。辭世の句に曰はく。

百居ても同じ浮世に同じ花月はまん丸雪は白妙

松尾芭蕉

同じ頃の松尾芭蕉にもまたこの試あり。狂歌猿の腰掛に、

是翁俳諧のみならず狂歌にもあそびしにや

などてかくいそがしいとて二階から落ちての後は隙になりけり

あみざこを升にはかりて賣人は買人よりも哀なりけり

風になびく富士や三里に炙すゑて行衞も知らずありく西行

など詠みすてられしことあり内外俳道の祖とする貞德、宗鑑、守武を始め皆

狂歌數首あり、狂歌俳諧その源一也、俳諧は連歌によりて狂し、狂歌は本歌を基として狂するなれば云々。

よく當代狂歌の消息を傳へたりと云ふべし。其の後安永、天明の頃に至つて、文運東遷し、狂歌も京阪を去りて江戸に移るや、茲に從來俳師の餘興としての

狂歌の獨立

み行ひ來たりし隷屬の狀態を離れて獨立の地歩を占め、狂歌師を以て專門とする者出で、江戸ッ子の特性と見るべき輕快機智を發揮するに至りたり。當時狂歌師の主なる者を唐衣橘州、四方赤良、宿屋飯盛、朱樂菅江、手柄岡持等とす。

唐衣橘州
狂歌會

橘州は小島源之助といひ四谷に住す。始め和歌を學び、安永四年二月始めて狂歌會を起して友を集めしより、四方赤良、大根太木、大屋裏住、平秩東作、元の木網、其の妻智慧内子、朱樂菅江等相ついで集り、鹿都部眞顏、馬場金埒、つぶりの光、三陀羅法師、芍藥亭長根等も亦風をのぞんで起り、天明三四年に至り、德和歌萬載集十七卷、同後萬載集十五卷、故混馬鹿集二十卷等の選ありしより、狂歌は實に一種の勢力となりて、この道に名を出せるもの忽ち幾萬の多きに上れり。

四方赤良

豈に盛なりと云ふべからずや。就中最も勝れたるを四方赤良、宿屋飯盛とす。

宿屋飯盛

赤良（二四〇九―二四八三）は本名太田覃。南畝、蜀山人等の號あり。滑稽諧謔の間に放浪せる一代の奇士にして、狂歌壇上獨歩といふべし。狂歌鰐の跋に「先生之於狂歌實中興之祖也」と贊せるは方に當れり。其の歌集を千紫萬紅、蜀山百首とす。飯盛は本名石川雅望、六樹園と號す。國學に精通して有名なる雅言集覽の編あり。赤良の豪宕はこれなしと雖も、辭句整ひてよく可笑味を有す。

柴もなき腦にあはれは知られけりしぎやき茄子の秋の夕暮　橘州

風鈴の音はりんきの告口か軒ばのつまに秋の通ふを　同

わが戀は旅の行手の長繩手たゞ果もなくまつばかりなり　同

鶯は竹に生れし故やらむ聲のびやかに節の程よさ　同

生酔の禮者を見れば大道を横すぢかひに春は來にけり　赤良

世の中はさてもせはしき酒の燗ちろりの袴きたりぬいだり　同

ほとゝぎす鳴きつるあとにあきれたる後德大寺の有明の顏　同

すみ田川今は吾妻の都鳥業平などは在五中將　同

山の神さつた峠の風景はみくだり半にかきもつくさじ　同
歌よみは下手こそよけれ天地の動き出しては溜るものかは　飯盛
はつ咲の梅は秤か市人の二りん三りん爭うて見る　同
わざはひも三年ばかりふる壁の鼠穴よりはいる梅ヶ香　同
霞さへ春さへ今朝はたつものを併はすはりの腰の重さよ　菅江
天の原月すむ秋をまふたつに振り分け見れば丁度中まろ　同
爭はぬ風の柳の絲にこそ堪忍袋ぬふべかりけれ　眞顔
春のくるけしきの森の下蕨手をかざしては延び上りけり　同
吉原は花のさかりになりにけり吉野ははだし傾城は下駄　岡持
十五夜としころ引きあふ十三夜月の影きよ雲のみほのや　東作
鶯も蛙も同じ歌仲間經よむもありたゞ鳴くもあり　裏住
かくばかりかはる姿や梅干も花をさかせしすいの身のはて　木阿彌
多かりし酒屋のかけもこりずまに今朝とり上ぐる屠蘇の盃　つぶりの光
雪ならばいくら酒手をねだられん花のふゞきの志賀の山越　金埒

きぬ〳〵の情をしらば今一つうそをもつけや明六つの鐘　三陀羅

前の引文の如く「狂歌は本歌を基として狂するなれば」據り處たる古歌古文を知了せざれば、以て可笑味の全般を解すべからず。これ寧ろ和歌の狂態と云ふべくして純然たる平民文學とは稱し難き點なり。この精神を散文に移したる者は狂文なり。四方赤良の「よものあか」「四方の留糟」を始め、風來山人の六部集、山東京傳及び式亭三馬等の戲作中に見るべきものあり。

狂歌新玉集序

久かたの天、輕口をひらき、あらがねの地、重口をむすびしより以來、神代のひかし、天鈿女の乳房には、猿田彦も手裏を拍ち、月の御國、何がし魯者の花には、瞿曇も微笑をゆるし給へりき。されば麒麟に感ぜし翁も時ありて笑ひ、胡蝶となりし白者も笑を大方にとらん事を愧づ。青樓の春の風に、千々のこがねの笑をかひ、廬山の雨の夜に、三つの笑ひの友を偲ぶなど、いづれか笑の種子ならざる。わきてあら玉の年立歸る朝には、山も笑めるがごとしとか や。花になく鳥追も笑上戸の盃を擧げ、街に諷ふ萬歳も舌皷をなん拍ち添

へける。やゝ春深くゑみを含むに到ては、柳は綠の眉を開き、梅は白き齒もとをあらはす。はるの詠めの種々の歌ざれたること、戯たる風をのみ書列ねたる後に、舊年の暮のしまひのをかしき笑ひの中に、劔太刀はかせもちをうしなへるがごとく、武士の道も掛乞に徵られし世の營の唯事まで、つゆ記て一卷とし、名づけて新玉狂歌集といふ。かく頤を解きぬれば、飛鳥川の淵はせゝら笑ふとも、礫石のいはほとなりて、こけ倒るゝほど、うま人のうまきわらひや、いづこのやい太郎冠者、あるにもたらぬわれらまで、この時に生れ遇へるを悅び、弓は袋に治れる代に腹皷うち、長閑き朝にお茶を沸して、わらはざらめや、樂まざらめや。

（四方の留糟）

閻王もさま〳〵の政を聞かせられければ、少しの暇もなきをりふし、獄卒ども地獄の地の字の付いたる高提灯を先に立て、一人の罪人を引き立て來れり。閻王はるかに御覽あれば、年の頃廿許の僧色白く痩せたるに手かせ首かせを入れ、腰のまはりに何やらんふくさに包みたるものをくゝり付けてぞありける。此者いかなる罪にてあるかと尋ね給へば、傍より俱生神罷り

出で申しけるは、此坊主は南贍部州大日本國江戸の所化なるが、堺町の女形瀨川菊之丞といへる若衆の色に染められて、師匠の身代からくれなゐ、錦の戸帳は道具市にひるがへり、行基の作の彌陀如來は、質屋の藏へ御來迎、若衆の戀のしすごしに、尻のつまらぬ尻がわれて、座敷牢に押込められ、慕ふ甲斐なく己が身を、宇津の山邊の現にも、逢はれぬことを苦にやみて、むなしくあの世を去りけるが、斷末魔の苦にも、忘れ得ぬは路考が俤なりとて、此處までも身をはなさず、あの腰に付けたるは鳥居清忠が畫いたる菊之丞が繪姿なり。若氣とは云ひ乍ら、師匠の目を掠めたる科一々鐵札に記し置きたり。

（風來山人、根南志具佐）

妙法蓮華經普門品第二十五牒目爾時無盡橫町と云ふ、喇竿のすげかへ黃楊の櫛、さし櫛の通る新道に黑格子の駒寄作り、血の道の藥と云ふ金看板をかけ、布簾に萬字を染めたるは慥に地獄ならんと思の外、極樂の中品中條流の女醫者、しかと思へばさにもあらず、薪屋藥にはあらねど產前產後を守り給ふ子安觀音の出張なり。觀音はやめの藥を調合して居給ふ折節、表に案內

して天の庭戸を押開き入り給ふは、夫とは思ひかけまくもかしこき天照皇太神なり。觀音出で向ひ給ひ是は〳〵どう云ふ因緣でか珍しい神の影向、さあ〳〵是へと合掌してあひさつし給へば、太神宮も三拜し給ひ、拍手二つうつて天の諸手結び十たから結び祝詞して宣はく、今のおたづね申したは外の事にてもなく、去んぬる神在月、日の御崎の大社に八雲立つ出雲八重垣駒込の久兵衛ならぬ八百屋萬の神々、平假名で起請に書るゝ神達迄、のこらず參會しで申合せしは、近年氏子ども殊の外艶氣になり神もゆるさぬ緣を結び、末をとげざる其時は、緣を結ぶの神さんがうらめしいわいナアなぞと、其のうへに手前勝手な緣切の祈禱のと、又しても神おろし、凡夫盛に神々もその政道に手がとゞかず、夫については往古より申子と云ふ事、神の支配とも佛の支配ともさだまらず、さうは〳〵神々も又江の藝者が二てう皷をうちはなつことの如くかいしき手が配らねば、神慮安からず、よつて此の以後は彼の申子の事は佛の支配に定めたく、世尊は孕を守り給ふ佛なれば、此儀内談いたし度く、輪のぶら下つたる御耳を振立てきこしめせ。

佛語に拈華微笑とあれば、華を拈つて莞爾と笑へば釋迦も迦葉も鵜婆も妓夫も皆一樣と思へども、腹を抱へて我から笑ふと、こそぐられて笑ふとの笑ひ樣に差別あり、撒屁の音を聽きつけし姉さんの忍び笑は振袖の外にも漏らね、どもろこしの三笑は日本にまで音響き今に傳へて聞及べり。すべて笑も多かる中に、げら〳〵笑ふは馬鹿笑、呵々と笑ふは小說笑、オホ、と笑ふは御輕薄、アハ、と笑ふは空笑、かんらからとは勇者の笑、かッらからとは軍書讀の笑なり。其の笑を取る者は芝居の道化方なりと思ひ付いたるのべ錢、だして撮した昔繪は好事家への御笑草、その可笑しきこと御臍をしてたながへなさしむ。かつて聞くだんまり坊、雉子はけん〳〵鳴くばかり、父は長柄の長者が娘、玉屋の花火を好まれし幽王の奥樣から、笑ふて三百つりを取るべき苦虫の先生。

（山東京傳、指面草）

第四節　草雙紙

（式亭三馬、道化物語序）

德川氏の前半、上方に於ては平民の勢力によりて文化大に進み、散文學に於て

草雙紙

赤本

は假名草紙より浮世草紙を出して、發達せる小說の體を得たりし間に、江戸は未だ草創の際に屬し、諸事甚だ整はざりし頃なるを以て高尙なる文學の行るべき餘裕を有せず。たゞ韻文としては金平本等の外、目に見るべき文學出でず。散文には文字よりも繪を主とする草雙紙といふもの行れたり。廣義に云へば草雙紙の名の下には、赤本、黑本、靑本(一名黃表紙)及び合卷物をも含む。始、首題とする所は御伽草紙より出でたる「文正」、「鉢かつき」、「烏帽子折」の如き、童話として行はれたる「桃太郎」、「かち〳〵山」、「猿蟹合戰」の如き、又は「辨慶」、「朝比奈」、「金平」の武勇談の如き、極めて幼稚なる短話を粗笨なる繪にあらはし、その餘白に繪解の文字を入れ、一冊の紙數僅に五葉にて二冊或は三冊仕立なりき。貞享の末より、丹色の表紙をかけ、一面に外題を標せり。世にこれを赤本と稱す。然れども此種の本はたゞ畫工の名を記すに止りて作者の名を署する事なかりしを以て、當時如何なる作者の存在したりしかは明に知るを得ず。繪を主として文章之に從ふが如き狀あるを以て見れば、畫家にして文才あるもの、或は文士にして繪をよくせしものゝ作せる所なるべきか。享保の頃、親水堂丈阿

黑本

靑本
黃表紙

內容の進步

なるもの始めて著す所の赤本に己が名を署し、下に戲作の二字を加ふ。署名及び戲作の稱は卽ち彼に始る。此頃より黑き表紙を用ゐて黑本出づ。されどそは表紙の異るのみにして內容は殆ど差なし。安永の頃に至りて江戸旅籠町の地本問屋鱗形屋より、萌黃色の表紙に鳥居風の外題繪をかけたる草雙紙を出しぬ。之を靑本と云ふ。後、黃色にあらためたるより黃表紙とも稱し、又もとの名に從ひて靑本とも呼べり。此の如く表紙は三轉し、彩色繪の外題を用ゐ、又よく賣れたるものは袋入ともなせる事ある程なれば、黃表紙盛行の時に及びては、赤本既に絕え、黑本は古版としてのみ僅に行る。從つて內容も大に面目を一新し、今までは童蒙を離れても、尙、妖怪、實錄、合戰を主なる題目となして、未だ充分なる江戸文學の特色を發揮するに至らざりしに、安永の四年戀川春町が自畫自作の「金々先生榮華夢」二冊を出して滑稽的描寫をなしてより、この趣向いたく世の迎ふる所となり、之より黃表紙は文學として世を諷刺し大人の願を解くものとなるに至りたり。三馬が臆說年代記にこを名作廿三部の卷頭に列し、且つ「野暮と化物箱根のさきに送る」と云ひ、「當世風體此の時

安永天明の江戸

より始る」と云へるはこの進歩し來れる消息を傳ふるものなり。蓋し安永、天明の間は八代將軍が享保の改革に文武をはげまし、殖産の道を奬勵せし結果、上下富有にして風俗婬卑奢侈に進み來り、紅繪、錦繪發達し、淨瑠璃各流競ひ行はれ、遊子通人放逸をあやしまず、芳原、深川は不夜城となり、十八大通の名、人の羨む所となりし時代なるを以て、輕快樂天なる江戸人士の特色は漸く文藝上に現さるゝに至りしなり。先に述べたる狂歌、狂句の起りしも全く此間より

戀川春町

明誠堂喜三二

とす。此の間黃表紙の作者として名ある者は、戀川春町、明誠堂喜三二、芝全交、市場通笑、唐來三和、烏亭焉馬等とす。春町は本名を倉橋といひ通稱を壽平と云ふ、小石川春日町に住せるによりて彼の號あり。其著凡そ三十餘種、「高慢齋行脚日記」、「鸚鵡返文武二道」、「花鳥かくれん坊」、「三幅對紫曾我」、「楠無益委記」等世に知らるゝ者少からず。又畫を島山燕石に學びたるを以て、かれの雙紙は概ね自畫自作に成る。喜三二、本名は平澤常富、羽後秋田の藩士、江戸に出でて下谷三味線堀の邸内に住す。狂歌を能くして手柄岡持と號す。戲作數十種の内世に稱せられたるを「文武二道萬石通」とす。泰平の餘、諸侯の遊惰に流

芝全交

れたるを諷刺せる趣向なり。「鐘入七人化粧」、「案内手本通人藏」等亦名あり。

頼朝公御前の人を退けて仰せけるは、如何に重忠、われ四海を治めしより日本の大名小名安堵の思を爲すと雖も武備に怠る心賞すべからず、治世と雖も文ばかりにては治め難し、今鎌倉の大小名、文に傾くもの何程、武に逸る者何程といふ事を汝が智慮を以て計るべし。

重忠「所詮文武兩道を心がくる武士はなければ、どちらへかかたより申すべし、又文でもなく武でもなきぬらくら武士多かるべし、三つに分けてお目にかけませう。

（文武二道萬石通）

吉「お人はらひの御用は何であらう、何か文福茶釜で飲菱を飲むといふ聲が聞えた。

吉「ちゝぶ殿はしゝさうをさとると云ふが、お寺から使のくる事を悟るのかね。

吉「さればもし雙六のさいの目の事か。

芝全交、本名は山本藤十郎、江戸の人、芝飯倉町に住せる狂言師なり。著す所戲作は三十種、就中「合羽大佛緣起」、「大悲の千鎌本」、「拜壽仁王參」、「鼻下長物語」等

唐來三和

最も名あり。三和、俗稱を和泉屋源藏といふ。江戸の人、もと士分たりしが、故ありて流浪し書肆蔦重の義弟となる。天明九年に出せる「天下一面鏡の梅鉢」大に世に行る。此の如くして內容も次第に複雜を要し、寓話、怪談、敵討より世上の情話にもわたり、滑稽のうちに文學的技能をあらはす性質のものとなり來りぬ。これらを隆盛期の前驅となす。

山東京傳

彼等についで出でたるを山東京傳とす。機智に富み文才あり。先輩を凌ぎて青本中興と稱せらる。京傳は本名岩瀨醒、通稱を京屋傳藏といふ。寶曆十一年八月を以て江戸に生る。その先は太田資持の家臣より出で、後、伊勢に住す。父傳左衛門に及びて江戸に出で、深川木場町伊勢屋某の養子となり、二男二女をあぐ。長は卽ち京傳にして次は京山なり。京傳人となり狷介にして奇才あり。狂歌を嗜みて讀書を好まず。畫を北尾重政に學びて北尾政演と號し、初期の畫作はまづこの號を以てしたりき。彼又若くして狹斜の巷に遊び、十八大通の首領たる大口屋治兵衛に從つて流連せりといふ。安永七年、歲十八にして始めて「開帳利益巡札遊合」二冊を出し、天明二年「御存知商賣物」を作りしより山東京傳の名を表しぬ。この雙紙大に世の歡迎する所となり、評判記にも上々吉と稱せられ、京傳の名頓に揚り、これより每春新作を出して、其の文も大に進み、寬政に及びては遙に衆作者を壓して、隆々の勢一世を靡けたり。

京傳の處刑

然るに彼が滑稽の才は洒落本の作にも適し、多く遊里の情態を描寫し居たりしに、寬政二年幕府令を出して洒落本を禁じ、翌年彼はその科にふれて手鎖五十日の刑に處せられぬ。時に年卅一歲なり。京傳これより巷說をつゝるをはゝかり、滑脫なる黃表紙の作も漸く減少し、內容も一般に變じて敎訓に重きをおきぬ。彼が黃表紙の作數大凡百數十。何れも彼が機智を示すが中に、「御存知商賣物」、「江戸生艶氣樺燒」、「心學早染草」、「京傳憂世醉醒」、「地獄一面照子淨頗梨」等世に知らる。

艶氣樺燒

爰に、百萬兩分限とよばれたる仇氣屋の獨息艶次郎とて、年も十九や廿と云ふ頃なりしが、貧の病は苦にならず、外の病の無かれかしといふ身なれども、生得浮氣な事を好み、新內節の正本などを見て、玉木屋以太八、浮世猪之助が身の上を羨しく思ひ、一生の思ひでに此樣な浮氣な浮名のたつ仕打もあら

ば、ゆく〳〵は命も捨てやうと、馬鹿らしき事を心がけたり。……偖又艶次郎は、俳優の内へ娘などの駆け込むを羨くし思ひ、近所評判の藝者おえんといふ踊子を五拾兩にて雇ひ、かけ込ませる積にて、惡い思庵に頼ませたれば、かけ込むばかりなら承知しましたと、おえんは早速支度をして、仇氣屋の内へ泣きながらかけ込む。

「自らと申すは、抑よるべ定めぬ轉び妻、此道に住み馴れて人の心を浮氣にする白拍子で御座んす。茅場町の夕薬師でこちの艶次郎さんを植木の蔭から見そめました。女房にする事がならばおまんまなと焚いても居たいのサ。夫もならぬと仰しやれば、死ぬ覺悟でご座ります。

などゝ、注文通りせりふを并べたてるを、家内の下女共是を聞いて

「内の若旦那に惚れるとは、千家か古流か遠州か知らぬが、とんだ茶人だ。

「若旦那の御顔では、よもやかう云ふ事はあるまいと思つたに、コレ女中さん、門違ではないかの。

「ハテ色男といふ者は、どんな事で難義をしやうか知れぬ物だぞ。最う十

黄表紙の轉化

南仙笑楚滿人

敵討物の流行

雨やるからもそつと大きな聲で隣まで聞えるやうに頼むぞ。

艶次郎の親彌二右衛門は、頼んだ事とは知らず、氣の毒に思ひいろ〳〵意見して歸す。

（江戸生艶氣樺焼）

京傳多才にして尚洒落本、讀本の作を出せりと雖も、そは其の條下に讓る。かくて文化十三年九月七日急病を發して歿す。年五十六。

寛政の風紀振肅によりて一頓挫を來せる諷刺滑稽の黄表紙は、次第に眞摯なる内容の者となり、殊に讐討物の流行を促して、讀本の性質と相近づき、轉じて合巻を生ずるに至りたり。この魁をなせる南仙笑楚滿人とす。通稱を楠彦太郎といふ。江戸の人、芝宇田川町に住す。天明三年「敵討三味線由來」を作れるを始とし、その後數種の作ありしが、寛政七年に至り、「敵討義女英」を出して大に行はれ、これより、敵討物世の迎ふる所となりて年増にその數を加へ來りぬ。戯作外題鑑享和四年の條に「敵討の本いよ〳〵行れ京傳馬琴此時より作す、今年の敵討三分の二にして其餘僅に戯作あり」と。文化二年に及びては、「今年新春いろ〳〵敵討多し、戯作十四五に過ぎず。翌年よりは殘らず敵討になりた

合卷

り」と。杣人は實に此中心たりしなり。されど彼はもと學才あるにあらず、たゞ〳〵時好に投じたるによりて大に行れしに過ぎざれば、その文藻その趣向今より見るに足るものあらず。その作三百餘種中傑作といふべきは「敵討三組盃」外二三を越えず。文化三年式亭三馬が書肆の勸めにより「雷太郎强惡物語」を作して從來の五卷を一冊とし、十卷を前後の二冊となしたるに、表紙外題の數も繁からず、製本も便利にして金子も掛らざるが故に、翌年より各書肆も次第に此風を學ぶに至れり。卷を合せて冊となせるによりて合卷と稱す。然るに裨史年表に「京傳の作「錢光記」より「大悲利益」まで四部を四季に分けて出版す。最初に上紙摺三冊合卷にて、表紙も上の黃表紙に犬を黑摺にしたり。これ合卷の權與とも云ふべき歟」と、こは享和二年の事なり。されば合卷の體は既にこの頃より試みられたりしを、文化三年三馬の時に及びて世に行るゝ事となりしものなるべきか。かくしてこの種の雙紙相ついで出でしが、一方、京傳馬琴等讀本に力を盡して、茲に讀本全盛を極むる頃となりしより、合卷もこの影響をうけて之に隷屬することとなれり。そは讀本の條下に述ぶべし。

滑稽本

十返舍一九

膝栗毛

第五節　滑稽本

從來の黃表紙の內容を成せりし滑稽は、合卷が眞摯なる趣向に進むと同時に、他の形に於て發露せられたり。所謂滑稽本の流行是なり。滑稽本は早く寶曆の頃、靜觀坊好阿の「當世下手談義」や風來山人の「根なし草」以下の狂體に起れるものなるが、安永、天明以後京傳等の筆をとれる頃より多くの作者あらはれ、種々可笑味の材を求むるに至りしが、それらの作者中、最も傑出したるものを、十返舍一九、式亭三馬とす。

一九、本名は重田貞一。明和二年駿河町奉行の勘定役の家に生る。人となり放逸不羈にして酒を嗜み、諧謔を好み、職を弟に讓りて一時大阪に居る。近松餘七と稱して若竹笛躬等と「木下蔭狹間合戰」を合作せしは此の間にあり。寛政六年江戸に來りて書肆蔦屋重三郎の家に寓し、これより黃表紙、洒落本に筆をつけしも、未だ時好に投ずるに至らず。一九此より筆鋒を轉じて滑稽本の著作に從事せしが、享和二年東海道中膝栗毛初編を出すに及んで彼の名頓にあがり、二編三編より年を經て第八編に至るまで大に世の喜ぶ所となり、發行

の日の如きは顧客の需急にして製本の暇なかりし程なりきといふ。筋は彌次郎兵衛、北八てふ二人の飄輕滑稽なる同士が、東海道五十三次を旅行せる一部の道中記に過ぎざれども、其の筆、婉轉自在にして諸國の方言風土より、失策、破綻、滑稽、諧謔のありたけを寫して、間に狂歌狂句を插みたれば、讀む者皆噴飯抱腹せざるはなし。されど彼は學殖なく主義なき洒脫なる放士なりしを以て、編中卑陋の語猥褻の言、紛然雜然として紙上を汚せる多きは、大に惜むべき所なり。

發語

富貴自在冥加あれとや。營みたてし門の松風、爰に通ふ春の日の麗さ。げにや大道は髮のごとしと、毛すじ程もゆるがぬ御代のためしには、鳥が鳴吾妻錦繪に、鎧武者の美名を殘し、弓も木太刀も領にして、千早振神の廣前に、おさまれる豐津國のいさほしは、堯舜のいにしへ、延喜のむかしも、目擊見る心地になん。いざや此よき國〳〵の名山勝地をも巡見して、月代にぬる、聖代の御德を、藥罐頭の茶呑ばなしに貯へんものをと、玉くしげふたりの友どち

いざなひつれて、山鳥の尾の長旅なれば、臍のあたりに打がへの金をあたゝめ、花のお江戸を立出づるは、神田の八丁堀邊に獨住の彌次郎兵衛といふのふらくもの、食客の北八もろとも、朽木草鞋の足もと輕く、千里膏のたくはへは、何貝となく、はまぐりのむきみしぼりに對のゆかたを吹きおくる、神風や伊勢參宮より、足引のやまとめぐりして、花の都に梅の浪花へと心ざして出で行くからに、はやくも高なはの町に來かゝり、川柳點の前句集をおもひいだせば

高なはへ來てわすれたることばかり

とよみたれば、我〳〵は何ひとつ心がゝりの事もなく、獨身のきさんじは鼠の店賃いだすも費と、身上のこらずふるしき包となしたるも心やすし。さりながら、旦那寺の佛餉袋を和らかにつめたれば、外に百銅地腹をきつて往來の切手をもらひ、大屋へ古借をすましたかはり、御關所の手形をうけとり、ふめるものは、みたをしやへさづけて金にかへ、がらくた物は店うけにしよはせて禮をうけ、漬菜のおもしとすみかき庖丁は隣へのこし、ちぎれたれど

も縄すだれと油坪はむかふへゆづりて、なにひとつ取りのこしたるものもなく、まだも心がゝりは酒屋と米やのはらひをせず、だしぬけにしたればさぞやうらみん。きのどくながら、これもふるきうたに、

さきのよにかりたをなすか今かすかいづれむくいのありとおもへば

打わらひつゝ彌次郎兵衛また狂詩を口ずさむ

雖レ非二亡命可一レ奈何　借金不レ報擽尻過
夫居本貫掛乞衆　將是川向成二干戈一

うち興じてほどなく品川へつく。彌次郎兵衛

海邊をばなどしな川といふやらん
と難じたる上の句に、きた八とりあへず
されば澄みづのあるにまかせて
いとおもしろく歩むともなしに、鈴が森にいたり、彌次郎兵衛
おそろしや罪ある人のくびだまにつけたる名なれ鈴がもりとは
大森といへるは麥藁ざいくの名物にて、家ごとにあきなふ。

飯にたくひきはらざいく買ひたまへこれは子どもとすかし屁のため
それより六郷の渉をこえて萬年屋にて支度せんと腰をかける、萬年やの「おはようございやす」彌次兵衛耶「二ぜんたのみますきだ」八「コウ彌次さん見なせへ、今の女の尻は去年までは、柳で居たつけが、もふ臼になつたア……そしてめんよふ道中の茶屋では、床のまにひからびたはなをいけておくの、あのかけものをみねへなんだ。彌次「アリャア鯉のたき昇りよ。北「おらア又鮒がそうめんをくふのかと思つた。彌次「コウむだをいはずと早く喰はつ、汁がさしめらア。北「ヲヤいつの間にもつてきた、ドレ〳〵。トならちやなあり切彌次さら〳〵とじてやり」もふおはちが零落した。北「又さきへいつて、うめへものをしてやろふ。トそれよりふたりは、ぜにたはらひ、こいたちいらひの男、一人は六十ぐらひのおやぢ、一人は十四五のやつこいづれも宿の人足なり先挑したアに〳〵かぶり物をとりませふぞ。北「かけおち者は下座をしねへでもいゝと見へる。彌次「なぜ。北「ハテかぶりものは通りませふぞといふは。先挑「馬士馬の口を取りませふぞ。北「馬の口もとりはづしができるかのはゝゝ。先挑「あとの人せいが高いぞ。彌次「おいらがことか、高いはづだ。

愛宕の坂で九文龍とかたをならべたおとこだ。北しやれなさんな、とんだめにあふぜ。彌次アレ見やれ、どれもいゝ奴だ。まきばしよりで豪せいに尻がならんだは、何のことはねへ馀町しんみちの土用ぼしといふもんだ。北ヲヤ〳〵弓をかついでいる人の笠を見ねへ。あたまと延引していらア。

「旦那衆お上りかな彌次ヲイ貴様なんだ。川越川越で御座り升、安くやらずに、御頼ん申升。北いくらだ。川越昨日の雨で、水が深いから一人前六十四文。北そいつは高い。川越アレ川をまゝお見なさろ。（ト打つれて川端へ出る。）彌次成程ごうせいな水勢だ。川越ナニ、御前サア、そつちをつん向きなさろ。（ト二人を肩車に乗せて川へざぶ〳〵と道入る。）北ア南まゐだ〳〵目が廻るようだ。川越しかりわしが頭へ取りつきなさろ。アゝコレそんなにわしが目をふさがつしやるな、向うが見へない。彌次成程深いは、コレ落して下さるな。川越ナニ落すもんかへ。彌次それでも、ひよつと落したらどうする。川越アレ落した處が高でお前が流れてしまはしやる分のことだ。彌次エゝ流れてたまるものか、イヤもうきたぞヤレ〳〵御苦労〳〵。（ト車より下りて賃銭をやり彌次ソレ別に酒手が十六文づゝ。川越ヘイコレハ御機嫌よう。（川越は直に川上の浅い方をわたつて帰る）北ヤレ彌次さん見ねへ、おいらをば深い所を渡して、六十四文宛ふんだくりやアがつた。

膝栗毛續篇

式亭三馬

此の書大に行れて版元の利潤も多かりしかば、版元は原稿料の外に費用を給して諸所を遊歴せしめ、「江の島土産」「金比羅道中」「大師めぐり」「六阿彌陀詣」「宮島参詣」「木曾街道」「善光寺道中」「草津温泉道中」等の膝栗毛續篇を作して文政年間に及びぬ。曉鐘成、瀧亭鯉丈等のこれに模せるもありき。其の他彼の所著二百餘種、黄表紙あり、合巻あり、洒落本あり。一生赤貧の中に處して毫も意に介せず、天保二年八月六十七歳にして歿す。辭世に曰はく、「此世をばどりや御暇に線香と共に終には灰左様なら」。

三馬。本名菊地泰輔、本町庵、四季山人等と號す。安永四年江戸淺草に生れ、幼にして書賈に雇はる。性讀書を好み、餘暇あれば常に群書を渉獵して早く數多の小説を讀み盡せりと云ふ。十八歳始めて著作を思ひ立ち、非常の苦心を

以て「天道浮世出星繰」といへる黄表紙を作りしが、壯年に及びて其の技大に熟し、黄表紙に合巻に洒落本に、才筆縱横ならざるなし。殊に洒脫飄輕なる天資は滑稽本の作に適し、享和三年、「浮世風呂」(前編四編男湯、二編三編女湯、文化九年完結)を出して大に其の名を揚げたり。文化八年より文政六年に亙りて、其の續編と見るべき「浮世床」三編を出して又世に行る。彼が作風は殊更に奇を設け事を構へて人の笑を強ふる者にあらずと雖も、博覽にして舞臺必ずしも狹少ならず、卑俗に流れず猥褻に陷らざる中に自ら妙想あり。諧嘲滑稽求めざるに人の頤を解くものあるは、彼の特色とする所なり。

かみがたすぢの女、ずんぐりとした風俗、色白にてくちびるあつく、目のふちは紅ぼかし、口べにくろぐかりに濃くぬり、ふといかうがいを白紙にてくるくるとまきたるは、湯氣にてべつかうのそらぬためなり。かあいらしいこゑにて、かみがた「於山さん、あらう寒いな、何じやト、モウ此間わお腹の工合がわるうて、夜さり毎に腹痛てづゝないはいな、それじやさかい風呂になと入つて溫ためてこまそと思ふて、なアんぼも入つてじやはいな。於山さんあれを見イ、お家さんの傍に立つて居なます嬰兒さんを見イな。ありや何色じやしら ん。於山「あれかエ。あれは紅かけ花色といふのさ。かみ「いつかう能う染てじやなア。山「薄紫といふやうなあんばいでいきだねへ。かみ「いつかう醉じや。こちや、江戸むらさきなら大好〳〵。こちや、あないな云のやうな著物がしてほしいわエ。於山さんあつちや向んか。山「ながしておくれか。夫はおはばかりだね。かみ「なんのいナ。テモ能う肥でじやな。山「いやよ太つちやうわしみ〳〵否だ、酢でも呑んで瘦たいよ。かみ「なんのマア肥たが能じやないかな。山「それでもおまへほつそりすうわり柳腰と云ふじやアねへか。かみ「かいな。こちやまた風負せいで能かと思ふた。私など走競せうなら横にねて轉る方がやつと速じや。山「パ、、、モウ四を打つたかね。かみ「何たひじや」いな。つウつと最前打てじや。最やんがて盡じやがな。山「さうかへ。日は短いチエ。かみ「さいな。これから行だらわし所へ於出て飯食んか。上つ風に丸を料理して食て見たいと千度いふて、トトモウ内のが耳潰してじやつたが、今日はどうしてやら丸焚て食はそと此樣

に云てじやさかい、蓋は丸じや。山「丸とは何だへ。かみ「御當地でいふ髷じやがな。おまへも食て見い。山「ヲヤいやよ、おつかねへ。髷なんざア見るもいや。丸を焚といひなさるから、麥飯かと思つたら髷かへ。ヲヽ、氣味のわりい。江戸じやアね髷をしやれて蓋といひやすよ。かみ「何じや蓋。あほらしい。蓋とはマア何のこつちやいな。山「蓋の樣だから蓋さ。上方の丸とはなぜだねへ。かみ「甲が丸いさかい丸じやわいな。山「そんならどつちも五分〳〵のこぢつけだね。かみ「さいな。御當地の髷袤〳〵と云ふはなどないなどと云のやうな仕方じやと思ふたらあほらしいてマア吸物じや無て、上でいふ轉熬じやさかい、鹽が辛うてト、やくたいじや。上の拵方は又あないな、もみないもんじやない。第一が薄したぢで吸物じやさかい、酒の下酒になとせうものなら、いつから能じや。こちや最う大好大好。鰻なども御當地のは和いばかりで、もみないがな。上の鰻といふたらまアどないなもんじやい。名高い所がマア京で上の生洲な。大阪で大正ナ。その外に川魚屋もまだまあ多とあれどナ。玉といふたら的等じや、何じやろとマア鉄串にさして燒じやは。その燒た跡で能程づゝに切てな。平に入てきつしりと蓋して出すさかいに、なんぼでもさめるといふ案じがないわいな。山「江戸じやアそんなけちな事は流行られねへのさ。江戸前の蒲燒はぽつぽと湯氣の立つのを皿へならべて出す、たべるうちにさめたらその儘置てお代りの燒立をたべるが江戸子さ。さめると猫に持行て遣うと竹の皮へ包で歸る人は、よつぽど勘定高い人さ。かみ「夫がマア何で江戸子じやな。物の廢にならんやうにしてこそ自慢したが能はいな。いしてらしう江戸子じや何たら角たら云ふても、上の者の目から見ては、ト、やくたいじやがな。自慢らしいふことが皆べこたこじやによつて、江戸子はへげたれじやといふはいな。山「へげたれでも能のさ。江戸つ子のありがたさには生れ落から死まで、生れた土地を一寸も離れねへよ。アイおめへがたのやうに京でうまれて大阪に住つたり、さま〳〵にまごつき廻つても、あげくのはてはありがたいお江戸だから、けふまで暮してゐるじやアねへかノ。夫だからおめへ方の事を上方ぜへろくと云ふはな。かみ「ざいろく

とはなんのこつちやゑ。山「さいろくト。かみ「さいろくとはなんのこつちやへ。山「しれずばいゝわな。かみ「へゝ關東べいがさいろくをぜへろくとけたいな詞つきじやなア、御慮外もおりよげへ、觀音さまもかんのんさまなんのこつちやろな。さうだから斯だからト、あのまアからとはなんじやア。山「から」だから「から」さ。ゆゑといふことよ。そしてまた上方の「さかい」とはなんだへ。かみ「さかい」とはな。物の境ひ目じやハ。物の限る所が境じやによつて、さうじやさかい、斯した境と云ふのじやはいな。山「そんならいはうかへ。江戸詞の「から」をわらひなさるが百人一首の歌に何とあるゑ。かみ「ソレ〳〵最う百人一首じやアは、首じやない百人一首じやはいな。まだまア「じやくにんし」トいはで頼母しいな。山「そりやアわたしが云損にもしろさ。かみ「そこねへじやない云損ひじやゑらう聞づらいな。芝居など見るに今が最期だ觀念何たらいふたり、大願成就忝けねへ、何の角のいふて萬歳の才歳のとぎつばな男が云ふてじやが。ひかり人のないさかい、よう濟んでゐる。山「そりや〳〵上方もわるい〳〵。ひかり人ッサひかるとは稲妻かへ。おつだネエ。江戸では叱るといふのさ。アイそんな片言は申しません。かみ「ぎつばりひかる、なるほどこりや私が誤た。そしたら其百人一首は何のこつちやエ。山「から」トいふ詞の譯さ。能お聞きよ。百人一首の歌に文屋康秀吹からに秋の草木のしほるればトあるよ。ソレ吹からネ。よしかへ。吹ゆゑにといふことを吹からにさ。なんぼ上方でさかい〳〵と云うても、吹さかい秋の草木のしほるればとは詠はいたしやせん。かみ「なる程さう聞きやおまへのがほんまに尤らしいが。ハテ云ひや何でもいはれるはいな。山「大願成就でもなんでも利口をじこうといつたり立派をぎつは、狐をけつねといふより能のさ。五音相通とか何とかゞかなつてゐるからむりじやアねへと此中も博識な人がおはなしだつけ。延引だの觀音だのと、あいうえをの上へむの字が乗れば五音相通で恩愛觀音延引善惡などゝいふものだと、能教へなすつたから、今度おめへが江戸詞を笑ッたら、一番しめてやらうと思つて待てゐたはな。かみ「さうかいな。そんならまアかんのんも能ハト、からも能ハト、扨また關東べいじや、どうしべい斯うし

べい行べい歸るべいとは、扨見とうむないナア。山「それもネ萬葉集とやらその外神さまの時分の本にネ、べい〳〵詞があるとさ。可とは可といふことで行べい歸へるべいは、可行可歸といふ詞で、いまでも萬葉とやらの哥よみは、べいことばを遣ふさうさ。このことも一緒に聞いて置いて内へ書つけて置いたから、その哥やことばを來て見なせへ。鄙言の何ちふことだの角ちふことだのといふのも、ちふとは「といふ」といふ詞を詰たので古い詞だから頼もしいとお云ひだよ。かみ「なんのいな。べい〳〵詞が何で譯があろぞいナ。山「譯がなくつてさ。うそならわつちが内へ來て書付を見なせへ。かみ「ハアちと見よかいナ。何なと賭にせうかい。私がまけたらナ、醴なと大福餅なと立ちよはひナ。お前又何なと立さんせ。山「立てるとはへ。かみ「振舞の事ちや。山「おごるのか。かみ「さいな。山「ッ、わつちが負たら鰻を貳朱はづまう。かみ「こりや能はいな。山「アいた〳〵〳〵ヲ、いたいよ、おめへはまア調子に乘つて背中を痛くおこすりだよ、モウよいよ。かみ「ハ、、拍子にかゝつてヲ、しんど。山「サアおまへの背中をお出し。かみ「又遣趣かへしにあらいことすまいぞや。是どうじやいな。お山さん。アいたアいたア毒性なお方ア。いつこ面倒なら放ておかんせ。アいたいた何しいじやいな。痛さがたまらんはいナ。灸があるさかい味能うながしいな。アいたアいた〳〵〳〵〳〵〳〵

（浮世風呂）

油でにしめたやうなる太織の綿入。あいびらうどの紋付、すそからぼろをさげて、なぎなたなりの草履をはき、あたまはさかやきぼう〳〵、ひげむしやくやとして、じゝむさき事いはんかたなし。そのくせに氣象たかく、辯舌滑々として高慢を吐くは、素讀指南の先生、社盟をかきあつめてやうやく五六輩に過ぎざる貧書生と見えたり。殘念閔子騫といふ古風なる口癖あり。生國はいづれ片田舎の者。遊學の間四五年になれど、江戸のそはむちや也。

孔叢「どうだ主人夙に起き夜に寐てかせぐ者だの。びん「ヤ是は先生さん、お早うございます。（先生といふてはなめげに、きこゆるとて。先生さんと樣をつけていふ也）。孔「おれは清貧を樂む氣だから早く起る氣がないが、家鹿

の爲に起されたヤ。あたけて〳〵どうもならぬ。びん「嘉六が酒にでも酔て來やしたかネ。孔「此男は何をいふ、鼠が酒に酔でたまるものか。ハ、、。びん「ヘエわつちは其筋向の嘉六が例の生酔であたけたかと思ひやした。孔「何さ家鹿とは鼠の異名さ。びん「ヘエ鼠にも表德がごぜへやすかネ。孔「表德かはしらぬが社君だの家兎だのと、種々異名がある。(そばからさし出て)とめ「左官しの壁だのとつけるも尤だネ。あびつが壁へ穴を明ちやア左官さわぎた。びん「べらぼうめだまつて居ろ。とめ「アイト。(へこんで門口を掃除して居る)。孔「獨居して居ると、鼠までが馬鹿に仕をる。一屋無猫老鼠走白昼と左傳にもある通り、おれを侮てどうもならぬ。王肅が逐鼠丸でも欲しいものだ。とめ「逐鼠丸とは京傳の本に書てありやす。直さま買へやすはな。びん「馬鹿アいへ。あれは讀書丸だは。とめ「ホンニさうだつけ。孔「ドリヤ一ッ剃てもらはうか。ト(こし高のたらひへ湯をくみ、さかやきをもんでゐる)びん「コレ留。モット敷居の脇を能く掃エ。いけぞんぜへなべらぼうだ。いくら云ても、掃き落しやがる。とめ「アイ孔「箒千里惟留が掃ざる所なりだ。アハ、、、留は奥を潤し。床は身を潤すといふから髪結床の際には。奥の用をたして、水でも汲むがいゝ。とめ「さついお世話さ。閔子騫めエ。孔「ナンダ閔子騫だア。黄白には富みたいものだナ。汝が輩まで おれを安んじをる。ハテ殘念閔子騫。とめ「ヲットまづ一ッ閔子騫。三人ハ、、、(孔糞毛受をもつてこしをかくる、びん五郎は髪をとかす)孔「(向かふのかべに張付ある宿のびらを見つめてゐたりしが)。ハ、ア竹本祖太夫鶴澤蟻鳳ハテおつな事があるの。漢には賈太夫などゝいふも有たれど、日本には奇しい。尤も秦の始皇帝が、松に太夫の官をば與へたが。竹に祖太夫の官をやつた古事も覺へずト。扨て又鶴澤と置て蟻鳳と對を取つた心はどういふ意であらうナ。コレ主人あの書いたものは何にするのだの。びん「どれエ孔「あれ(トゆびをさす)。びん「あれは座敷淨瑠璃さ。祖太夫に蟻鳳だから、夕も三百ばかり這入やした。孔「フム(トハいへども根からわからず)。ハテナ。おれは俗事に疎いからとんと解せぬ。(又こちらを見て)今昔物語ト、何だ朝寢房夢羅久。フウ(トかんがへ)。林屋正藏ハテナ風流八人藝。ハ、

アこれは所謂季氏が八佾のたぐひと見えるナ。此季氏も魯國の太夫だて佾は舞列なり。天子は八ッ。諸侯は六ッ、太夫ハ四ッ、士ハ二ッ、佾する毎に人數其佾の數の如し。びん「モシ〳〵夫は何の數でござりやすエ。孔「是は八佾といふて舞の數だ。びん「わつちは又おつに氣どりやした。アハ、、、あれはそんな六かしい物じやござりません。八人藝といつて。一人で八人の藝をする盲人さ。孔「ハテナ盲人ですら八人の業をするに、おれらは兩の眼を持て居て一人の行ひがつとまらぬとは、ハテ殘念閔子騫。とめ「そりや二ッ。三人「アハ、、、。孔「あの何はどかな。今といふ字の書いてあるのは。びん「ム、あれは今昔物語さ。朝寢房夢羅久、林屋正藏、こつちあの方が圓生、されども上手な咄家さネ。(トはなしてゐる所へ。でんぼう一人すと來て立てゐる)。びん「おはやいの。でん「アイそのつぎか。びん「まだいんきよさんが一人ある。でん「よし。孔「コレ主人咄家とはどうしたもの。びん「落語をする手合さ。孔「ム、笑話か。笑話は漢がおもしろい。山中一夕話の事を開卷一笑ともいふが、又格別だて。笑々道人が作つたものだ。

また遊戯主人が笑林廣記。和本にも岡白駒が譯した開口新語。あるひは笑府のたぐい。イヤどうも漢は違つたものだて。あの趣向をきやつ等に敎へてやりたい。(などゝいひたがるものなり。からのはなしを日本に譯し、あるひは飜案してあることはしらず。こゝが村學究のもちまへ也)。びん「唐にも落咄がありますかネ。孔「あるとも〳〵。日本のやうな事ではない。甚だ巧のものだ。でん(そばから口を出して)唐はどうだかしらねへが、江戸の咄家はどれも上手だぜへ。夢羅久が咄すのは眞の咄だぜのう。びん「さうさ林屋がのもおもしれへよ。でん「おらが圓生がおかしくて能。びん「始終をかしいの。でん「夢羅久のは地が能。どうも情合をうまくいふぜへ。びん「可樂は一世一代をしたじやアねへか。びん「夫でもスケに出らア。でん「助高屋だの一世一代した跡が、又若がへるものよ。孔「コレ〳〵足下の一世一代といふは誤だ。それでは重音になるで。あれは一世一度といふものだ。咄家〳〵と何でも家の字さへ付ればよいことと思ふが、咄家と云ては湯桶讀だ。咄は訓なり、家は漢音だ。吳音では家と讀むでな。都て儒學は

漢音。國學は呉音でよむが、又佛氏の方なども呉音でよむ。それは各別、笑話家とか。或は落句におかしみを取るゆゑ。落語家ともいへばよいに。咄家とはイヤハヤ實に絶倒ハ、〻〻。すでに古方家後世家は漢音、二條家萬葉家は呉音で唱へる。是等の事を辨へぬとは、ハテ殘念閔子騫。てん「そんなら咄家をやめて笑話家といひやせうね。びん「しかし今のきいたふうは何でも家の字を付けたがるよ。孔「口を能くしやべるものを多辯家。物を多く食ふ者を食亂家。或は飽食家。てん「酒をよく飯む者を飲家と云つちやア、夏うるさがるやうだの。孔「それが則湯桶訓だて。酒を呑むものを酒客。酒家を酒家。びん「ハ、ア酒屋が酒家ならば、豆腐家だの。てん「提燈屋が提燈家で、煎餅屋が煎餅家。びん「馬によく騎る人を馬家と云つたら腹を立つだらう。てん「香をかぐ人を香家と云つちやア穢らしの。孔「さういはれてはたまらぬ。これ〳〵、香をかぐ、花をさすなどの詞は古いけれど、なつ花を活ける、香はきくといふが俗例で耳立たぬてナ。てん「香は鼻で嗅ぐだらう。びん「さうさ耳へ句ふはずがねへ。てん「耳できく者なら香をきくといふが能いけれど、鼻だからかぐ方がよからうぜ。びん「さうよ。鼻で聞いて耳でかぐ物なら、目が言て口で見物だの。てん「さうなると足で頭痛がして、天窓へ踏貫の用心だ。孔「コレ〳〵足下の樣に言ふては論が干ない。アヽこまつたものだ。是だから聖人もおこまりなされた事想像れるテ。どうも度しがたい。アッア夷狄に素しては夷狄を行ひ、鄕に入ては鄕にしたがふだア。情ない。實に嘆息するのみだ。衆人濁酒を飲まばわれも共に飲まねばならぬかい。びん「實に痰嗽をするなら、濁酒は毒だらうネ。それはおやめなせへ。孔「イヤサ、も對手にならぬて。びん「モシ〳〵、もうちつとお講釋を聞きてへネ。孔「イヤ〳〵愚人と論は無益なり。（下歸る）。（浮世床）

彼は狂狷人と相容れざるの風ありけれども、又頗る世事に通じ、貨殖の道を得て富有の生計を營みしが、戯作者の通弊として劇飲病を發し、文政五年正月四十八歳にして歿す。辭世に曰はく

善もせず惡も作らず死ぬる身は地藏笑はず閻魔叱らず

所著各種を通じて百三十餘に及ぶ。

瀧亭鯉丈
梅亭金鵞

上述二人についで滑稽本の作に名ありしものは瀧亭鯉丈、梅亭金鵞等なり。鯉丈は、下谷稲荷町に住して櫛を鬻ぐを業とし、通稱を八藏といふ。其の著花暦八笑人十二冊(文政三年—天保五年)、滑稽和合人十冊(天保十二年)名あり。金鵞の作には七偏人十五冊(安政四年)世に知らる。されど彼等に至りては其筋先人の結構せる破綻失策、もしくは諧謔地口を反覆するに過ぎず、甚しきは強ひて笑を求めんと欲して、あり得べからざる奇態を捏造し敍述せるに至りたれば、輕快を生命とせる滑稽本は、茲に全く衰退し、拙き苦心によりて成れる五六の作も天保、弘化、以後は殆ど顧るに足らざるものとはなれり。

酒落本
蒟蒻本

第六節　酒落本及び人情本

輕快なる黄表紙の盛行せし安永、天明の頃、青樓の情話を寫せる酒落本と云ふもの行る。本の體は芳原細見にならひて半紙を二切にし、土器色の唐本表紙を切付け、一冊三四十葉のものなれば、形の小なるによりて小本とも云ひ、色の蒟蒻に似たるによりて蒟蒻本とも云ふ。内容はもとの八文字屋の浮世草紙の、更に俗化したるものとも見るべき性質を有し、多くは會話體を以て直に春

山東京傳

閨の情、蕩子の態を寫せるものなり。寶暦七年、無々道人(書家澤田源[illegible]の假號。)の「異素六帖」二冊を以てこれが殆と見るべきものなれど、明和年間、多田爺(江戸の書賈、多田屋利兵衛といふ。)の「遊子方言」一冊出づるに及びて、酒落本の體大に備れり。安永七年田螺金魚が「傾城買虎の卷」一冊を出して、當時、金貸烏山檢校といふが傾城瀨川を金に飽して無理根引にせし風説を作り、非常の喝采を以て世に迎へられしより、酒落本の一書ます〳〵行れ、蓬來山人、四方山人、萬象亭、唐來三和、梅暮里谷峨等の作相續いで起り、天明以後、山東京傳の出づるに及びて酒落本の盛行殆ど絶頂に達したり。蓋し京傳は草雙紙、讀本等にも多くの作を出せりと雖も、未だ春町、喜三二、もしくは馬琴を凌駕するに難かりしが、轉じて酒落本に筆をつくるに及びて、充分なる技倆はこの上に發揮せられたりしものゝ如し。されば風紀の廢頽せる當代社會の裏面は、殆どこの小冊に暴露せられたりと云ふも不可なかるべく、輕快の文、酒落の句、よく遊里の情話を活寫して、讀む者をして身その巷にあるの思あらしむ。彼の作にして殊に有名なるは、「息子部屋(天明五年)」、「通言總籬(同七年)」、「吉原揚枝(同八年)」、「繁千話(寛政二年)」、「傾城買四十八手(同)」とす。然

風紀振肅

るに寛政二年、白川樂翁公風俗壞亂のかどを以て博徒遊里の事を寫すを禁じ、洒落本の出版を禁止す。されどこの書は流行非常にして版元の利益甚だ多く、殊に貸本屋の如きも多額の見料を徵して、尙顧客相繼ぐの狀にありしを以て、翌年書肆篤重、密に京傳にすゝめて洒落本を作らしむ。京傳是に於て「娼妓絹篩」、「錦の裏」、「仕懸文庫」の三種を出し、表には敎訓讀本と題して世に公にしたりしに、不幸忽に町奉行の探知する所となり、篤重は絕版の上、過料を命ぜられ、京傳は手鎖五十日の刑に處せられぬ。これより京傳先非を悔いて洒落本の筆を斷ち、讀本及び草雙紙の作に從ひぬ。

婬蕩の社會

幕府令を嚴にし、京傳刑に處せられたりと雖も、婬蕩なる社會の要する所は遂に止むべからず。寛政の末年より享和、文化に亘りて、谷峨、一九等の筆に成れる洒落本數十の多きに及びたり。されど、洒落本は首尾を構へたる完全なる小說にはあらで、通人の間に行るゝ洒落の描寫を主とするものなれば、單純なる通言のみの敍述は、長く世の嗜好を滿足せしめ得べきにあらず、文化の末文政の始より、やゝ小說の體を備へたる長篇の出づる事となり、內容にも漸く改良を加へて、ひとり通人のみならず、貴賤老幼の狀態をも描寫する者生ずるに至りたり。これを人情本と稱す。寛政十年、三馬が「辰己婦言」を作りてその後篇續篇を出せるに起原し、文化十四年鼻山人が「娼妓美談籬の花」、文政元年「同廓の慾」を作るに及びて、人情本の一體世の迎ふる所となれり。是よりこの風の作をなす者陸續として表れ、文政、天保の間この種の小說多く出版せられ、都鄙にこの流行を見るに至りぬ。この間最も有名なる者を鼻山人及び爲永春水とす。

人情本

鼻山人

爲永春水

鼻山人。本名は細川浪二郎、東里山人とも號す。麻布三軒家に住し幕府の家人たり。始、京傳の門に入りて戲作を學び、殊に洒落本の體を變じて人情本を作る。「籬の花」一冊、「契情肝粒志」十三冊は大に世に翫ばる。

爲永春水。本名を佐々木貞高、俗稱を越前屋長次郎といふ。金龍山人、狂訓亭等の號あり。もと書賈を業とし、演義小說を愛讀したりしが、ついで講談師とならんと欲して成功せず。次に三馬の門に入りて戲作者たらんと欲して遂げず。又、馬琴の名聲を羨みて彼が改作を出し、楚滿人の二世を繼ぎ、或は振鷺亭の二

代と名乗れりと雖も、いづれも成らずして世の嘲笑に價せしのみなりしが、最後に爲永春水と名宣りて、自らの創作を出さんとし、卑俗なる用語を以て人情本を書き始め、問答體によりて男女の情話を寫し出せしに、この技大に當代の嗜好と相容れ、天保三年「春色梅暦」十二冊を出すに及んで、頗る世の好評を博し彼が名始めて是より傳へらる。是より年々新作を出し、己が交遊する所の遊冶、幇間、藝妓、師匠等悉くこれを收めて自家著作中のものとなし、行動言語を寫出してよく其の實を得たり。もし其の長を言はゞ、男女の性格を描出して後世の寫實小説の前驅をなせりと見るべきも、其の短とする所は、描寫されたる世界の狹小なるにあり。名をかへ所をかへて出で來る人物の、殆ど常に同一摸型によれるにあり。繰返し繰返さるゝ事件は何時も單調にして陳腐を免れざるにあり。而して其の弊は猥褻の字句、露骨の描寫殆ど讀むに堪へざるもの多し。世は方に此の如くなりしには依るとするも、作者春水豈に罪なしとなすべけんや。されば天保十三年、幕府風俗壞亂を矯正するや、直に春水を手鎖の刑に行ひ、版元七名は賣上金沒收の上、過料に處せらる。春水是より快

々として娛まず、日夜痛飲し同年遂に病を得て歿す。年五十四。人情本の作殆ど廿餘種。門下松亭金水世に知らる。二世春水の作「いろは文庫」また人の弄ぶ所たり。

第一齣

野に捨てた笠に用あり水仙花。それならなくに水仙の、霜除ほどなる佗住居、柾木の垣も間原なる、外は田畑の薄氷。心解けわふ裏借家も、住めば都にまさるらん。實と寔の中の郷、家數もわづか五六軒。中に此ごろ家移か、萬たらはぬ新世帶。主は年齡十八九。人品賤しからねども、薄命なる人なりけん。貧苦にせまる其うへに、此ほど病の床にふし、不自由いはん方もなき、容體もときの吉不祥、いとゞ寒けき朝嵐、身にしみ〳〵とかこち顏。獨わびしき門の戸に女「すこし御免なさいまし〳〵」あるじ「アイどなたェ」女「そふいふお聲は若旦那さん、といひつゝあける障子さへ、ゆがむ敷居にやう〳〵と、あけて缺込其姿。上田太織の鼠の棒縞黑の小柳に紫の、やまゆじまの縮緬を鯨帶とし、下著はお納戸の中形縮めん、おこそ頭巾を手に持ちて、みだれ

し髮の島田髷。素顏自慢か寢起の儘か、つくろはねども美しき、花の笑顏に愁の目元。亭主はびつくり貌うちながめ。主「米八ぢやアねへか、どふして來た。そして隱れて居る此所が知れるといふもふしぎなこと、マア〳〵こちらへ夢じやアねへかト抓て見る。よれ「わちきやア最、知れめへかと思つて胸がどき〳〵して、そしてもふ急いで歩行いたもんだからア、苦しいトむねをだいき。咽がひッつくよふだトいひながらそおまはんは煩つてゐさつしやるのかへトかほをつく見て。寔にやせたねへ。マア色のわるいことは。眞青だヨ、何時分からわるいのだへ。主「ナニ十五六日跡からヨ。大そうなことでもねへが、どふも氣が塞いでならねへ。それはいゝが手めへまア、どふして知つて來たのだ、聞きてへこともたんとあるト。すこしなみだぐみてあはれ也。よれ「ナニ今朝は妙見さまへ參りに來たつもりで宅は出ましたヨ。寔にふしぎなことサねへ。お前樣が此樣な所に御在宅といふことは。ほんとに夢にも知らなんだがネ。此頃目見に來て居るしたじッ子がいふりやくしことばなり。とありまはアな。その子の宅を聞いたれば、本所の方だといひましたが、それから

皆々と種々なことを聞いて遊んで居るとき、其子が宅の近所の咄をする中で、どふもはなしの樣子がおまへはんの噂のやふだから、其晩一所に寢かしてよく〳〵聞いたら、宅に意氣な美しいお內寶が居ると言ひましたから、夫じやア違ッたかと思て、猶くわしく聞いたれば、おまはんの年よりおかみさんの方がうへのやうだといひますし、またおかみさんは、とふして家には居ないといふし、聞けばきくほどなんだかおまはんのよふな心持で、モウ〳〵どふも氣が濟まねへから、其子によく〳〵私の聞いたことを口留して置て、今日の朝參りには、何でも尋ね樣と思つて十五日を樂しみにして、出て來たんでありまさアな。日頃の念力とはいふものゝ風としたことからおまはんの、在家が知れるといふは、妙見さまのおかげだと、嬉しいに付けて氣がゝりなは、おかみさんがあるとの噂、今日はどこぞへお他出のかへ。主「ナニつまらねへ、どうして女房どころなものか、そして其子は何所の娘だらふ。よれ「なんだか宅は八百屋だといひましたヨ。そりやアマアいゝじやアありませんか。おまはんマアそれよりか、今じやア私のことなんざア思ひ出しも

してはお呉なさるまいネ、そして噂にきいたお内君のことをかくさずとも、いゝじやアありませんかエ。主「ナニサ隠すどこじやアねへ、此容だものを、よくつもつて見るがいゝ。其子の咄だつても、何だか知れもしねへ、マアそりやアそうと、宅のよふすはどふだの。よれ「宅のよふすは大變サ。鬼兵衛どんの氣じやア、皆に旦那さんといはれてへ心持で居ますのサ。それだけれど、御内室の在世な時さへあのとふりの理屈だものを、どふしてそふいふ樣にいきますものか。それを何の角のと言つて、三日にあげず内證はもめが絶えやアしませんは。私も全體おまはんの、養子に行かしたときから、住みかへに出たいと思つて、氣をもんで居ましたけれども、どふもあゝいふ意地わるだから、ゑこぢになつて出すめへと、今日まじやア我慢して居たけれど、おまはんの宅は知れるし、そしてマアトあたりなみまはしながら。此樣なはかない形身になつてゐさつしやるのを見て、どふしてあすこの宅に居られますものか。私きやア今日歸ると直に住みかへをねがつて、婦多川へでも行つて辛防しておまはんの身を少しも樂にさせ申してへネエト見へしんじつ女のいちぶはしゃうふさいでゐるよれ「エモシそして養子に行かしつた御宅はマアどふした譯で急に身代がたゝなくなつたのでありますエ。主「さればサ、今さら考へて見りやア、やつぱり鬼兵衛が先の番頭の松兵衛となれ合て、直に戸を塞身上を承知でおれを急養子、そんなことは露しらず、這入つて見れば借金の、山も緣づくどふぞしてと、思ッたゆへに鬼兵衛にも、判をおさせた百兩の、金も養家へいれ佛事、それから宅へ出入もならず、音信不通とされたのは、みんな此方がふつゝかゆゑ。またそのうへに養子先の身上はぶんさんして、まだ後日にはこれがあると云つて番頭松兵衛が、畠山さまへ出さしてある五百兩の證もんは、おまへに上げますその代り、分散殘りの百兩は、私が七十兩、跡は外の者へつかはしますといつて、其身は上方へ登るといつて行衛なし。二番ばんとう久八といふ者が、信切におれが名代に畠山さまへ行つた處が、隨分金子は下げつかはすが、先達て松兵衛におふせつけられた殘月の御茶入、御拂ものとてわたしおかれしが、此ほど聞けば梶原家へ、千六百兩に納りしとの事、夏井丹次郎よりさしあげ置いたる五百兩をさし引き殘り千兩は、早

速に上納いたせと、いはれてびつくり立ちかへり、相談さい中お屋敷から、久八が宅へ役人衆がござられて、殿の御國へ御立ゆゑ、心づかずにおつたるが、夏井の家分散とあれば、ゆるかせならぬ茶入の金子、松兵衛ならびに當主人、丹次郎同道いたせと大むづかし。それから久八がはからひて、おれはしばらく世をしのぶ身のうへ、松兵衛は行衛しれず。段々久八が難儀するそふだ、とはいふものゝおれもまア、くやしい難をきたじやアねへか。よれ「まことに聞くもくやしいねへ。そしてだれがおまはんの病氣の世話をしますエ。主「ナニ世話といつて居付いて世話のしてもねへが、長屋の衆や又おもに世話になるのは今はなした、久八といふ人の、かみさんの妹が、女髪結をして、此近所に居るから、それが時々來て、何かのことをしてくれるのサ。よれ「そふかへ、其女中とはへ。主「女中とはエとは何のこッた。よれ「何でもないのかエ、どふも氣になるねへ。主「なにそんな浮氣な沙汰じやアねいわな、こふして居てもおゐらア實に心細イヨト。なみだはらく。よれ「若旦那へ、なぜそんなに悲しいことを言ひなさるのだエ。もふ斯してお在家が知れるからは。どんなことをしても私が身のおよぶだけはおまはんに不自由はさせやアしませんから、氣をしつかりと持つて、早く能くなつてお呉なさいヨ。こんな淋しい所に夜も獨でマアさぞ、ト貌をそむけて袖をあて、昔といへど遠からぬ、昨日にかはる此すがた、たとへ内證は兎も角も、大町小見世の若旦那、所がらとて何事も、花美に暮せし其人が、三疊敷を玉のとこ、ならでたまさか問ふ人に、さすが耻らふ憂住居。おもひやらるゝ男の心、憾れた女の心には、千萬無量のもの案じ、よそ目に知れぬ歎きなり。男はなみだをふきながら主「何サおいらア斯して遠慮をして居る身ぶんたから、不自由も何もしかたがねへ。どふも自由にならねへ身の上だから。よれ「サアそれだからモウこゝを歸りたくありませんヨ。主「そんな事を言はねへで、どふか又貌を見せてくんな、そしてモウおそくなるだらふいゝかへ。よれ「ナニ今朝はおそくなる用心をして來ましたヨ。奥座敷のに宅げいしやのねろ所のおゐらんにてそのこといへのおこよくのすいしたまへ。德さんの手紙をたのまれたから、裏前までわざ〳〵行つてやるつもりで取つて來たから、今日中に人をたのんでやればよいヨ。そ

して觀音さんと淡しまさんへお百度をして歸るつもりだから、餘ほど手間がとれることがあつてもいゝよふにしてありますヨ。ヲヤ火が一ッもなひねへトしいやう〳〵に火をおこして薬を煎じて置て上よう。どの土瓶だエ。主その火鉢の脇にあるヨ。トといひながらまくらもとのくすりを出してよれ「生姜も其盆のうへにあるだらふ。よれ「アヽ、有りますヨ、ヲヤ此口のかけた土びんかへトずおもはらひしがまたかなしくもなりふじゆうなるをさつしてふさぎおんが世話をしてよこしたのだ。よれ「おはまさんとはエ。主「いまはなした久八のかみさんの姉よ、おほかた目見の子の言つたかみさんとは其ことだらふ。夫はいゝがおいらの事を知つて居てはわりいのふ。よれ「ナニサ他はなんだか氣が付きやアしませんはネ、そして飯はありますかへ。主「ムヽおめしはゆふべ向のおばさんが來て焚いてくれたからいゝが、手めへ腹がへつたらうが、此近所にはどふも鳥渡喰はせるものもねへ。餘ッぽど遠いから困る。よれ「ナニ私やア午刻までは鹽禁だから、どふで何も喰べられませんが、おまはんに何ぞおいしひ物でもたべさしたひネ。私がなんぞ拵へて上げたひヨ。斯して居る中何ぞ用を思ひ出して御覽なねへトいかみながしもものたいだしてマアこれで何ぞ不自由なものを買つて置いて、そして身になる物をちッとたべてお見なさいよ。今朝はほんの朝參りではあるし、おまはんにあはれるかなんだか知れないから、寔に少金ばかりしかありませんヨ。またその内都合して出て來ますヨト手にわたせば男はうけとりきのどくそうに。「これじやアどふも氣のどくだ、そして米八、もふおめへけへるのか。よれ「ナニまた歸りやアしませんよ。おそくなつても今のわけだから宜いはネ。マアおまはんの首がひどくうつとしそふだねへ、そつと束ねてあげよふかへ、そふしたら心持がちつたアさつぱりなさるだらふ。主「そふヨ、まだ居ても能かアそろ〳〵ととかしてくれなナ。よれ「アヽどれトうしろへまはりてうれしそうに。私のさし櫛でもよからふネヲヽ〳〵寔にモウおそろしいト。心弱きは女の癖、過ぎ越し方を思ひ出し、髮水ならで袷元へ、ひやり落つる泪の雫、男は振向き主「よねヽ八なぜ泣く。よれ「それだッてもどふした。主「それだつてもどふしたんマアなぜこんなにはかねへ身のうへにならしつたらふねへトおとこのかたにとりす

がりなくおとこはふりむきよれ八が手をとりひきよせ。主「かんにんして呉なョ。よれ「ナゼあやまるのだエ。主「手めへにまで悲しい思をさせるから。よれ「エ、もふおまはんは私をそふ思つてお呉なさるのかへ。主「かわいそふにトだきよせればよれ八はあどけなく病にんのひざへよりそひ顔を見て。よれ「眞に嬉しいョどふぞ主「どふぞとは。よれ「かうしていつ迄も居たひねへ。

（春色梅兒譽美）

現代の寫實的小説の露骨なる構想は、この筆致を新しくせるものと見るべき節多し。

第七節　讀本

讀本の題材

江戸小説の他の一系統を讀本となす。草雙紙が童蒙の繪本より始まりて、諷刺滑稽の黄表紙滑稽本となりしに異り、又人情本が狹斜の洒落地口を直寫せる洒落本より轉じて、社會裏面の寫實小説となれるとも異りて、社會の全面を題材とし、上は王侯將相より、下は庶民賤夫に至るまで、堂々これを敍述して偏狹ならず、或は大事或は細事、涙あり、怒あり、驚あり、笑あり。怪をも避けず、情をも退けず。總じて結構雄大、まことに江戸文學の重任を負うて立てるものは、

實錄

太閤記

即ちこの讀本にありといふべし。讀本は寛政以後、文化、文政、天保の間に於て最も盛なりき。而して其の隆盛を致せる源は、これを實錄と淨瑠璃文學との指導に待ちしによる。淨瑠璃に就いては既に述べたり。今はまづ實錄の概畧を敍して其の然る所以を覗ひ覺らんと欲す。

實錄とは、もと軍記物語の系統より出で、一轉して英雄豪傑、忠臣義士の傳記事蹟を敍述せるものを云ふ。牽强架空の説あるは勿論なれども、文章を悅ぶにあらず詩美を味ふにはあらで、事實なりとして其筋を興がる事がこの小説の生命なり。凡そ社會上重大なる事件のありし後には、これを記憶に存して語り傳ふるのみならず、文筆ある者が之を記錄して他に傳ふるに至るは自然の勢なり。實錄は即ち是より始まる。戰國の末、織田氏、豐臣氏の雄圖を欣仰して何時の程にか太田和泉守牛一に信長記、豐臣記あり。寛永二年小瀨甫庵（始開白秀次に仕へ、其後、堀尾吉晴に仕へ、寛永元年加賀侯の臣となる、同七年七十七歳にして歿す。）これを修飾して太閤記廿二冊を作り、大に行る。寶暦年間浮世繪師近藤清春之に插繪を加へ、寛政年間、岡田玉山更にこれを整頓して、繪本太閤記を出版し、これより此の書いよ〳〵長幼の弄

實錄の種類

神田白龍

馬場文耕

ぶ所となる。甫庵と前後して三浦淨心に北條五代記あり、淺井了意に「將軍記」、「鎌倉九代記」等あり。是につゐで英雄傳、合戰記のみならず、平時の事件たる諸家の騷動、敵討、武者修行、政談の如きをも實錄とする事始り、同時に太平記讀より出でたる講釋師の文才ある者が、種々の題材に依りて新作をものする事も行れ來りぬ。享保の頃、江戸の釋師に神田白龍子あり。「太閤記大全」四十冊、「浪花戰記大全」三十五冊、北條五代成功記」二十冊、「豐臣實錄」三十冊、「近代諸士勳功記」十五冊等三十餘種の著あり。寶曆の頃同じく講談を業とせる馬場文耕あり。新作をなして時事を評論し、誹謗を極め、好んで貴紳の陰事を摘發したりしが、當時有名なる金森家の騷動につき、幕府の處置を依怙の沙汰なりと評して「平假名森の雫」と云ふを著し、忽ち幕吏の捕ふる所となり、反抗痛罵止まざりしを以て、寶曆八年十二月淺草獄門を申付けられぬ。かく實錄は多く時事を錄し、もしくは將軍及び諸侯の祖先を敍する物なれば、往々當局有司の忌諱に觸るゝ事ありしは、勢止むを得ざる所なりき。故に幕府は文化元年五月「繪本太閤記」を始め、是に類する實錄、錦繪の絕版を命じ、又天正以來の武士の名をあらはし、紋所を付するを禁じたり。これより實錄は寫本として世に行る。

大久保武藏鑑

大久保武藏鑑

扨も將軍家御召に依て、彦左衛門早速登城しければ、秀忠公は大御所の御遺言を受けたる大久保なれば、甚だ敬ひ給ひ、御座近く招かせられ、井伊掃部頭も上座を讓り、大久保を進めければ、辭退なく御前へ近々と進みて畏みぬ。秀忠公は家來ながらも父君御名代と仰せ置れし事故、御家督の儀を宣ひ兼て、掃部頭此程の儀を彦左衛門に尋ねべしと仰せ有りしかば、直孝則ち大久保に向ひ、今日貴殿を召さるゝ事餘の儀にあらず。一大事の御相談有ての事なり。將軍御世嗣の儀大御所御在世の時、家光公に定め置るゝ所、天下を讓るは大切なる儀と有つて、再び是を御評定有らんとの御事なり。依て老人の異見をも聞し召るゝ思召なりと聞きて、彦左衛門、是は事新しき上意を蒙る者かな。將軍の御跡目は家光公と定まり、天下の諸侯始皆以て尊敬し奉ること、公の知し召さるゝ所なり。是迄定りし儀を又々御評議有らんとは、家光公に何ぞ御過ありての儀に候や。又天下を治め玉ふ御器量もなき

との思召なるや。承まはり度存ずると言上す。秀忠公聞し召れ。家光未だ若年なれば過失ありと云ふにあらざれども、天下は私すべきにあらず。此故に我が子の中、其德を備へ四海を治むる器量を見て、讓らんと思ふなり。因て相談に及ぶと宣ひければ、彦左衞門謹んで之を伺ひ、然れば家光公の他に其器に當り玉ふ御方有つての御事なるや。何れも御公達と宣ふからは、駿府殿を以て家光公に代へ玉はん御所存なるべし。然れど是は君の御心より出でたる儀に候まじ。全く公の御世嗣に備はり玉ひし折、當公を父公へ進め奉つりし故を以て立身出世したるものあり。是に倣ひて他より進め申せしものなるべし。當公の例を以て兄君を捨て、弟公を立てんと進めしならん。これ論ずるに足らず。其故は當家御家督にならせ給ひし事は、御庶子と申すにはあらず。御兄公は越前殿なり。是は他家を御相續ありし故に、御子の中にあらずとて除き奉る。然れば差詰當公の外に御家督御相續有るべき御方なければ、是順當と言ふべし。殊に其砌は御當家御家督始めのことにて、決定の御方なき時なり。唯今は然に非ず。以前より家光公と御定めあり、大御所にも其御心にて御他界有りし事ならんに、今更改め替へんとの思召は、大祿を貪らんとする輩の辯舌に依つて、君を惑し奉りしならん。然なから何れも若君に紛れなき御事なれば、子を視る事父に如かずと有る古語に付て、御賢慮を廻され、家光公なり駿河殿なり、御心赴きしを以て御家督を定め給ふべし。家光公に居置るゝ成らば、天下諸人存ぜし事故觸れらるゝに及ばず。御舍弟を以て定め給ふ成らば、其旨天下へ知らせ玉はずんば叶ふまじ。日本の内は御下知も屆くべし。聊か飛脚の屆かぬ所あり、大御所は世を去り玉りひし事なれば、何者を以て此儀を告げ奉らん。御使者も御吟味有つて、其上事を定め玉ふべし。幸ひ此役勤めべき者三人あり。其三人は酒井左衞門、土井大炊、安藤對馬此三人にて候。大御所御在世に、竹千代公を守護し、主將に教育奉るべしと有つて、此輩を付け置るゝに依て、三人丹誠を凝し、若君を守護し奉り、治平の理解を御教導申せしに依て、御家督を定め給ふ所あり。只今に至り家光公を廢し給へば、此三人の者御教導其器に當らず、誠に空しきに似たり。然れば何の面目ありて存命せん。

彼等は必ず切腹すべし。是冥途へのゝぎき使者なり。併し乍ら此三人は家光公の守護なれば、冥途に於て依怙の沙汰を申さんも計り難し。目附として駿河殿に附き參らせし輩の中にて、一兩人を差添へられ然るべしと、遠慮もなく申し上げければ、將軍打笑はせ給ひ、彦左衛門が意見至極道理なり。先使者の出來る迄此沙汰無用なりと仰せける時、井掃部頭御前に向ひ、彦左衛門申上げ候通り、是は駿河殿御發明に在ませし故、附々の輩感んじ奉り勸め參らせし所なり。然れども才智のみにて天下を保つ事能はず、三德兼備の君を以て天下の將たるべし。武道の德天命を得ずしては、此職に備はる事能はず。御連祖足利尊氏公は、別けて名智の聞え無けれども、德の在ますが故日本の武將と仰がれたり。忠臣の正成だにも、始終勝を得ることあたはず。其德の元と云ふは正德の道なり。今駿河殿御發明にして、此德の基だに在ますば、縱令天下を讓らんと仰せらるゝとも、辭退あらば正道の心にて候。是を悅ばるゝは橫道なり。四海の鑑と仰がれ玉ふ將軍に、橫道ありては治まらず。況て此義は大御所の明鏡を以て定め置き玉ふを、今更變へ參らせん事、神君の掟に背き給ふ罪なり。能々御賢慮有るべき御事なりと、諫言を申上げしかば、將軍理に服し給ひ、兩人の諫道理至極なり。再び此儀評議に及ぶまじ。餘人に沙汰する事勿れと御意有りければ、井伊掃部頭謹んで、愚臣が諫言御用ひ有る事、公の御德にて、家光公其儘御仁愛に依らせ給へば、天下は益々泰平の前兆とぞ賀し奉る。之に因て秀忠公彌々御心決し、廢立の事を止り、終に家光公へ天下を讓らせ給ふ旨、元和八年の頃より其沙汰ありて、翌寛永元年七月十日、家光公征夷大將軍宣下を承りの爲上洛ある。殊更去る元和七年、秀忠公の姫公御入內ありて、後水尾帝の女御に立せられ、程なく中宮に成せ給ひ、東福門院と號し奉る。是に於て家光公上洛、禁中の思し召他に異なり。家光公正二位內大臣に敍任在〳〵、同年閏八月二十七日征夷大將軍淳和奬學兩院の別當源氏の長者に任ぜられ玉ふ。秀忠公を大御所と仰ぎ奉り、公武共に是を賀び、天下萬民に至るまで泰平を謠ひ、目出度御代となりにけり。

實錄は敍事平坦にして文飾なく結搆なく、小說としては未だ其の體を得たる

讀本の起原

近路行者

建部綾足

物とは言ふべからず。是に洗練せられたる淨瑠璃文學の粹を應用して次第に文學的發達をなすに至りし物は讀本なり。讀本とは、草雙紙が繪を主として文を從とするに反し、專ら本文を讀ましめて插繪は是を輔くるに過ぎざる性質の物たる義なり。寛延二年、近路行者が「古今奇談英草紙」五冊を作れるを嚆矢とす。彼は本名都賀六藏。大阪の人。性飄逸にして一定の住所なく、賣卜醫字を以て業とせり。（或は儒醫なりきとも云ふ。）又明和三年、英草紙の後編「繁々夜話」五冊を著せり。彼についで起れる者を建部綾足、上田秋成の二人とす。

綾足。字は孟喬、凉袋と號す。陸奥南部の人、享保四年を以て生る。初、京に出でゝ東福寺の僧となり、後還俗して江戸に出で、賀茂眞淵の風を慕ひて國學を修め、特に片歌を唱道して斯道を復興せんとせるも成らず。又畫を學びて寒葉齋と云へり。性磊落にして常規に則らず、往々奇事を以て人を驚せりと云ふ。明和五年「西山物語」三冊を作る。中古文體を用ゐて京西山に住める大森七郎及び八郎が、一旦隙を生じて後再び睦める筋を作れるものなり。安永二年、又「本朝水滸傳」十冊を出す。一名「吉野物語」と云ひ、江戸に出でたる讀本の濫

上田秋成

觴にしてやがて流行せる水滸傳物の始なり。當時はさまでに行れざりし如くなるも、行文流麗にして後輩の模範となりし點少からず。安永三年三月五十六歳にして歿す。

秋成。通稱東作、餘齋、無腸居士、剪枝畸人等の號あり。戲作には和譯太郎といへり。父は郡山の藩士生田源八郎、同僚を殺害して大阪の娼家に隱れ居たりしが、遂に北中ノ島崇禪寺馬場にて敵を討たれぬ。秋成は卽ち彼と其娘との間に生れし者といふ。長じて醫を業とし國學を眞淵の門下加藤宇萬伎に學ぶ。人となり、豪放不羈にして名利を顧ず、人と世とに順はざるの故を以て自ら橫行の蟹の異名を用ゐ、無腸とは云へるなり。國學註釋の編も少からぬが中に、八文字屋の浮世草紙の後をつぎたるもの、「諸道聞書世間猿」五冊、「世間妾形氣」四冊あり。讀本の體を得たるものとしては「雨月物語」五冊あり。支那小說の影響と覺しき幽靈怪談多く、悽愴人を襲ふものあり。第一段「白峯」は選集抄に西行が讃岐白峯の新院の御陵を弔ひし物語の改作にして最も有名なり。後世馬琴の如きは傑作「弓張月」中にこの趣向を取り、文體も多く彼が感化をうけた

る跡見ゆ。彼が戯作に尙「痴癖譚」あり。伊勢物語に擬して當世風俗を嘲罵せるもの。又「春雨物語」「雨夜物語」「藤簍冊子」の著あり。晩年京都南禪寺の側に庵居し、戯作を斷つて眞摯なる研究に從事し、文化六年七十八歳にして沒す。

白峯

あふ坂の關守にゆるされてより、秋こし山の黄葉みすごしがたく、濱千鳥の跡ふみつくる鳴海がた、不盡の高嶺の煙、浮島がはら、清見が關、大磯小いその浦々、むらさき匂ふ武藏野の原、鹽竈の和たる朝げしき、象潟の蜃が笘や、佐野の舟橋、木曾の棧橋、心のとゞまらぬかたぞなきに、猶西の國の歌枕見まほしとて、仁安三年の秋は、葭がちる難波を經て、須磨明石の浦ふく風を身にしめつゝ、行く〳〵讃岐の眞尾坂の林といふにしばらく筇を植む。草枕はるけき旅路の勞にもあらで、觀念修行の便せし庵なりけり。この里近き白峯といふ所にこそ、新院の陵ありときて拜み奉らばやと、十月始つかた、彼の山に登る。松柏は奥深く繁りあひて青雲のたなびく日すら、小雨そぼふるが如し。見が嶺といふ嶮しき嶽うしろに聳立ちて、千仞の谷底より雲霧おひ

上れば、呎尺をも覺束なき心地せらる。樹立僅に間たる所に、土墩くつみたるが上に、石を三つ重ねに疊みなしたるが、荆蒺藜に埋れて、うら悲しきを、これならん御墓にやと心もかきくらまされて、更に夢現をもわき難し。現にまのあたりに見奉りしは、紫宸清涼の御座に朝政きこしめさせ給ふを、百の官人はかく賢しき君ぞとて、詔恐みてつかへまつりし。近衛院に禪りまして、藐姑射の山の瓊の林に禁させ給ふを、思ひきや麋鹿の通ふ路のみ見えて、詣で仕ふる人もなき深山の荆の下に、神隱れ給はんとは、萬乘の君にて渡らせ給ふさへ、宿世の業といふものゝ、恐ろしくも添ひ奉りて、罪をのがれさせ給はざりしよと、世のはかなきに思ひつゞけて、涙わき出づるが如し。終夜供養し奉らばやと、御墓の前の平なる石の上に座をしめて、經文靜に誦しつゝも、かつ歌よみて奉る。

松山の浪の景色はかはらじをかたなく君はなりまさりけり

なほ心怠らず供養す。露いかばかり袂に深かりけむ。日は沒し程に山深き夜のさま常ならで、石の床木の葉の衾いと寒く、神清み骨冷えて物とはな

しに凄じき心地せらる。日は出でしかど茂きが林はかげを洩さねば、あやなき闇にうらふれて、眠るともなきに、まさしく圓位々々と呼ぶ聲す。目をひらきてすかし見れば、其のさまゝ異なる人の背高く瘠せ衰へたるが、顏の形、著たる衣の色紋も見えで、こなたに向ひて立てるを、西行もとより道心の法師なれば、恐ろしくもなくてこゝに來るは誰ぞと答ふ。（雨月物語）

初期の讀本

此等の讀本は未だ專門の作者を得ず、國學者或は狂俳師の餘業に成れる物多く、此外に、村田春海に「笠志船物語」二冊、石川雅望に「しみのすみか物語」二冊、「飛驒匠物語」六冊、「近江縣物語」六冊、鹿部眞顏に「月宵鄙物語」十冊等あり。いづれも雜種の性質を具有して、純然たる讀本小說とは云ふべからず、又黃表紙、洒落本等を凌駕するまでの勢力を得るに至らざりき。當代大阪に伊丹椿園あり、「今古奇談翁草」、「同深山草」、「今古小說唐錦」、「女水滸傳」等を出せしもまた振はざりき。

山東京傳

然るに寛政三年幕府令を出して洒落本を嚴禁するや、諸作者進路を杜塞せられて蘊蓄を展ぶるの地なきに苦しみしが、寛政十年に至り、京傳は讀本の作に轉じて「忠義水滸傳」十冊を出したるに、この書大に世に用ゐられて、茲に讀本の一風確立し、擬古を離れ滑稽を離れて眞摯なる作風は世の向ふ所となり、其の價値も漸く高まりぬ。彼の有名なる物は、「復讐奇談安積沼」五冊（享和三年）、「櫻姫全傳曙草紙」五冊（文化二年）、「昔語稻妻表紙」六冊（同三年）、「善知鳥安方忠義傳」六冊（同五年）、「本朝醉菩提」十冊（同四年）等とす。彼についで高井蘭山の「繪本三國妖婦傳」十五冊（文化元年）、感和亭鬼武の「奇談自來也說話」十二冊（文化三年）等人口に膾炙すと雖も、尙霸を稱するに足るものなし。

曲亭馬琴

此等の群小を拔きてひとり大に小說壇上に獅子吼し、一世を靡けて隆盛期の江戸小說を負うて立ちし者を曲亭馬琴とす。彼は本名瀧澤解、通稱を倉藏といひ、後、淸左衞門と改む、著作堂主人、玄同陳人、太榮山人等の別號あり。父は松平信正の家臣、明和四年を以て深川淨心寺の側に生る。幼にして讀書を好み仕途を希はず、醫を學び儒を修めしも兩つながら全からず、去つて戲作に身を委ねんと欲して山東京傳の家に投ず。京傳其の才を嘉して待遇甚だ厚かりき。寛政三年二十五歲にして始めて、黃表紙、盡用而二分狂言を作る。後、書肆爲重に保護せられて益心を著作に潛む。されど彼が嚴正なる性質は輕快を

馬琴の人格

主とする草雙紙に於て成功せず、享和三年に至りて「月氷奇縁」五冊を著すに及びて其の名漸く聞え、其賣高一千部を越えたりといふ。是彼が讀本著作の初なり。是より彼は方正なる君子として志士仁人に交り、當時の所謂戯作者流の遊蕩淫靡なる風を斥け、專心精力を讀書と讀本の作とに傾注し、向後嘉永に至るまで殆ど六十年の間、小說、傳記、隨筆、漫錄の類凡そ二百六十餘部の著述をなせり。

馬琴の文章

蓋し、彼は當代の小說家中類を見ざる偉人にして、たゞに品行方正なりしのみならず、博聞强識にして識見卓越し、學は和漢を兼ね、ほゞ諸子佛乘にも通じ、巷談街說と雖も悉く取て自己藥籠中の物となし、想を構ふること雄大、行文雅俗折衷し、艶麗にして諧調を併せ、汪洋として筆端の迫らざるものあることよく他に比を見ざる所なり。殊に篇中の性格が王侯將相より義人貞婦、田夫野人に至るまで、血あり涙ある眞人生の全般を描出せるは、浮世草紙、草雙紙等が蔓子賤妓の一面をのみ寫せるとは、大に趣を異にし、從つて其等が活動せる舞臺面の廣大なるは、そゞろに讀者を吸引して恍として美しき想像界裡に彷徨せしむる力あり。例へば馬琴の行文は多く七五の諧調に制せられて却つて生氣を失へりとの謗は免れざらんも、又、彼が著作の主義が勸善懲惡に存し、仁義道德を經とし、大義名分を緯とし、忠臣孝子を揚げ、亂臣毒婦を抑ふるにあるは、小說の本領を超越せる物なりと斥くる人はあらんも、それらはこの時代によれる白玉の微瑕、彼の大を減ずる所以にはあらず。滔々たる小說の小天地にこの巨人を出したるは、まづ以て大に賀せざるべからざる所なり。

馬琴の傑作

元祿の大阪文學に近松あり、化政度の江戸文學に馬琴あり、彼は韻文これは散文、兩々相對して德川三百年の文壇に重きをなせる者なり。

馬琴が一生の著述中、最も有名なる讀本小說を擧ぐれば

椿說弓張月	三十冊	葛飾北齋畫	文化三年―七年
三七全傳南柯夢	六冊	同　畫	文化四年
俊寛島物語	十冊	歌川豐廣畫	同五年
夢想兵衛胡蝶物語	五冊	同　畫	同六年
皿々郷談	六冊		同十年
南總里見八犬傳	百六冊	柳川重信等畫	文化十一年―天保十三年

朝夷奈巡島記　三十一册　歌川豐廣畫　文化十一年――文政十年

近世說美少年錄　廿五册　文政十一年――天保五年

尙數十部あるべし。就中八犬傳は彼が畢生の大著にして、稿を文化十一年、彼が四十八歲の正月に起し、天保十二年七十五歲の八月を以て完結せり。その間二十有八年、幾多の辛慘を嘗め迫害と戰ひ、晩年眼を患ふるや、文字の書寫に苦み、初は文字を大書して稿をつゞけしも、視力ます〳〵衰へて字體を辨ぜざるに至るや、嫁に囑して口述する所を筆記せしめ、かくて漸く其の功を遂げたりといふ。筋は搜神記に見えたる犬戒國の祖、盤瓠（犬の名）が、敵房王の首を得て侯に封ぜられ、美女を娶りて子孫繁榮せりといへる奇拔なる事件に思を寄せ、是に流行の水滸傳の英雄を結び合せたるものゝ如く、わが南總に新に起れる里見氏の愛犬八ッ房の體中より出でたる八箇の明玉が、八人の英雄に保持せられて仁義禮智忠信孝悌の八德を表し、各それ〳〵の行動をなす間に、或は合し或は離れ、悲あり慘あり壯あり快あり、波瀾百折、畢竟主家を起し、子孫繁榮の光明を以て終とせり。行文もまた艶麗雄大、古今小說の巨擘を以て目すべし。

情を含みて濱路憂苦を訴ふ

さる程に信乃は臥房に入りしかど、明くるを待てばいもねられず、ひとりつく〳〵久後を、思ふものから身一つを、誰は止めねど父母の、墳墓に今ぞ遠離る、里の名殘のいとをしき、心は同じ眞砂路の、濱路は臥房をぬけ出でゝ、つきぬ怨を言ふよしも、納戸の舞は二親の、目ざめぬ程にと心のみ、瀨かれて逢はぬ方にさへ、尙はゝかりの關の戸の、音たてさせじと闕ふむ、膝はふるへて定なき、うき世と思へば形なく、悲しくつらく怨めしき、郎の枕に近づけば、信乃はくる人ありと見て、刀を引きよせ岸破と起き、誰ぞやと問へば音もせず、原來癖者ぞざんなれ、わが寢息を覗うて、刺しも殺さんためにかと、疑へばいよ〳〵油斷せず、行燈の火光さしむけて、つら〳〵見れば濱路なり。端なくは得進まで、蚊帳のあと遶に伏し沈み、聲は立てねど咽る、涙に外を忍ぶ摺、素れ苦しとかこつめり。强敵には恐れざる、壯客ながら、打ち騷ぐ胸を鎭めて蚊帳を出で、鈎緒を解きつゝ臥簟を片寄せ、濱路は何等の所用ありて、更闌けたるに臥しもせで、爰へは迷ひ來給ひし、瓜田には沓を入れず、李下に冠を正さ

ずといふ、諺あるを知らずやと、咎むれば怨めしげに、涙を拂うて頭をあげ、なにしに來つるとよそ〳〵しく、言はるゝまでに形なき、妹妹は名のみ糾纏の、仇結なる中なれば、しか宣ふも無理ならねど、一旦親の口づから、許し給ひし夫婦にあらずや。日來はとまれかくもあれ、今宵かぎりの別ぞと、告げ知らせ給ふとも、御身の恥にはなるまじきに、出でゆくまでしらず貌に、たゞ一言の捨言葉、かけ給はぬは情なし。心つよしと怨ずれば、信乃は思はず嘆息し、人木石にあらざれば、有繋に情をしりつゝも、嫌忌の中に身を措く故に、口を開きて告ぐるによしなし。おん身が誠はわれしれり。わが胸中をばおん身しるらん。許我は僅に十六里、三日四日には往還すなるに、かへり來る日る俟給へと、賺せば濱路は目を拭ひ、左のたまふは僞なり、一たびこゝを去り給はゞ、いかでかゝへり來給ふべき。籠鳥の雲井を慕ふは、その友をおもへばなり。丈夫の故郷を去るは、その祿をおもへばならん。さてもわが彼二かたは、愛敬憎惡定めなく、おん身を懲悔くおもひ給へば、大約此度の起行も、出し遣るもの還るを樂はず。出てゆく人留るをよしとせず。かゝれば一たびこゝを去りて、いづれの日にか還り給はん。今宵限りの別にこそ。わらはが親は四はしらあり。そはおん身もしり給はん。しかれども現在の、二親これを告給はず。仄に傳へ聞侍れば、實の親は煉馬の家臣、胞兄弟もあり、とばかり聞えて、その姓名は定かならず。さればとて、養育の恩義を今さらに、化にには思ひ侍らねど、產の恩も亦高かり。いかで實の親のうへ、しらまくすれど、女子の甲斐なさ。人に告べき事ならねば、身ひとつに物を思ふなる、目睡ぬ夜の明がたの、夢にもがなと願言に祈らぬ神はあらずかし。斯思ひつゝ年月を、送るはいとも苦しきに、去歲の四月は思ひがけなく、豐島煉馬の兩家滅亡。そが家隷老黨も、皆遣りなく擊れきと、風聞大かたならざれば、さてはわが親同胞も、得こそは脫れ給はじと、思へばいとゞ哀しさの、やるかたもなき嘆きして、乾かぬ袖の片時雨、親には包む憂苦勞、切ておん身にうちあかさば、親同胞の名をも知らん。その陣歿の迹をしも、弔んよすがは外になし。世にある限り連れまとふ、良人には何を隱すべき。繁き人目の關の戸に、鷄のそら音のあれかしと、思ふものから折もなき、折を稍得て近づけば、

はやく母御に跟られて、遊迷ひて退きしは、去歳の七月の比なりき。これより後はいさゝ川、堰れて中に絶えたれども、下ゆく水のかよひ路は、かはらぬ心の誠のみ。朝な夕なにおん身のうへ、恙もあらず世に出し、富榮えさせ給はせと、禱らぬ日とてはなきものを、心つよきも限りあり。妻を棄て給ふが伯母御へ義理歟。わらはが思ふ百分一、おん身に誠ましまさば、如此々々の故ありて、かへり來ん日は定めがたし、潜びて出でよ共侶にと、宣はするとも夫なり妻なり、誰か密夫とて譏るべき。いと強面しと思ふ程、離れがたきは女子の誠。分つ袂にふり棄てられて、あくがれて死なんより、おん身丞にかけてたべ、百年の後を冥土にて、俟侍らんとかき口説く。いとも切なる恨の かず〳〵。泣音憚る千行の、涙は袖に滴へたり。信乃はその聲外にや洩れん。心苦しといへばえに、岩井の水をむすびかけし。縁しをこゝに釋くよしなけれど、愀然として嗟嘆しつ。乂きたる手を膝に措き、やよ滨路、おん身が恨はひとつとして、理ならずといふよしなけれど、いかにせんわがこの度の起行は、伯母御夫婦の指揮によれり。實は吾儕を遠離て、おん身に婿を招ん爲なり。素よりわれはおん身の爲に、夫にして夫にあらず。そはいひがたき二親の、底意を猜し給へるならん。然るを今さら情に攀れて、おん身を誘引出しなば、誰か淫奔といはざるべき。留りがたきを留り給ふは、便是わが爲也。去りがたきを出でてゆくも、亦是おん身が爲ならずや。縱且く別るゝとも、迭にこゝろ變らずば、遂に全聚るときあらん。親達の目覺めぬ間に、とく〳〵臥房にかへり給へ。われ亦心がけんには、おん身が親をたづね考へ、存亡をしる便著もいで來ん。とく去給へと諭しても、立ちもあがらず頭を掉り、濡れぬ前こそ露をも厭へ、二親のいざとくて、こゝへ來つるを咎め給はゝ、わらはもまうす事侍り。只共侶にと宣はする、おん身の應を聞侍らでは、生きて闕の外に出でじ。殺してたべと銜詰し、かよはき女子の魂も、こゝに居りて動かねば、信乃はほと〳〵困じ果て、潜びながらの聲を激し、さりとては亦聞きわきなし。命あらば時もあらん。死するが人の誠かは。たま〳〵伯母と伯母夫の、許しを得たる出世の首途。妨せばわが妻にあらず。過世の讐歟と箸れば、滨路はよゝと泣沈み、こゝろの願を遂げんとすれば、お

ん身の仇になるよしを、諭し給ふに術もなし。とにもかくにも形なき、わが身ひとつの故ならば、思ひ絶えて留り侍らん。さらば道中恙なく、折から烈しき日をけせず、許我へ参りて名をも揚げ、家を興して冬籠、北山下風吹くころは、風の便にしらせてたべ。筑波の山のこなたには、恙もなくて君をすと、思ふのみにて侍りてん。今より弱る玉の緒の、たえなばこれをこの世のわかれ。憑むはまだ見ぬ冥土のみ。二世の契は必ずよ。御こゝろ變らせ給ふなと、墓なき事を木綿襷、掛けてぞ契る願言は、怜悧見えても恍惚子なる、未通女ごゝろの哀れなり。信乃も有繋にうち芝折れ、慰めかねて點頭のみ。又いふよしもなかりけり。折から告る八聲の鷄に、信乃は心をおくの間なる、二親めざまし給はなん、とく〳〵といそがし立つれば、濱路はやうやく立ちあがり、天も明けば狐に咲めなん腐鷄の、未明に鳴きて佚を遣りつゝ。それは戀せし草まくら、是は旅ゆく妹妹のわかれ。鷄も鳴ずば天も明けじ。曉ずば人の目も覺めじ。恨しの鷄の音や。よに逢坂のあふ宵はあらで、ゆるさぬ關はわがうへに、在明の月ぞ果敢なきと、口實つゝ出でんとすれば、外

面に咳して、障子をほと〳〵とうち敲き、鷄が謐うて候に、いまだ覺め給はずやと、呼起す聲は顔藏なり。信乃は呼ばれて遽しく、應をすれば顔藏は、庖湢のかたに退きけり。疾くこの隙にと出し遣らるゝ濱路は瞼泣腫し、聞きかたより見かへれど、涙に霞ひ挾山形、紙張の壁に身をよせて、おのが臥房に泣きにゆく、現悲しきは死別より、生別にまさるものなし。

是に亞ぐものを、弓張月とす、鎮西八郎爲朝が一代の雄姿を傳したる物にして、遂に琉球を一統するに結をなす。悽婉の趣、雄渾の文、むしろ八犬傳を凌ぐ所あり。其の他の諸作皆各趣あり。世話的筆致の一例を示さん。

三七　全傳南柯夢

半七が宿かりし沓掛の客店は、驛稍盡處にていと大きやかなる家なれど、昔しのぶの生茂る、埋れ井の車とゝも、身上久しくまはりかぬ、網代天井は中孕て、雨漏に煤を彩色、壁の腰張悉剝げて、長押より月をも引くべく、高麗縁の席、鷹、ところ〳〵切れて、蓁を裂とせし故事も思ひ出でられ、竹縁は斜に朽ちて、絃斷し琴にも似たり。さればこゝに一夜を明すもの、或は廻國の修行者、或

は伊勢參宮の男の童、囉齋物まねの乞兒なんど、みな米はそなたより出して炊し、枕一ッを借りて燈火だに置かず。牛は牛づれの一隊、鼻より脱る訛聲にて、小曲子器しく謠ふあれば、欠の跡の念佛を聞き咎めて、物あらがひする題目宗あり。聲の高きは山里の老翁、眼の光るは浦曲の家々にや。朝だちすとて草鞋穿きかへられなと罵り、菅笠踏潰されて同行の面汚せりとていきまくもをかし。衆皆出去りたる後は、大風の俄頃に凪たるごとく、搔きおとせし虱の外にはとり遺したるものなし。座敷いくまもあるかひには、三勝は一間を借りて、病みたる夫を臥さし、破襖もて出居のかたを塞ぎたれば、かかる從どものいふ事もあらねど、毎夜にかはる彼此人のうち語ふ聲を聞きて慰むる月もあり。又わがうへに思ひくらべて、世を觀ずる夕も多かり。かくて半七は、こゝに病臥してより、思の外に日を過し、物みな沾竭し、いよゝすべなし。常言に、座して食へば山をも空しといへり。よしやいかなる耻を忍ぶとも、夫を濟ひ女兒をも餓ゑはさせじとて、三勝はます〳〵志を勵し、お通がもてあそびの三味線は、彼がいと惜しむものなれば、近江を出づるときも、行李の中に包み入れてもて來つるが。皮もやぶれたれば、是のみいまだ賣らず、三勝はこれこそ究竟のものなれと思ひて、毎夜に笠をふかくし、しのび〳〵に彼三味線を抱きて、街を徘徊し、人の門に停立つゝ、こゝろにあらぬ柳節（後段節と故あり略之。）を謠ひて、錢を乞ひ、米を得て、その日〳〵を過せしが、お通をばよく睡らしして出づるほどに、絶えてかくとは知らざりけり。半七は又三勝にかく淺ましき所行をさすること、みなこれわが身ゆゑ也と思ふにも、いよゝ世の中を形なくおぼえて、顏色もやゝ焦悴、ある夜三勝が出でゆくを見送りつゝ嘆息し、うたてやな、われも一たびは、續井家の近從に召され、君父の蔭とはいひながら、人なみ〳〵の世を經しものを、忠義の爲に不忠といはれ、不孝の子となりしより、年豐なれども日を算へて食ひ、世は暖なれどもわが眼には春色なく、千辛萬苦にあふみ路なる、多賀に住みわびて出でたるが、又や旅寢に病鴈の、妻子に憂を見するこそ、わが病著より苦しけれ。さるを三勝が信々しく、昼は終日看病し、夜は耻を忍び、門に立ち、親子三人が玉の緒を、三すぢの糸に繫ぎとむる、その三味線の手の内を、受くる扇は名も高き、

舞の太夫のなす事歟。しげれ松山筑波山、降りて今の雛節も、こゝらの人には馬耳東風、かゝる時にも藝は身を助くるほどの薄命、大和にありて三勝を、妻としお通を産ましなば、乳母に抱し傳けて、假初の出で居にも、商人等には會せもせじ。それ悔しとは思はねど、われゆゑに三勝には、いくその物を思はせて、舞子に劣る乞食をさしつゝ見つゝ存命ては、たえて世にあるかひもなし。白河にて死すべかりしに、彼が心操をいたづらになしがたさに、よしなや六年生き延びて、いとゞ歎をまさしたり。貧の病に身の病、片輪車の足腰たゝで、いつまで思ひ沈むべき。慈にわが身あればこそ、彼等は人に寄りかたけれ。われなくば人も憐み、よろしき方に給事て、立ちまさる事もあらん。親はなくとも子は育つ。歎くは愚癡歟、子を思ふ程には親をおもはなくに、父はいかになり給ふ、園花も今ころは、他し縁しや締びけん。もししからずば恨むらん。とてもかくても活きがたき、わが身を捐なば妻や子の、又浮む瀬もありぬべしと、こゝろひとつに覺悟して、さて翌の夜を待ちにけり。ともしらずして三勝は、その夜五六合の米と二三十の錢を得て、二更の比及に立ちかへり、まづ夫の安否を問ひ、お通が睡轉たるに枕さし、曉の炊を誂へなどしつ。小夜更くるまで半七が腰を搔捺り、行末來しかたを語り慰むるに、半七は今宵限りの名殘ぞと思ひしかば、こゝろよげにうち晤譚つ。且して三勝は、夫の睡れるを見て、潛やかに手を休めつゝ物を引被け、お通を搔抱きて、夫のほとりに臥し、詰朝とく起きて火を乞ひ、粥を煮さして夫と女兒に食し、われは餘れるを啜りて、終日看病す。その劬辛艱難は比べんにものなかるべし。かくて三勝は、この日又宵の街に出で、物を乞はんとするにお通は蚤癢したればにや、常にかはりていまだ睡らず、半七が顏色も、きのふよりあしう見ゆるに出でかねて、とかくする程に、初更の比及にも垂とす。餘りに思ひかねて、夫にいふやう。この夜をいたづらに明しては、翌の炊をいかにせん。しかはあれ、今朝よりわきて食もすゝみ給はず。お通さへ睡らぬに、迹を慕はゞ便なかるべし。今宵は出でずもありなんかといふに、半七答へて、いなわが身食のすゝまざるは、起居自在ならで、内の透かぬ故なれば、患とするに足らず。お通をばともかくも賺こしらへて睡らすべし。毎夜の

事なれば、遊廓は出でずもがなと思へ共、翌の炊に物缺きてはいよゝ便なし。更けぬ間にとくゆきて、とく歸り給へといふ。三勝聞きて、さらばしかいたすべし。枕方なる火桶に火を活けて、土瓶に湯もぬるまして侍り、厠へ登んとて、强て身を起し給ふな。お通に指燭を乘し、座行つゝゆき給へよ。彼處の竹椽は半朽て侍り。おなじくはわらはが歸るを待ちて物とゝのへ給へとて、叮嚀に聞えおき、さて三味線を袖に抱きて出でんとするに、お通ははやくこれを見て、母御何地へか行き給ふ。など伴はし給はざる。その三味線はわが身のに侍り、返し給へと携著。聲高しとは思へどもことはりなれば打ちも叱らず、そなたを將てゆくべくは思へども、西の街には、おどろ〳〵しき豺出ゝで人を囓むといふを聞かずや。大人しやかに留主致して、篆さまの陪從をせよ。小麥の團子を買うて得させん。又この三味線は、皮も破れ海老尾も缺けてあり。皮張更へて得させんに、しばし母に貸してたべと賺されてうち點頭、しからば皮を張りかへさし、とくもて來て給はれや。應もてこざらんやもて來べし、よく留主せよといひかけて、夫のかたへ注目し、尻切草履穿て足ばやに、暗の方へと走せ去りぬ。

かれはまた其の間、舊知の書賈のために黃表紙を作り、燕石雜志、玄同放言等有益なる著述をも出したれば、晨朝深夜しばらくも安逸せず、一生を筆墨裡に費して文學者の本分を完了したりき。嘉永元年十一月八十二歲にして歿す。

馬琴沒してより數多き讀本の作者甚だ振はず。彼の唯一の門下、櫟亭琴魚の如きもまた言ふに足らず。

此の節を終るに臨みて覘ひ置くべき事は合卷の發達につきてなり。合卷が黃表紙の續き物より始れる由は前に述べぬ。寬政の嚴令以後、黃表紙の內容が世話よりも時代に、町人よりも武士に、人情よりも義理に、滑稽よりも訓誡に傾き來ると同時に、時代物、武士物、訓誡物を以て題材とせる讀本が隆盛を極め來りしに逢ひて、合卷も次第にその影響をうけ、內容を豐富にし、繪畫を精選し、口繪を入れ表紙を美しうして專ら人氣に投ぜんとしたりしかば、文化、文政以後、黃表紙を壓して合卷しきりに行はれ、一方讀本と相對して小說文壇の一部

を雄歩し得るに至れり。而して讀本は一冊十五六葉の本文に、略畫二葉を插入するに過ぎざれば、多少讀書力ある者にあらざれば其の妙趣を喜ぶこと難きに反し、合卷は繪雙紙の發達せるものとて、繪畫まづ多くの顧客を引きつけ、平易なる文章もて讀本と殆ど相擇ばざる內容を敍したるものなれば、其の賣行は遙に讀本を超え、讀本の最も行れたるものにして、一千部內外、二千部は超過せざりしに、合卷は凡そ七八千部、最も多きは一萬數千部に及べりと云ふ。

合卷の盛行

されば黃表紙の作者は勿論、讀本の作者も亦これを作り、京傳、馬琴、一九、三馬、京山等皆多くの作を出せり。就中合卷物專門の作者として有名なるを柳亭種彥とす。

柳亭種彥

種彥。通稱高屋彥四郎、幕府の士にして愛雀軒、足薪翁等の別號あり。天明三年を以て生る。多能にして狂、俳、畫をよくし、又頗る演劇を好む。文化の頃より、黃表紙、洒落本、讀本の戲作を試みたりしが、春町、京傳、馬琴等の先輩と相並ぶこと能はず、遂に轉じて合卷物に筆をつけ、茲に於て獨歩の名を成すを得たり。戲作の著數十種、特に傑作と見るべきものを、偐紫田舍源氏（三十八編、文政十二年―天保十三年）とす。趣向は紫式部が源氏物語の翻案にして、世界を室町時代の殿中に取り、文の優麗、語の精巧なるは勿論、數多き婦女の容貌性格を寫出し、衣服調度の末々までも研究して、よく其の趣を得たるを珍とす。畫工は五渡亭香蝶樓國貞、相侍ちて其の名をあげたり。時の將軍家齊公自ら之を繙きて賞讃せられきと云ふ。されどこの書完結に至らざりしは惜むべし。

時もとめし鴉瓜、夕の露と凋みたる、花の姿を光氏は、年月ふれど思ひ忘れず、彼に似たらむ女もがなと、尙戀りずまに浮かれ歩き、みめよき娘ありときゝては、或は章にてほのめかし、或は人して言寄り給ひ、かの空衣の打解けざりし、寢の姿を思ひ出で、又村荻をさりぬべき、風の便に驚し、只色好みの浮れ人と、世に讒られて名劍の、在所を只管尋ねつゝ、音川山名の確執より、世の騷とやなりなむと、密に心を痛めけり。今年光氏十八歳、彌生中旬の頃よりして、瘧疾にわづらひぬ、是俗に云ふ瘧にて、加持呪の效もなく、僅の程に衰へければ、父義正は更にも云はず、藤の方は大方ならず、苦慮乍らも世の聞えを憚り思ひて、明々地に對面はし給はず。側使の杉生を使となして、日毎〳〵病を

間はせ給ひけるが、或時杉生、光氏の機嫌を窺ひ言ひける樣、此都より北山の、鞍馬寺の麓なる、野中の里と云ふ處は、市原野より遠からず、直に登れば藥王坂、鞍馬川の流にそひ、最景色よき處に侍る。されば六條三筋町に、遊女を數多抱へおき、客を迎へて世渡となす者抔が、騷しき處に飽きて此野中に、別莊とか名附けたる下屋敷を構へおけり。其中に二見屋と呼びなす者は、大家にて彼が抱の遊君に、貴き守を持つ者あり。こぞの夏も瘧の病都に、流行り、おち兼ねたる人々是を聞き傳へ、かの遊君に咒を受けて全快したりし由は世に能くしれる處なり。其遊女も此程より、病氣に依て野中なる別莊に籠りゐて、座敷の外へも出でずとやらん。まづ試に此者を是へ召されて御覽もやと聞えければ、打笑み給ひ、坐敷の外へ出でずと云はゝ、呼ぶとも容易く來るまじ、如何はせん忍びやかに某彼處へ赴かんと、例の惟吉赤松太郎、高直始め、ひと睦じき近習の武士を四五人許供につれ、其次の日曉に館を立出で給ひけり。……光氏は小陰を立出で吻と斗りに吐息をつき、偶か館を出でぬるだに、思の外の事を聞け、かの國助は家富みて、家臣の面々多く持てり。彼宗全に組せんには、彌以て世の亂、ア、如何にせん〳〵と、暫默して居たりしが、光氏何か心に點頭、夫よ〳〵ト小膝をうち、惟吉來れと近く招き、予思ふ仔細有りて、今宵は是なる忍屋へ、押して宿を求むべし。汝は一とまづ二見屋へ立戻つて、光氏は俄に餘儀なき事有つて、直樣嵯峨へ歸りしと、言拵へて殘り居る、僕を引連れ室町の館に馳せ行き黃金を請取り、過刻見つる紫とか呼べる少女の身の價を、此家の主人に渡すべし。國助に先越されなト急がせ給ふ。此方より彼の忍屋の遊女ども打連れ立ちて出來り、「六條の營繕の中、爰に居るとは、光樣の知つて居乍ら知らぬ振、サアでざんせト手を取れば、エ、まんがちなト傍から一人が差出す狀取り上げ、當月十日過からして、瘧を病ひ堪難く、人の敎で二見屋へ呪には來れども、直らぬ時は胡盧と、態と今迄忍びたり。予六條へ通ひ行き、揚屋に夢を結びし時、此忍屋の遊女をも迎へし事は有りつれど、馴染重ねし者はなし。心得難き此狀ト、繰開いて火光に透し、同じ柴の庵なれど、少しは清しき水の流も御覽ぜさせんト口の中、讀みつゝ遊女に誘はれ、切戸の中へ入りにけり。光氏四下を打見るに、同

ヒ木草にあり乍ら、心を用ひて植渡し、月なき夜なれば殊更に、點しつれたる燈籠の光は庭のやり水に輝きつれて最赤く、よし有りげなる廣座敷、南面を清げに補理ひ、そら焚物心にくゝ、薫り合ひたる名香の匂も、四下に光氏がおひ風のいと異れば、家の遊びも自ら心配を做すべかめり。光氏も先の程、遊女輩が事々しく予を見ん迚嘘々きしを、垣の外にて聞きしかば、見劣り做さんもつゝましく、顔を背けて言ひけるは、「予六條へ通ひし折、此家の遊女を預り護る、名を小玉とか呼ぶ老女に面會なしたる事の有り。今も此家にあらんには、予に逢はせよ問ふ事ありト尋ね給へば、言の葉が「小玉主には此頃病氣、お逢ひなさるかなさらぬか其程は知らねども、仰は傳へ申さんト次へ立ちて云々と言ふに、小玉は眉を顰め、「光氏樣の六條へ忍んで來駕ありし時、態と妾は座敷を避け、お目に懸りし事はなし。然は去乍ら彼方より仰あるのを否ひも恐、只今夫へ參らんとト言ふも程なき處なれば、洩聞ゆれど光氏は更ぬ風情に打ち紛らし、密に小玉へ吾儕が物語る事のあり、皆の者には暫の間、先此處を遠避けてト、只一人にて待給ふ。程なく小玉は次の間より膝行出でしが、身の程を恥ぢてや少し又退き、手をつかふれば光氏は、態と親しく打笑ひ、「過ぎつる夜半に現然と、予此處を夢に見たり、御身の娘と覺敷て、最艶麗なる一人の女、傍に侍りしが、樣子を聞けば吾儕が母とも頼む藤の方の血統の者と打聞きて、驚き乍らに覺めて後、最々怪しく思ひ乍ら、事に紛れて問ひもせず、今日不思もこゝに來り見れば、見る程夢に見し處に少しも違なし。然せる娘を持てりやト、彼の垣間見を悟られじと、孫と知りつゝ娘と取做し、猶も確に知らまほしく、夢に事よせ問給へば、小玉は驚き涙にくれ、「妾も娘を持ちたりしが、早くも此世を去り行きて、紀念に殘すは孫一人、是も女に侍りて今年漸く十二なり。身に恥ぢ人に恥づるから、深くつゝみて素性を語らず、血筋を糺さば其孫は、宣ふ如く藤の方の姪にや當らせ給はんか。君の御夢物語いと怪敷にほだされて、實を明し侍るト恥ぢ入る氣色の見えければ、光氏猶も近く寄り、「夫は僥倖の事にてあり、其孫予に得させんや、吾儕は早十八歳、似氣なき程と思されんが、心の儘に敎へたく、成人させて見ばしゝ。音響にも聞きつらん、二葉と云へる本妻は、はや疾くに定りたれど、予より年

もなし、其上心打ち解けぬ性質ゆゑ、睦しからず、父赤松の館に置きて、折節毎に通ふのみ。予は嵯峨野に一人住さすれば其子を連れ行くとも、誰かは咎めん、心になる繼け給ひぞト聞えければ、小玉は猶も恐入り、最有難き仰の程、嬉しと云はんも憚あり。去乍ら、孫紫は十二なれど、其心ざま無下に幼く、今より連行き給ふとも、御慰になりはせじ。お年の違は六つ七つ、女はふけ行く者なれば、年を積みたる其後は、遙に孫より君の方、若やぎ見えさせ給ふべし。似氣なき故に言ふには非ず。今三年程待ち給へど、細やかに答けれど、光氏微笑み「抑女と言ふ者は、浮世の人に欺待れ、大人にはなる者と聞く。其幼氣なる擧動を、却つて懷しく思ふなり。斯くまで望むも夢いさゝか、浮きたる心に言ふには非ず。母にも勝りて吾儕を、御寵愛み給はりたる、藤の方の所縁と聞き、こゝに置かんが嘆かはしく、是信實に聞ゆるなりと、詞を盡して宣へば、小玉は暫く思案にくれ、然程に思し給はらば、紫の父何某へも、事の仔細を告げて後、仰に從ひ進らせんト、直よかに言出でければ、若き心に光氏も恥しくてや能くも聞えず。小玉は耳を欹てゝ、今うつ鍾は初夜にやあらん、次第に弱る此身の病氣、賴み參らす阿彌陀佛、讀經なしたる其後に、又も御目に懸らんト、手を打鳴して遊女を呼びよせ、光氏の寢やを設け、小玉は次へ立ち去りけり。

（田舍源氏、第六編）

對照の爲に原文の前部のみを抄出す

わらはやみにわづらひ給ひて、よろづにまじなひ加持などせさせ給へど、しるしなくてあまたたび起り給うければ、或人北山になむなにがし寺といふ所に、賢きおこなひ人侍る。去年の夏も世におこりて人々まじなひ煩ひしを、頓て留むる類あまた侍りき。しゃこらかしつる時はうたて侍るを、疾くこそ試みさせ給はめなど聞ゆれば、召に遣したるに、老いかゞまりて室のとにもまかでずと申したれば、いかゞはせむ忍びて物せむとの給ひて、御供に睦まじき四五人ばかりして、まだ曉におはす……

（源氏物語、若紫）

諸國物語

是についで行れたる物を、「邯鄲諸國物語」（天保五年―同十二年）とす。これまた近江、出羽、大和、播磨凡て三十二卷のみにして完結せず。而して此等の合卷物は文化中より次第に表紙を華美にし、彩色を施して人目を誘ふ性質に進み來りしが、種彦に至りてこの性質更に大に發達し、舊來の用紙を改め、表裝著色に意を用ゐ、繪畫の意匠に至るまで、細心精緻を極め、讀者をしてまづ其繪畫に恍

今卷の製本

惚たらしむる事となれり。新版の賣高萬を超え、あらゆる小說を壓して未聞の流行を見るに至りしもの所以なきにあらず。

正本製

種彦にまた正本製と云ふものあり。文化十二年、初篇「お仲清七」六冊、同十三年二篇「小いな半兵衛」六冊より、天保二年に至るまで凡て十二編を以て完結せるものなるが、こは演劇脚本と草雙紙とを折衷したるものにして、文體は總て臺詞ト書を以て成り、口繪插繪の人物をば悉く當時俳優の似顔となし、周圍の裝飾調度等は、皆舞臺上の大道具小道具に擬したる物とす。されどこは一時世の好評を博したりしも、流行は僅に彼一代に止れり。彼また學を好み、德川初代の風俗を考證せる多くの著あり。「用捨箱」、「還魂資料」、「足薪翁記」等今も世に行る。

種彦の雜著

かくて彼れは天保十三年水野閣老の風紀振肅に際して叱責を受け、組頭の辯疏により幸にして罪なき事を得しも、これより憂懼終に病を發し、同年七月六十歳を以て歿す。

彼の門下に笠亭仙果、柳下亭種員等あり。萬亭應賀、二世爲永春水等にも此の種の著あり。最も有名なるは

末期の合卷物

兒雷也豪傑譚　四十四編　（國芳、柳下亭種員作）　天保十年―
白縫譚　廿八編　（歌川國貞、柳下亭種員作）　嘉永二年―安政六年
（以下九十編まで明治十六年に亘りて數人の作）
釋迦八相倭文庫　五十七編　（豐國、萬亭應賀、國貞等畫）　弘化二年―慶應四年
八大傳犬の雙紙　四十編　（歌川豐國、笠亭仙果、國貞畫）　嘉永元年―安政六年
（以下六十編まで明治初年に亘りて柳亭錄作）
北雪美談時代加賀見　四十四編　（歌川國貞、世爲永春水作）　安政二年―
（以下四十八編まで柳水亭種清作）

等とす。維新の際花笠文京あり。其の門下假名垣魯文、明治初代の小說戲作に名あり。合卷小說は其の後跡を絕したれども、今の新聞の續き讀物は一部かの性質を襲套せしものと見て可なり。

國文學と各時代

結論

顧れば我が國有史以來既に二千五百餘年、初め神話と傳說とによりて養はれたる素朴の民性も、支那及び印度の文學宗敎を輸入するに及んで大に其面目を改め、天平の前後に遒勁なる文藝を製作し、藤原氏の盛時に優雅なる文學美術を產出しぬ。されど王朝の衰頹はやがて文藝の墮落を招き、古典（クラシック）の文學はいやが上に濁りて鎌倉室町の間淸泉の流を見ず。唯此の間、次時代に社會の勢力たるべき文學の平民性が、萠芽を示し來れるのみ。蓋し我が文學史に於ける上古は原始の時代。奈良朝は前期の惰力として一部に原始的狀態を反映し、他方に古典成立の準備的過程を示すもの。平安朝は古典文學の中心。鎌倉はその衰頹期。室町時代は一轉して別趣の文學を現出すべき過渡の狀態を示せるものと云ふべし。德川文學は則ち新しき裝を以て、古典文學に對して現れ出でしもの。彼が初期は前代の繼承として啓蒙敎訓の作のみ多かりしも、淸新なるべき機運は明にこれらの間に於て步を進め、短詩に芭蕉、長詩

文學と時代思潮

に門左衞門を得るに及びて、俄然として舊套を棄却しぬ。小說の西鶴亦これに貢獻する所少からざりき。

凡そ文學は、各、時代思潮の產物ならざるべからず。そが筆致の主觀的なると客觀的なるとを問はず、理想的なると寫實的なるとを論ぜず、其の時代と最も親密なる關係を有するものが最も有力なる性質のものたらざるべからず。何となれば、觀者及び讀者の同情は卽ち其の時代思潮の產物なればなり。觀よ、紫式部が源氏物語、紀貫之等の古今和歌集は詐る事なき平安朝第二期第三期の思想を流露したるしものなる事を。先人の思想に囚はれざるを以て特色とせる芭蕉の俳諧、義理と人情との間に生ずる煩悶事件を畫ける近松の淨瑠璃も、自由研究の元祿時代が生ぜる卓見と云べかりき。降つて儒敎主義の旺盛なる化政度の馬琴も、彼が大義名分を重んじたる勸懲主義によりて、時代の產兒たる事を遺憾なく發揮せり。

囚れたる文學

以上に反して時代に生活し乍らも、その時代の聲を聽かず、徒に前代文學に眩惑して之を摸倣したるものは文學衰頹の原因となりき。源氏物語の散文が

既に狹衣物語に衰へ、伊勢物語の和歌傳說が早く大和物語に鈍りしより始めて、短歌が八代集に止めを指したる、御伽草紙、古淨瑠璃の文章の生氣に乏しき、皆この理に基づかざるものなし。是を箇人に取るも、自ら時代の精神を捕へたる者が獨創の見にして、其の趣味筆法を套襲せる者が囚れたる文學者と云ふべかりき。馬琴も輕快なる黃表紙に於ては摸倣にして彼が價値を認めしめず、爲永春水も人情本に著意するまでは、彼の存在は無意義の者たりしにあらずや。此の如くにして我が國文學は一盛一衰し、德川二百六十年の末、王政復古の大業によりて過去の幕を閉ぢ終りぬ。

維新の大變は總ての過去の破壞にして總ての未來の創設なりき。かるが故に、幕末隆盛を極めたりし草雙紙、讀本、人情本の如きも、殆ど打絕えて見るべき者なく、惰力によりて僅に餘波を引きし者も創刊の新聞紙上に面影を示すに止りて、又昔日の觀無きに至りぬ。かくて世は明治に移りて萬事みな新を欲し、政治、軍事、科學、哲學の類より、美術、文學、百般の事項に至る迄、擧げて泰西文明の指導に仰ぐべき事となるに及びて、明治の初年は悉く舊文明破壞の時代となりぬ。されど新しき文明は、全然外國思潮の輸入のみを以て創設し得べきものにあらず、たとへその國家が政治上に於て全く面目を改むる事あるも、數千年間養ひ來れる國民の性情は到底革むべからざるものたり。一國の民性一時一人の形作れる物にあらず。譬へば其の國民の悉く滅亡に歸せざる限は、如何なる外來思潮も根底より文明を改造する事は能ふべき所にあらず、必ず從來の民性に同化して始めて文明の意義を成すべきものたり。殊に我が國民は旺盛なる民性と而して同化力とを有す。この民性と同化力とは、一は氣候、風土、遺傳、體質等の自然的約束にもよるべけれど、尙重大なる原因は、第一民性の反映にして直に第二民性の培養者たるべき祖先傳來の文學及び美術音樂等にあるは論なきなり。されば現代の初、一度彩華ある外國文明に眩惑して、己を忘れて彼に趣き、あらゆる文明を擧げて所謂歐化主義に偏せしも、やがてこれらの反動たる國粹主義の唱導起り、又、兩者の長を採つて短を補ふべしとの折衷說も行れ、一方彼を容れ、他方に我の本性を自覺し、兩者相待つて面目を改めたる新文學を成就せざるべからずとの思想は、凡そ現代識者の首肯

日本文學史研究の必要

する所となりぬ。然り、新しき文學は外來の新しき刺激によりて起れる新しき活動に待つもの多きは論を待たずと雖も、これを同化してこれに生命を與ふるものは、必ず本來の民性ならざるべからざる事も、爭ふべからざる事實なり。此の意味に於て、わが日本文學の歷史的研究は、特に重要なる物たらざるを得ず。たゞにわが祖先の有せし文學を知るの興味のみに止らず、此研究によりてわが民性發展の狀態を學術的に理解し、其効と過とに鑑みて更に現代吾人が、文學に對する主義態度を確定する事を得ればなり。吾が國の前途は尙多くの努力を以て盛に外國文學をば輸入し模倣せざるべからずと雖も、これと共に、わが先代文學の歷史も更に〳〵精細なる研究を要し、その結果をば一般知識として國民の間に普及せしめざるべからざる理玆に存す。頑迷なる國粹者がひとりわが先代をのみ重んじて、外國の思想を輕んずる事の甚だ誤れる者たるが如く、外國文學の研究者が先代の日本文學に注意を拂ふ事少きも極めたる謬見と云はざるべからず。此の如き誤謬の見解は共に眞摯なる文學史研究によりて根底より打破せらるべきものと信ず。今の時は恰も奈良

今後の方針

朝以後平安朝の初期、支那印度思想の盛に紹介せられ居たりし頃と同じく、勉めて泰西の文物を輸入せざるべからざる間に屬す。輸入の時代は創作の時代にあらずと雖も、やがて旺盛なる創作時代を現出すべき根本的準備を爲すの間と見るべし。されば吾人は幾百年の後に至るまでも、明治の照世を代表すべき大作を、現代に產出し得ざるを悲まずと雖も、我が國民に未來百年の成功を期すべき自覺を有するや否やと危ぶむ者なり。敢て一言を年若き文學史の研究者諸君に呈せんと欲す。

人名書名件名索引

一總ての頭字は現今の發音に從ひ「かう」を「こう」に「さう」を「そう」に入る。但し「ゎ」と「くゎ」とは便宜なるまゝに區別をなせり。
一人名には姓を用ゐず、藝名の如きにも總てこれを省けり。
一註釋書には總て本典の名を省けり、例へば「源氏物語玉の小櫛」を單に「玉の小櫛」とのみ出せるが如し。但し「古事記傳」と云ふが如く本典の名なければまぎらはしきにはこれを附せり。
一淨瑠璃脚本等の角書は總て略せり。又長々しき稱呼は通用の例に從ふこと、せり。「例へば父は唐土母は日本、國性並合戰」をたゞ「國性並合戰」とのみ出したるが如し。

あ

愛隨若　三九八
青本　六四六、六四七、六五〇
青柳　五八八
明石　五三一
赤染衛門　一四二、一四四
蜻居　六〇一
蜻居家集　六〇一
赤人　三〇
赤本　六四六
赤瓦　六四八、六四〇
秋成　六〇八、六九九
秋軸　一二一、一二三
秋夜長物語　二一二
悪方　五四三
悪坊
曙草紙（櫻姫全傳を見よ）　三〇〇
淺くとも　五三〇
朝顔船　五二九
朝顔檢校　五二三
朝比奈巡島記　七〇六
足利學校　三三六
芦屋道滿大内鑑　四三七
阿直岐　一三
篤胤　四三七
春滿　六〇三
吾妻鑑　六四九
吾妻問答　三〇〇
敦盛　三五〇
阿口判官　五九九
阿佛尼　三四、三五、三三
阿彌陀の胸割　三九九
阿禮　二
油屋お染秋白絞　四五五
安倍晴明記　三四四
天語　八
天兒屋根命　九
天岩戸　九
雨夜物語　七〇〇
闇齋　三三七
案内千本通人藏　六四九
安積沼　七〇三
蛙文　四五九、四六〇
綾足　六〇二、六九八
梁　三九九
荒事　四〇一、五四三、五四四
荒御靈新田神德　四九九

い

家隆　三三七、三三八、三三一
家康　三三三
硫黄が島　三一八
以貫　四八二
軍の歌　七
生玉心中　四一〇
生田流　四三三
十六夜日記　二四、二二五
石塔丸　三九八
伊賀越乘掛合羽　五五五、五九九
伊賀越道中雙六　四九五
伊勢大輔　七、一四六
伊勢音頭　五二一
伊勢音頭戀寢刃　五六八

伊勢派
伊勢物語
伊曾保物語
湖水節
椎中
一條天皇
一谷嫩軍記
一休
一九
一茶
一心二河白道
一寸法師
一中節
一烏
一蝶
一風
一鳳
いづみが城
和泉式部
和泉式部日記
和泉式部新撰集
和泉大夫
出雲
出雲國風土記
いと田
田舍源氏
稲葉裏紙
犬筑波集
岩井風呂
石見女武
いさき
産主
今川貞臣軍
今源氏六十帖
今宮心中
今樣謠
因果物語
因果六帖
院政
嵯峨山嵯女題訓
參會抄
入道
いろは歌

う

浮世
浮世組
浮世草紙
浮世物語
浮世風呂
浮世床
うちうちが花
歌の始
歌合
歌右衛門
歌祭文
歌澤
歌舞伎
歌の起源
氏物語
有馬子內親王
宇治拾遺物語
宇治十帖
宇治大納言物語
宇津保物語
宇津保物語考
卯月の潤色
卯月の紅葉
浦知島安方歌撰集

え

絵巻
絵巻
絵入
榎本
江戸
江戸
江戸
江戸
江戸
江の島土產

お

御伽草子
御伽草紙
御伽草子
御伽百物語
音羽草子
お夏清十郎
鬼貫
鬼武
伯母が沼
桜給山賦
お初徳兵衛
尾張酒家物
帶刀
お前と上樂
音阿彌
御曹司島渡
女方
女歌舞伎の禁
女殺油地獄
大木
大御所
大隈
醍醐天皇
大沢紗
大蔵銅
大原木
大平
王代物
近江雜物語
近江源氏先陣館
鶴鶴近文武二道
鶴賀
拜藤仁王參
岡持
奥樣扮
岡國歌舞伎
饂飩
御座附
岡通
お三人茂兵衛
お後伴兵衛
お染久松
大四書
大木雜像
大津繪
親仁方
鶴亭
折紙集の記
小野小町

か

海音
海道記
岡崎利生源體法合
かつらの姫
歌學
歌經標式
賀茂雜集
加賀集
加賀節
加賀見山旧鏡
加作
梶本の系圖
學館院
歌枕

角太夫（土佐掾を見よ）
鈴鹿記　[illegible]
神樂歌　[illegible]
成相　[illegible]
東洋　[illegible]
雅言集覽　[illegible]
蜻蛉日記　[illegible]
かぐやひめの姫君　[illegible]
鹿島紀行　[illegible]
可笑記　[illegible]
歌袋　[illegible]
歌仙堂（春水を見よ）
加賀千代　[illegible]
片歌　[illegible]
片假名　[illegible]
勘太夫（加賀掾を見よ）
形象物　[illegible]
敢詩物　[illegible]
敢詩三編　[illegible]
敢詩後文集　[illegible]
敢詩役　[illegible]
敢詩都　[illegible]
合作　[illegible]
合羽大佛業廷　[illegible]
河東節　[illegible]
假名　[illegible]
假字太夫　[illegible]
假名草紙　[illegible]
假名手本忠臣藏　[illegible]
金槐文庫　[illegible]
金村　[illegible]
狩明親王　[illegible]
狩盛　[illegible]
鎌倉七人化粧　[illegible]
鎌成　[illegible]
鎌倉流　[illegible]
河內流　[illegible]
河內國樣が火　[illegible]
河原崎座　[illegible]
歌舞伎　[illegible]
歌舞伎脚本　[illegible]
鎌倉五山　[illegible]
鎌倉九代記　[illegible]
鎌倉三代記　[illegible]
鎌田　[illegible]
神　[illegible]
神代文字　[illegible]
上野　[illegible]
漢學の源流　[illegible]
漢詩の始　[illegible]
漢詩文集　[illegible]
漢文の日記　[illegible]
鑑草　[illegible]
菅江　[illegible]
菅三品　[illegible]
菅公（道眞に同じ）
邯鄲諸國物語　[illegible]
勘三郎　[illegible]
堪忍記　[illegible]
關人木鑑抄　[illegible]
冠詞　[illegible]
勘助　[illegible]
菅鶴亭千　[illegible]
菅鶴　[illegible]
寒大町歌數　[illegible]
寒座（ゑびすかを見よ）
借物餅　[illegible]
漢詩集門弟錄　[illegible]
歌論　[illegible]

き

帝國　[illegible]
宮內　[illegible]
宮中御歌所　[illegible]
樹蔭　[illegible]
義經記　[illegible]
洪國　[illegible]
義山　[illegible]
其儀　[illegible]
其角　[illegible]
鬼貫（ナニツを見よ）
見武　[illegible]
見外　[illegible]
鬼一法眼三略卷　[illegible]
琴吟　[illegible]
菊五郎　[illegible]
菊之丞　[illegible]
義經記　[illegible]
義古文　[illegible]
義古文學　[illegible]
喜三二　[illegible]
喜三郎　[illegible]
喜連作式　[illegible]
喜多流　[illegible]
木曾願書　[illegible]
木曾街道　[illegible]
教訓的文學　[illegible]
教訓問答　[illegible]
教祖の本地　[illegible]
綺太夫　[illegible]
綺太夫節　[illegible]
北野天神緣起　[illegible]
北畠江座　[illegible]
吉左衛門　[illegible]
狐の草子　[illegible]
橘州　[illegible]
九流　[illegible]
井屋　[illegible]
紀內傳　[illegible]
紀後集　[illegible]
公任　[illegible]
近世說美少年錄　[illegible]
近代百物語　[illegible]
近代語士勸功記　[illegible]
銀杏（アンッを見よ）
金槐集　[illegible]
金々先生榮華夢　[illegible]
金平本　[illegible]
金平節　[illegible]
金葉集　[illegible]
金門五三桐　[illegible]
金木　[illegible]
金瓶山人（春水を見よ）
金魚　[illegible]
金魚　[illegible]
金玲　[illegible]
黃表紙　[illegible]
魚島平家　[illegible]
京傳　[illegible]
京傳家年譜圖　[illegible]
京童子　[illegible]
京童子樣道成寺（道成寺を見よ）
京都五山　[illegible]
京都文學　[illegible]
京士產名所井筒　[illegible]
狂言　[illegible]
狂句　[illegible]
狂歌　[illegible]
狂歌師　[illegible]
狂歌教方初心式　[illegible]
狂文　[illegible]
狂文學　[illegible]
狂訓亭（春水を見よ）
教訓亭紙　[illegible]
教訓讀本　[illegible]
牛一　[illegible]
曉雪　[illegible]
新六　[illegible]
去來　[illegible]
曲本　[illegible]
曲本作者　[illegible]
玉藻集　[illegible]
玉藻會　[illegible]
玉山　[illegible]
清公　[illegible]
清しげ　[illegible]
清輔　[illegible]
清次　[illegible]
清元節　[illegible]
切狂言　[illegible]
桐火鉢　[illegible]
空海　[illegible]
草雙紙　[illegible]
草紙洗小町物語　[illegible]
曲亭　[illegible]
軍鑑書　[illegible]
九段物　[illegible]
草の葉　[illegible]
宮內國　[illegible]
國眞　[illegible]
國の葉　[illegible]
國名國學三入和物語　[illegible]
熊野紀行　[illegible]
熊谷蓮屋の段　[illegible]
熊谷女護笠　[illegible]
組織　[illegible]
雲故　[illegible]
雲法師士見四行　[illegible]
雲隱の卷　100
雲崎出　[illegible]
雲雀木　[illegible]
雲主　[illegible]

怪談語國物語　三三
花革方　三四
笑酒千家物語　三六
冠子　四六、四七、四八
貫四　五〇、五二
傾風談　一六
勸學院　四六
認阿闍　三八
認非流　三八、三九

け　げ

經國集　四七
經濟錄　三五一
桂園　六一
桂園一枝　六三
桂園派　六三
傾城歌舞伎　三三
傾城貞操論　三四〇
傾城乳母櫻　六六
傾城淺間ヶ獄　五四
傾城佛の原　三四七
傾城團子　四三
傾城髮油　三三
傾城野雀　三三
傾城玉子酒　三四
傾城紫短氣　三四
傾城色三味線　三四
傾城傳授紙子　三四
傾城買虎の卷　三七
傾城買四十八手　三七
經籍所紀志　三九
經世　三八、三九、六〇一
經周（海語を見よ）
啓蒙文學　三七
戲作と口ぶり　六四
劇場　三四〇
外記（竹田）　四八二
外記（磯野）　四九八
外記座　四九八
外記節　四七、四八、三三
群書五十五箇所治卷　三三
遣唐使　一五、一四、一〇
顯昭　一三
袈裟　一三一、一三二、一三九
袈裟法師物見車　四三
源氏物語　六七一一、六六、六三一
源氏物語作意　一一一
源氏物語註釋書　一一六、一三八
源平盛衰記　一〇、一一〇、一一〇六
源大夫　四〇〇、四〇一、四〇四
源內　四九八
源氏冶來節　四三
源氏大草紙　四九
元服管我　三一八、三三六
元祿時代　三四八
元祿管我物語　三〇三
元祿　三四一
元祿　三七四
月夫同放言　七一九
月米若樣　七〇四

こ　ご

戀女房染分手綱　四八二
戀娘昔八丈　五〇四
戀の歌　六
好色一代男　三七六
好色二代男　三七七、三八二
好色三代男　三七九
好色一代女　三七九、三八〇
好色五人女　三七七、三七八
好逑　六三
こうろぎ草子　三〇八
江湖會　六八
弘仁美術　三三
弘文院　四六
弘文天皇　一三
弘法大師（空海を見よ）
弘文館　三三六
弘徽殿鯉幟　四〇四
向阿　二一八、二一一
孝行物語　三三八
孝若舞　二九八、二一八
孝四郎　三四六
高名太平記　三八三
高僧傳行脚日記　六三八
黃鶴樓　三〇〇
黃漢　六〇八
講談　三二四
講談師　六三一
合卷物　五四六、六三、六四、七一九
貳來圖（ロミノクニを見よ）
語圖　三七

古事記　三〇、三一、六六
古事記傳　九、一一、二〇三
古訓古事記　三
古語拾遺　三、一一
古風土記　三
古今和歌集　五七、六八
古今集註釋書　六八
古今集作者　六一
古今集註釋內容　六四一六六
古今集正義　六一一
古今和歌集序　七一
古今傳授　三六七
古今著聞集　三一六
古來風體抄　一七四
古史徵開題記　五
古淨瑠璃　三六四、四〇三
古淨瑠璃作者　四〇四
古今節　三一〇
國學　四六
國學　三六九、三七〇
國學者　六〇八
國性爺合戰　四〇七、四一三、四二四、六八
谷蟆　六七七、六七八
湖月抄　三六七
湖十　三七一
後撰時代集　六六八
子敬盛　三〇八、三〇九
子役　四四三
五大明王　三一
五七調　六三
五條三位　一七四
五山　一七一、一三一
五山文學　三九一、三一一
五說教　三九八
五論語　三九九
五十年忌歌合卷　四〇九
五瓶　五四四
五大力恋緣　五四五
御傘　三六一
御所樣細川老話　四三一
御存知商賣物　六三〇
御講勸進帳　三七一
後相公　六八
後選和歌集　六九
後選集註釋書　七〇
後拾遺和歌集　一六六
後三條天皇　一四七、一四八
後鳥羽院　一六、一三八、一三一
後三年奧州記　四三〇
後撰太平記　四三七
後太平記白石藏　四〇、四一一
醍醐組　三一七、三一八
醍醐　三一九
治承物語　六五四
治承物語和合人　六五六
學問　三三一
木下藤吉郎合戰　六五四
木曾きつね　三〇八
小わらんぼ　三〇八
小尼　三三一
小いなか平兵衛　六六八
小三金五郎　三六八
小說管我　三一八、三三六
小式部　一三
小町　三三、三六、三七
小出雲　四八一、四八二
小平太（淨瑠璃を見よ）
小金節　三三〇
小說　一三一、一三八、一三七、一三一、一三七
小太（酒吞太を見よ）
今參流　三九八
今昔物語　一三〇—一三一
今撰集　一七一
今時の小說　三〇八
金剛流　三九八
金比羅參詣中　六六一
こんなこと　三六四
琴歌譜本　六六六
琴柱之助　三三四
琴山樂　四三四
雜時　六八

さ　ざ

西行　一七一、一七六、三六六
西鶴　三四四、三七一—三八三
災文（歌祭文を見よ）
佐助櫻　一七八、一七九
細見　三八四、三八四
茶番　三七〇
茶道流儀書　三七一
茶道　三〇
最明寺殿百人上臈　四三一、四四六

方磯　三六
蜉蝣天皇　四七
蜉蝣天皇廿五年　四三
相模入道千四大　四三
堺僧侶　三七
坂上郎女　三六、三六
榊葉日記　七四
酒の歌　七
櫻狩　三三
櫻姫全傳講草紙　七四
櫻中將王　六八
狹衣物語　一三一、一三七、一四〇
左近　三三
指面草　三四
定家（テイカを見よ）
薩摩歌　四九、三三
薩摩歌　四八
さゝれ石　三〇八
さゝれ　三〇八
實方　一四
實定（ツネテイを見よ）
實朝　一四、一三
里見八犬傳　七〇、七七
山家集　一六
山三郎　三四
三代實錄　四六、六七
三句切　三
三十六人選　一四〇
三部僧名抄　一二、一三
三鏡　三七
三德抄　三七
三十石●始　三四
三七全傳南柯夢　七四、一三
三國妖婦傳　七四
三帖和讃我曾我　六四八
三教論　三六
三傑作　四〇八
三木三島　一六七
三味線　三四、三六、三七、三七、三一、三四一
三陀羅法師　六八、六四一
三八　三三
三笑　三〇
三和　六四、六〇、六七
三馬　六四一、六四、六七、六四、六六、六六一
澤住檢校　三八、四〇〇
杉風　三七、三三
更級日記　一三、一三一、一三六
皿々郎談　七〇
散樂　一三
散木奇歌集　一六
散木集註　一七
殺樂　一六
殺源氏寄手　一〇八、一〇
殺若大名　一三四、一三七
殺若座　一三一、一三六

し　じ

詩合　六八
沙汰　一三
慈覺大師　一三
慈鎭　一〇一、一一八、一一九、一一六
詞花和歌集　一七
式部卿　四七
信貴山緣起　一一
重俊（清兵衛を見よ）
樂々花語　六八
樂千話　六七
支考　一三、一三
自笑　一六、一三一
自然也說話　七〇
兒雷也淨瑠璃　一三九
士清　六八
志田　一三八
時代物　一六八
時代淨瑠璃　一〇八、一三一
時代世話女節用　一三八
時代錦室町錦繪　一三八
七五調　一三
七七三節　一三一、一三三
七五三助　一六七
七偈人　六六
漆女七論　一三九
四國落　一六八
四條大納言　一六八
實眞　一三一
實定　一八、一一六、一一九
實錄　六七、六七
十訓抄　一一六
十哲　一三一、一三七
舜　一三九
俊　一三八
信田藤　一六八
淨生文　一三一
淨貴今既　六七
尺五　一三一
淨瑠璃　一一八、一一〇、一一一
酒落本　六七〇
酒落本禁止　六七八

じゅ　じゅ

周竹　一三七
出世淨瑠璃　一〇六、一〇七、一一一
重助　一七〇
宗教的文學　一一三
崇德　一三三
秋中抄　一一一
圭馬判官盛久　一〇一
酒顚貧乎　一〇八
祝言物　一六七
祝儀　一六〇
拾遺和歌集　一一三
拾遺集撰者　一一七
拾遺抄　一一七
拾遺抄註　一一七
拾遺愚草　一一七

系圖　一七
仕懸文庫　六八
支那思想　一一、一一一
芝居評判記　一六一、一九一、一九一
芝居節　一一〇
師範家　一六八、一〇九、一六一
四季繪　一九
四佛四菩薩　一一
守武　一六一、一六六
島原　一一〇
島源氏開花　一三一
下掛　一九
下樓ほそり　一六八
しみのすがた物語　一〇一
白拍子　一六、一一一
白柴　一〇〇
白雄　一六一、一六一
白雄歌　一九

しん　じん

眞言宗　一〇
神話　一
神武天皇口授　一九、一〇〇
神皇正統記　一一一、一一九
神樂物　一六七
心中物　一〇七
心中宵井筒　一〇九、一一一
心中二枚看板　一〇九、一一一
心中商年寄　一〇九
心中竹皮巾　一一〇
心中刄は米の初日　一一〇
心中二つ腹帶　一一一
心中早淵寄　一六一
新十二月往來　一一一、一一六
新選髓腦　一一〇
新選問答集　一一一、一六一
新三十六人歌仙　一一一
新猿樂記　一一六
新選和歌集　一六、一一一
新古今和歌集　一一六
新勅撰集　一一一
新後撰集　一一一
新千載集　一一一
新後拾遺集　一一一
新拾遺集　一一一
新續古今集　一一一
新葉集　一一九
新續後撰集　一一一
新曲　一一八
新續後撰集　一一一
新語園　一一八
新永代蔵　一一一
新四季物語　一一〇
新一心五流魂　一一一
新源氏物語　一一八
新續歌祭文　一一九
新吉原の歌　一一一
新內節　一一一、一一〇
新九郎　一一一
新四郎　一一一
新五郎　一一一、一一七
新七　一一九
新旬　一一〇
仁樂　一一〇、一一一

しゃ　じゃ

釋迦八傳文庫　一一九
石橋　一一九
沙石集　一一七

拾遺御伽婢子　三四三
十二段草子　三〇八、三三〇、三三六、三五四、三九七、
十二段長生島臺　四三三
十二月往來　三三五
十番の物爭　三〇八
十番切　三一八
十藏　五四五
十八大通　六四八、六五〇
春臺　三五〇、三五一
春曙抄　三五七
春水　六八〇
春色梅曆　六八〇
俊蔭　一七〇
俊成　一七四、一七五
俊成女　三一八、三三〇
俊寛島物語　七〇五
淳和院　四六
順德上皇　三一八、三三九
順　六六・七〇、七六
順庵　五四九

しよ　しよ

聖德太子　一〇、二〇
生佛　一〇三
尚白　三七三
逍遙軒　四三一
正風　三六六、三六七
正本　五六八、五九九
正本製　七二八
正徹　三一一
正三（鈴木）　三一八、三三九、三九七
正三（亞木）　五五三
正吉　五五五
昌三　三三七
昌平黌　三三六
娼妓絹篩　六七八
小說の起原　七六
奬學院　四六
將軍記　六九二
消息文　二三三、二三四
松壽軒（西鶴を見よ）
松意　三六四、三六五
松雲　三三二
松洛　四六二、四八二
諸國百物語　三四二
諸道聽耳世間猿　六九九
職人歌合　六五五
蜀山人　六〇九
蜀山百首　六〇九
續日本紀　二二四、四九
續日本後紀　四九
式子內親王　三一八、三三〇
淨瑠璃の起原　三九四
淨瑠璃物語　三九四
淨瑠璃種類　四九五
淨土宗　一九一、一九三、二〇三、二二八
淨土思想　一九三、二〇一
淨雲　四〇〇、四〇三
淨心　六九二
上太郎　五〇四、五〇五
丈草　三七一、三七三
如皐　五一三
常山紀聞　三五九

すず

隅田川　二六八、五三九
隅田川花御所染　六四二
隅田春妓女容性　五四四
[illegible]　六七〇
末廣十二段　四五五
菅原傳授手習鑑　四七〇
[illegible]　六二三
[illegible]　六〇三
[illegible]　七〇、一四六
崇德上皇　三一三
須磨都源平躑躅　二九八、四四三
駿臺雜話　三五一
[illegible]資料　四〇八

せ　ぜ

政談　三五一
[illegible]會我　五五〇
西洋紀聞　三五一
清三郎　五〇〇
清少納言　一五六
清和源氏十五段　四四〇
[illegible]　四〇一
關取千兩幟　四四〇
說話物語　二六八
說經　三九七、三九八
[illegible]　二六二
[illegible]　三五二、三五三

攝津夫婦池　四三四
攝津國長柄人柱　四六〇
世話物　二八八、五九九
世話淨瑠璃　四〇七・四〇九
世界　五九八
世間母親形氣　五九九
世間息子形氣　五八五
世間娘形氣　五八五
世間妾形氣　六九九
世間胸算用　五八〇
世阿彌　二七八
千載集　一七四
千柳（宗輔を見よ）
千四　四五二
千前軒（出雲を見よ）
千紫萬紅　六九九
前太平記古跡鑑　四九九
剪枝畸人（秋成を見よ）
旋頭歌　四二、四三
川柳　六五三
全交　六四八、六四九
善光寺道中　六六一
禪宗　一九一
戰記文學　一九〇、一九四
蟬丸　四三三
選集抄　六九九
宣命　二四、二六六、五六六
宣命書　二四
先代萩　五九九
仙果　七二八、七二九

そ　ぞ

棕櫚種智院　四六
宗因　三六六、三六五
宗鑑　三六五、三六一
宗祇　二六四、二六七
宗長日記　三六四
宗輔　四五九、四六〇、五〇三
宗十郎　五四六
宗元盃　二七一
巢林子　四〇六
蒼虬　六三五
曾丹　一四一
曾呂利狂歌話　五四四
曾我物語　三三六
曾我會稽山　四〇七、四三三
曾我狂言　五二三、五二四、五三五、五五五
曾根崎心中　四〇七、四〇八、四五一
曾眞　五〇三、六〇六
束帶鑑　四三三
足薪翁（種彥を見よ）
足薪翁記　七二八
[illegible]八節　五二一
蘇我氏の亂　三
楚滿人　六〇五、六〇四
徂徠　五一〇、五三一
續萬葉集　一一七
續千載集　一三四
續拾遺集　一三三
續古今集　一三三
續後選集　一三三
續詞花集　一二二
續後拾遺集　一二二

ただ

大化改新　一五
大學　四六
大寶令　一九、四六
大貳三位　九八
大內裏大友眞鳥　五五六
大塔の宮曦鎧　一三四
大經師昔曆　四〇三
大日本史　三三三
大塔宮曦鎧　四四〇、四四一
大職冠　三〇八、三〇六
大師めぐり　六九一
太郎兵衞　四〇一
太平記　三三一
太平記評判　四五三
太平記忠臣講釋　四五三
太閤記　六九一
太閤記大全　六九二
太夫藏人　四五五
大原　六一七、六二〇
高光日記　一七六
高師[illegible]　三一八、三三七
高尾懺悔　三三〇
高天原　一四
[illegible]の上　三四一
玉川座　一五〇
玉の小櫛　六五〇
玉の木草紙　六九〇

玉虫の皇子　三〇八
玉緒子　三四二
國十郎　四〇一、四四二、四四五
國綱　三四六
國水　三六三
國語哲我　四〇三
國淨瑠璃　四〇〇
櫛笥兒軍記　四三二
談林　三三四、三六八、三七四
淡々　三三四、三三五
丹後掾　四〇〇
丹後守　三三七
丹波掾　四〇〇、四〇一
丹波與作　四〇六、四〇二
丹前醜男　三六三
丹前節　三三〇
忠秋　三二二
忠友　三二二
忠臣　四三八、四三八
忠孝　三三六、三六一
忠見　三〇、三一
忠度　一三三
竹本座　四〇六、四〇五
竹本人形　四〇五
竹内式部　四〇三
竹取物語　三六八
竹原家　三三二
竹中　三三六
立役　三四〇
立島清子　三〇八
種蒔　三三〇
種貞　三三八、三三九
多賀の女　一三三、一三四
玉　四三、四三、四三
座國　一三〇
台密　三一、三三
多武峯少將物語　三六
旅人　三三、三四
湯野板校　三六八
多波瀧亭　三三一
多田錦　三三三
辰巳嬉言　三六九
辰之助　四〇六、四〇五
蓼顆　三三、三六八、三六九

ち　ち

茶人流　三三三
長明　三二、三三、三六、三四〇
銚貫　三二九
鳥辰　三三六
勅撰集の始　三三
貞永式目　三三、三三四
勝國　三〇二
勝敗月見月　三〇三、三一三
著作堂（馬琴を見よ）
近藤行者　三六八
重三郎　三〇〇、三〇三、三〇六、三〇四
重賀　三六一、三六四
丈國　三四六
治部左衛門　四〇〇
治助　三〇〇
治兵衛　三四二、三六八
地獄一面腰子淨瑠璃　三四二

つ　つ

塚原　三四三
塚鶴　三〇四
塚田　（田舍を見よ）
士佐日記　三一、三四、三六、三七
士佐物　二二
士佐掾　二一、二四〇、二四一
士手節　四〇〇
徒然　一四二、一三六
徒歩（ジョンヤを見よ）
所作祭　一〇
常世國　一四
常陸國名　三一八
常陸の國　三〇八
常陸坊海道　三〇〇、三一一、三一四、三一〇
時文　三六、三〇
都々逸　三一六、三一〇
筒井筒　四〇四、三一二
堤文　三一八
堤國　三一三
堤文　三一〇
堤清　三〇八
伴大納言物語　二二四
知紀　三一二

親房　二四八
千蔭　三〇一、三〇四
千引　三〇八
千年　三三
智證大師　三一
智慧内子　三六八
血死期の遊行　三三
筑後掾（義太夫を見よ）
樗貞　三一、三三
時代物　三八、三六
忠臣蔵　四三、三六
忠臣いろは軍談　四三
忠臣いろはの夜討　四三
忠臣一がれの短尺　四三
忠臣講釋　四三
忠臣いろは實記　四六
忠義水滸傳　三四
貞伯　三〇六
貞左衛門　三三
貞秋餘事　一四三
貞顯丸　三三一
貞蔭　三三
貞三郎　三六

て　て

定家　一三六、一三七、一三〇
定家卿物語　一三
貞盛　三六一、三六三
貞室　三六一、三六三
貞門　三六一
貞柳　四三三、四三四
手品節　四二
治郎　三四
點取　三三、三三六
天平時代　一九
天台宗　三〇、三一
天台六十帖　一一一
天海　三三
天暦時代　六
天明の俳諧　三一、三六
天竺徳人（高内鬼外を見よ）
天智天皇　四一一
天誅　四〇
天の鳴島　四一〇
天道浮世出題　三三
天鄙令家稽御供　三六八
天下一面鏡の裏鉄　三四〇
手習草　四三
寺小屋　四三八

と　と

藤原（カムキヤを見よ）
藤分　三三
田樂　三一、三一、三六
藤九郎　三四、三四
藤内　三〇、三一
藤效大師　三〇、三一
東海　三一、三四
東關　三三
東國紀行　一一四
東●　三三〇、三三一
東作　三六、三四〇
東里山人　三九
藤樹　三三、三四
藤十郎　四〇、三四
藤原小原別宮　四〇
藤井文學樹　三三九
藤井手藝談　三三
讀史餘論　三三一
德川文學四時期　三三
德和歌後拾遺集　三六八
德和歌後拾遺集　三六八

友則　五七、七一
朝綱　六八
豐竹座　四三五、四五三
豐臣記　六九一
豐臣實錄　六九二
鳥組　五一七
童謠　七
童觀抄　三二七
道敎　五三
道春　三三五、三三六
道化方　五四三
道化物語序　六四五
道成寺現在蹲　四六〇
道念節　五二〇
とりかへばや　一五〇
卜杏　五九九
トツチリトン　五二〇

な

長歌　四三、四四、六三、六四
長能　一三六、一四五
長流　三三八
長町女腹切　四〇七、四〇九
長唄　五三二
長門守　五五三
仲雄王　四七、四八
仲二　五〇四
中村座　五三三
中務内侍日記　三二四
投節　五一九
梨壺五人　六九
梨本集　三九八
那須與一　三一八
那須與一西海硯　四六〇
夏祭浪花鑑　四八一
浪花戰記大全　六九二
直好　六一三
七曾我　三三六
七草々子　三〇八
魚彦　六〇二
鳴門中將物語　二一三
鳴神　五四四、五五三
成章　六〇八
なよし　五一八
奈良朝　一九
奈良朝前期　一七
奈良朝後期　三三
奈良傳授　二三七
業平　五五、五四、八〇
南北朝　二二三、二三九
南北朝合一　二三〇
南京操　四〇四
南留別志　三三一
南畝　三〇五
南郭　三五〇
南谿　六三九
南北　五八二
南總里見八犬傳（里見八犬傳を見よ）
南柯夢（三七全傳を見よ）
楠無益委記　六四八
男色大鑑　三八〇

に

日本書紀　二一、二三
日本後紀　四九
日蓮上人　二八、二九
日本永代藏　五八〇
日本第一和布苅神事　五五四
二萬翁（西鶴を見よ）
二一　四八
二三次　五九七
二上り新内　五四〇
二十四孝　三〇八
二十一代集　二三五、二三五
二人比丘尼　五五九、五四〇
二條家傳　三二七
入唐八家　五一
人形遣　三九九、四九六
人情本　五九九
新學異見　六一三
新島守　三二七
錦木　五一六
錦の裏　六六八
如儡子　三八八
西山物語　六九八
偐田舍源氏　七三〇

ぬ

[illegible]り　五三〇

ね

根本　五二三
根なし草　五六九、六四三、六八三

猫の草子　三〇八
念佛草紙　三三八
寢の門松　四一〇

の

能因法師　一四五、一四六
能宣法師集　二二三
能樂　一七六、六八二
能の大成　二六八
能舞臺　二九九
祝詞　九、二六
のせざる草子　四〇八
信長記　六九一
信勝（道春を見よ）
信友　五、六〇五
信名　六〇八
宣長　九、二一、六〇二

は

ば

俳諧　二六五、五六一
俳諧の盛衰　三七五、六二四
俳諧八重垣　三八三
俳文　六二六
俳文學　六二五
端手組　五一八
端手片撥　五一八
端淨瑠璃　四〇〇
端唄　五二二、五三六
巴人　六一八
巴靜　三七五
芭蕉　三六六、三六八、六二七、六三七
白氏文集　四九
白石　三四九、三五〇
白龍子　六九二
春海　六〇二、六〇五、七〇二
春庭　六〇三
春町　六四七、六四八
春雨　一五二九
春雨物語　七〇〇
八代集抄　三五七
八文字屋本　三八四、三九三
八犬傳（里見八犬傳を見よ）
八犬傳犬の雙紙　七二九
八景文　三九八
半四郎　五四六、五八一、五八二
半二　四五二、四八一、四八二
半太夫節　四〇〇、四九七
半道　五四三
馬琴　七〇三
萬象　五〇四
萬象亭　六七七
萬民德用　三三八
花鳥かくれん坊　六四八
花魁袋八房　五六八
花笠踊　五四三
花の下　二六四
花の本　三六一
花暦八笑人　六七五
播磨稼　四〇五、四〇六
播州皿屋敷　四五三
播輪譜　三五〇、三五四
演成式　一三九
松松中納言　一三三、一三一、一三四
濱出　三一九
濱出草子　三〇八
濱臣　六〇八
梅室　六二五
博多小女郎浪枕　四一〇
化物草子　三〇八
鏡伊勢物語　三三五、三九八
鉢かつぎ　三〇八、三九七
英草紙　六九八
舟下長物語　六三九
曉花集　三三八
給のさうし　三〇八
譯物　三五四
雛子　五五〇
早舟　三一八、三一九

ひ

ひ

東山時代　二六〇、二七四
檜垣の姫　七二
光源氏　九九、一〇〇、三七六
秘曲　二六六
彦三郎　五四六
久老　六〇二
膝栗毛　六五五、六六六
膝栗毛續篇　六六一
毘沙門の本地　三〇八
鼻山人　六七九
肥前稼　四九七、四九八
肥前節　四九七

蕃村　六一、六八、六九
佛教傳來　一四
佛教信仰　一一、九四、一四八、一八六、一八〇
佛力物　一六七
佛種　一四〇
豊後節　四〇四、四一一
分里閭行脚　九六

ふ　へ　ほ

平安遺跡（遺文を見よ）　四四
平安朝の四期　四一、四二
平安文學衰頽原因　一八七
平治物語　一九六、一九七
平家物語　一九四、二〇〇—
平家物語作者　二〇一
平家物語作年代　二〇四
平家物語註釋書　二〇四
平家評書　二〇四
平曲　三八、三九
平家女護島　四三
平民的文學　四四
平安堂　四〇
平兵衛　四四

文耕堂　四二、四三、四三
文三郎（冠子を見よ）
文章　九一、九二
笛節　六五
筐の卷　三八
不破　四四、五五
不詳組　三七
不移山人（門左衛門を見よ）
不角　四四
父子相剋　三二
伏見常盤　三八
鍵亭紙　一四
非藪集　六六
非藪拾遺　三七
富士松節　三二
福富草子　三一、三〇六
復古派　六九、六三
振姫　三三
史　一三
薔薇分　三六
雙生四田川　四三
古道　六〇一
武道一覽　三六

風土記　三六、三七
風雅集　二四二
風來山人　四八、四三一
風來六部集　四九
風流志道軒傳　四九
風流誹平家　三三
風流曲三味線　三六、三六
風紀振興　六九、六六〇
文時　六八
文雅秀麗集　四一、五一
文安田樂記　一九
文正草子　三〇八、三一一、三九
文教興隆　三四
文學的交信　二四
文彌節　四〇、四三
文陸抄　三七
文武訓　四六
文武二道百石通　六八
文山だち　三〇一
文流　三六
文耕　六三

蕉村　六一、六八、六九
佛教傳來　一四
佛教信仰　一一、九四、一四八、一八六、一八〇
佛力物　一六七
佛種　一四〇
豊後節　四〇四、四一一
分里閭行脚　九六

ま　み　む　め　も

平安遺跡（遺文を見よ）　四四
平安朝の四期　四一、四二
平安文學衰頽原因　一八七
平治物語　一九六、一九七
平家物語　一九四、二〇〇—
平家物語作者　二〇一
平家物語作年代　二〇四
平家物語註釋書　二〇四
平家評書　二〇四
平曲　三八、三九
平家女護島　四三
平民的文學　四四
平安堂　四〇
平兵衛　四四

雅楽　一四、一六
雅樂　一一、一六
雅歌　一四
雅語　一四
雅行文　四一
風俗　一六、一七
夫行　一四、一一
夫國　一四
夫富　四四、四〇
明組　四六
明歌　四一
明會集（遺文を見よ）
明治　四一
毛川集　一六
木曾　一一
木曾道　四四、四五
木曾義仲　四四
木曾義仲　二〇一—二〇
牧野　一四〇
牧野　一四〇
牧野　一四〇

常陸帶　三九
飛鳥馬組　三七
飛鳥馬匠物語　三〇一
羽語　三一、三三
人麿　一九、一二
非人佛詞　四〇、四四
百首異見　六三
百日物我　四三
百出語　六三〇
日蓮川入相花王　四六
比叡島部山　三四
比良屋小松　五八
平假名　六
年假名遊戯記　四七
平假名祭の早　六三
平非藪八吉原街　三四
平田流神道　六三
弘訓　六八
弘政　六〇
度夫　三四
兵庫（國十郎を見よ）
風水子（了意を見よ）

ら　り　る　れ　ろ

雷電　六一
雷電　四六、四四
雷川　四〇
雷川夜の鶴　四〇
夫婦瑞　一四〇、一四一
夫子組　四一
夫子事爭　四六
夫朝文粹　四六、四七
夫朝文藻　四六
夫朝治風俗　四〇
夫朝廿不事　三九、三六
夫朝班幸山　四〇
夫朝中四事　四六
夫朝木佛像　六六
夫朝醉宴歌　四〇
夫町尾（三馬を見よ）
紫天國　四〇、四〇
凡夫　四四

わ

蕉の國　三九
蕉風俳諧書　四六
前句詩　六四

連歌　四四、四〇
連歌　六〇、六一
連語　四〇
蓮の花　六六
蓮子　一一六、一一七
蓮子註釋書　一一一
蓮蜂記　一一六
蓮行文　一一六
蓮歌　一六、一七
夫行　一六、一一一
夫國　一四
夫富　四四、四〇
明組　四六
明歌　四一
明會集（遺文を見よ）
明治　四一
毛川集　一六
木曾　一一
木曾道　四四、四五
木曾義仲　四四
木曾義仲　二〇一—二〇
牧野　一四〇
牧野　一四〇
牧野　一四〇

深山草 七〇三
宮島發詣 六八一
未來記 三一八

む

虫麿 五五
娘道成寺 五三六
武藏鐙 三四四
息子部屋 六七七
夢想兵衛胡蝶物語 七〇五
無住 二一七
宗尊親王 二三九、二八〇
胸突 三〇一
無々道人 六七七
紫式部 九八
紫式部日記 一一二、一一三
村山座 五四〇
室町時代 二四二、二四三
室町文學の特色 二四四

め

冥途の飛脚 四一〇、四五五
飯盛 六三八、六四〇
めりやす 五三二

も

盲按杖 三三八
犬の草子 三〇八
望之 六〇八
茂睡 三二七
茂兵衛 五〇四
元輔 六九—七一
元清 二七八
木網 六三八、六四〇
基俊 一七〇、一七一
文字太夫 五一三
文選 四九
文德實錄 四九
文覺 三一八
物語の始 七六、七七
物語の盛行 九七、九八、二三四
物臭太郎 三〇八
物眞似狂言 五三五、五三六
問答の歌 七
門左衛門 四〇三—四三五、四四七
紅葉狩劍本地 四一三
守部 一八〇、六〇八
守武 二三五、二六六
森田座 五四二

や

安萬侶 一九、二二、二五
安世 四七
大和物語 八三、一一三
大和廿四孝 三三八
大和綸 二七一、二七三
やまと孝經 三三七
やまと小學 三三七
やゝ子踊 五三四
八幡 五一八
八橋檢校 五三一
八島 三一八、三九七
八百屋お七 三九八、四五三、五〇七
也有 六一六、六三〇
矢根 五六九
家持 一九、三三七
山田流 五三三
山登 五三三
山勢 五三四
山村座 五四〇、五四二、五四五
山の段 四六一
野坡 三六九、三七一、三七三
野白內證鑑 三八四
野郎歌舞伎 五四一
役者口三味線 三九四
日本武尊 七、二〇
夜半亭（蕪村を見よ）
夜久毛多都の夜 六
彌五四郎 五五五
彌五右衛門 五四一、五四二
揚自來也談 五六八
鎗權三重帷子 四一〇
宿無團七時雨傘 五五四
柳川檢校 五一八

ゆ

夕霧阿波鳴門 四一〇
夕霧餘波の正月 四〇六
幽齋 二六七、五五七
遊子方言 六七七
行長 二〇三
雪女五枚羽子板 四〇七、四三五

由豆流 六〇八
由輔 五七〇
由平 三六四、三六五
油煙齋（貞柳を見よ）
弓組 三九九
弓勢智勇湊 四九九
弓張月 六九九
百合若大臣 三一八
百合若大臣野守鏡 四三三
夢合 三一九
[illegible]軒小錄 三五一

よ

謠曲 二七四、二七七—二九〇
謠曲の文章 二四七、二五九、二八四
謠曲の組織 二六八
謠曲の作者 二八三
用明天皇職人鑑 四三三
用捨箱 七二八
容揚黛 五〇四、五〇五
世繼 一五九
世繼曾我 四〇三
世之介 三七六
義經記 三二五
義經千本櫻 四三七、五九八
義經風流鑑 三九三
義俊（南嶺を見よ）
良香 四七、四八
良經 二二八—二三一
良基 二六三
吉野物語 六九八
吉野靜一目千本 五〇七
吉原揚枝 六七七
能宣 六九—七一、七八
好忠 一四一、一六八
ヨシコノ 五五〇
餘七 六五五
四方山人 六七七
四方のあか 六四一
四方の留粕 六四一
四谷怪談 五八一、五三六
夜討曾我 三一八、三三六
夜の鶴 二三二
夜半の寢覺 一五〇
賴政 一七七
賴朝七騎落 一四〇
讀本 六九〇、六九八
讀本淨瑠璃 五二一
黃泉圖 四
横笛草子 三〇八
鎧襲 三九九
淀鯉出世瀧德 四〇三

ら

雷太郎强惡物語 六五四
羅山 三三五—三三七、三四九
嵐雪 三七一—三七三
蘭山 七〇三
蘭更 六一七、六二三

り

鯉丈 六六一、六七六
立圃 三六一、三六三、三八〇
六國史 二八、四九
吏登 三七三
龍宮 五
龍女淵 五四七
琉球組 五一七、五一八
隆達節 二六九、五一七、五一九
了阿 六〇八
了俊 二五一、二六四
了意 三三七、三四二、六九二
蓼太 六一七、六二三
蓼和 三三五
凉莵 三七三
凌雲集 四七、五七
林西坊 三九七

れ

靈魂崇拜 四
歷史的假名遣 三五九
歷朝詔詞解 二四、六〇三
連歌 二四〇—二六三
連歌新式 二六四

ろ

朗詠 一八四、一八五
弄齋節 五一九
六歌仙 五五、一五九
六段物 四〇〇
六字南無右衛門 三九九
六樹園 六〇九

六阿彌陀　六六一
蘆庵　六一〇
蘆元　三七五
谷文　七二九
露沾　三六四
蘆水　三八五
蘆鞍橋　三三八

わ

和歌所　三二六
和歌の末路　三三七
和歌初學抄　一七二
和歌九品　一四〇
和歌肝要　一七四
和歌四天王　二九九
和歌の浦　四二九
和歌明眸集　六八、一八五
和漢混交文　二三三、二三九、三三一
和字正濫抄　三二九
和泉太郎（秋成を見よ）
和田酒盛　三一八、三二〇
和事　五四三、五四四
和が物と　四二九

嫩榕相生源氏　四九九
綿津見宮　無
王仁　二三
若太夫　五四三、五四五
若衆歌舞伎　三六八、三七〇
若衆方　五四三
若女方　五四三
わが草　三〇八

明治四拾貳年拾貳月九日印刷
明治四拾貳年拾貳月十五日發行

（大日本文學史）
（定價貳圓五拾錢）

著作者　鈴木暢幸
發行者　東京市本郷區湯島新花町九拾三番地　日比順造
發行者　東京市神田區表神保町拾番地　吉田尊一
印刷者　東京市京橋區南小田原町二丁目九番地　中野鐵太郎

著作權所有

發行所　東京市神田區表神保町　振替貯金一八八二〇番　日吉九書房
賣捌所　全國各地書林

東洋印刷株式會社印行

木村鷹太郎先生著（最新刊）

東西古今 娘子軍

菊判全壹冊裏布製金箔押
極彩色石版刷コロタイプ色
刷寫眞版等廿一枚挿入美本
總紙數三百五十餘頁定價金
壹圓五十錢送料金拾貳錢

太古に在つては天照大御神、アテーナ女神、神功皇后、アマゾン女軍等より中世近世現代に至るまでの東西古今の女神女帝女傑美人女軍隊の勇壯美麗なる史傳を叙じ其史實に據つて女子兵役の能力を證明し進みて最高德義たる女子護國の義務を說き又以て日本國家の雄圖を發揮するは本書なり、故に本書は一面女子兵役論たり他面東西古今のアマゾン史傳にして眞に女子問題の最高終極所に達せるもの、史傳の叙述は美麗なる趣味に富み、而も凜然たる威儀を有し、女子にも男子にも美麗勇壯なる讀物たると同時に又た經綸的大哲論なり。而して勇壯なる精神を說くと雖とも輕跳浮薄は著者の大に排斥する所。附錄として『愛國尙武論』の雄篇を添ふ是亦武德の敎科軍人の精神讀本と爲す可し。本文總振假名附而も高尙美麗なる近時稀有の書物又以て優に机上及應接室の裝飾と爲し社交上談話の材料となり、進物用に適す請ふ陸續御注文あらんことを。

上田秋成翁作　宮崎三昧先生校訂

奇籍大觀第一編

つづらふみ

四六判全壹冊洋布製金字入
美本紙數三百六拾餘頁
定價金七拾錢　送料八錢

太田南畝生涯二大人物を江湖に紹介す曰く上田秋成、曰く横井也有、と秋成は性狷介にして飄逸洒落なり、又博聞强識にして過眼みな誦を成す、是を以て一書をも著へざりしと云ふ、和歌文章最も卓絶、興到れば一日數百篇。言口より出づるもの皆文をなす、著書數種、就中本書は翁の全集にして、亦翁の本傳に充つべきものなれば有名なる翁を知らんとせば本書を窺はざる可からず

本書は傳本世に稀なれば、徒に其名を傳へて未だ内容を知る人少なからん、和歌は萬葉に私淑し時調に殊なるの妙あり、數種の隨筆、紀行文は時に飄逸の口調ありて而も正體の雅文なり、歌を學び文を作る人は本書を參考として備へざれば耻なり。

片島深淵子編纂　宮崎三昧先生校訂（最新刊）

奇籍大觀第二編

赤城義臣傳

四六判全壹冊洋布製金字入
美本紙數四百七拾餘頁
定價金八拾錢　送料八錢
寫眞版口繪數葉挿入

現今ありふれた赤穗義士の書は作を實の如くに傳へて多くは臆說を贅するに止まれども、本書は全く其選を異にし頗る紀實詳覈を極め義士神崎則休、前原宗房、木村貞行の三人が自から國難の顚末同志流離の狀況を叙し、賜死の後野村某補筆し編者又更に奔走して事實遺蹟を究め之に增補し遂に義士十七回忌に大成したるものなり、已にして此書は幕府の忌憚に觸れ當時其發行禁止を命令されたる事實に徵するも最も典據精確なるを證するものにして、優に日本武士道の權化なる四十七士の眞面目が活躍すべき絶世の珍書なり、史家は勿論一般の諸士必ず一本を備ふるの要あらん。

◉何人も容易に解し得る四書の註釋書……

論語經典餘師 附 大學 中庸

溪 世尊著述 宮崎璋藏校訂

四六判洋本全壹冊 紙數五百五拾餘頁 定價六拾五錢 送料八錢

論語は人の道を敎ゆる書なれば、字宙間の人類たるもの心ず服膺せざる可からず、故に業務の何たるを論せず社會のあらゆる階級を通じ本書を購讀して速に聖人の地位に密接せよ。

孟子經典餘師

溪 世尊著述 宮崎璋藏校訂

四六判洋本全壹冊 (印刷中)

右二書は、天明年間溪世尊が初學者、無學者の爲に心易く經典を解得せしめんが爲に、四書經典餘師として著したるものにて、本文には詳しく捨假名、反り點を附し、上欄に總ふり假名の譯文を掲げ、平易流暢の俗語を以て親切叮嚀に註解を施したるものにて、天明以來初學の徒若しくは僻邑師に乏しき者の、此書に依りて經典講習の便益を得たるもの蓋し多數なるべし、今又宮崎先生の校訂補註を請ひたれば、一層親切叮嚀となり、苟も假名文を讀み得るものには解し得べからざることなし。

◉何人も平易に讀み得る經典の講習書……

與謝野晶子女史作 和田英作 和田三造 兩氏畫

新派歌集 佐保姫

四六判、洋布裝幀金箔押 日本紙刷挿畫頗美本 歌數五百拾餘首 定價金壹圓 送料金八錢

本集は既刊女史作の歌集中最も超絶したるものにして、其穩調は愈々理智の光に富み奔騰せる才華は增々氣品高く優美の思想溢るゝが如し、斯かる深味を有する作は今日の女史に於て得らるゝのみ、諸君速かに机上一本を備へられんことを薦む。

宮崎三昧先生著

隨筆 眞僞不保證

四六判全壹冊表裝包紙共 石版刷口繪石版及寫眞版入二百廿頁 定價四十五錢 送料四錢

サアナ讀で味はつて見たまへ隨筆ばかり二十章、巧みな文章、何んな味がするか野郎も女郎もお化も狐も何でも出て來る、腰を抜さぬ用心して撰り取、見取氣に入つたのが有たら朋友としたまへ、但し中には事實ものれば巧妙なる手段の實習はお斷り申す。

釋雲照律師閲　佐伯曼荼羅師編

南無大師

全一冊正價金貳圓參拾錢
特價金壹圓八拾錢
送料（内地）拾貳錢
（清韓）三十五錢

（體裁）菊判、洋裝、表紙總絹張古代漆器（國寶經筥）模樣、背文字金箔押、天緣金箔磨、函入

（内容）題字、寶物、額面、圖畫等木版刷九葉、寫眞版刷拾貳葉計貳拾壹葉入、『屏風浦』より『八大祖』まで六拾貳章、毎章題號は別紙に印刷し和漢英の三語にて說明す、總紙數五百餘頁

▲弘法大師は單に大師と稱すれば他にまた大師なきが如き大師中の大師なり

▲弘法大師は本朝眞言秘密敎、兩部神道、神佛習合乃至諸加持門の開祖なり

▲弘法大師は宮中御修法等を創始し此神聖の嚴儀は今日尙ほ行はれつゝあり

▲弘法大師は日常吾れ等が用ひて恩澤を蒙れる平假名、片假名の創作者なり

▲弘法大師は吾邦の書道文學美術等の開拓者にしてマタ天産物の發見者なり

▲弘法大師は平安朝時代種智院と稱する學校を設立し平民敎育の率先者なり

以上の如く日本文明の大恩人、宗敎界の大偉人として、大師の功績は實際に於て上下共に之を認め居れりと雖ども未だ其出身を知らず又年代を知らず而も御偉德を發揮せざるは吾人の最も恥づべき所なれば是等の要求に應じ編者が多年の苦心に依り平易流暢なる文章を以て大師一代の眞實相を細大漏すなく網羅せり何人も一本を備へて大師を熟知し普く其德を頌するは亦日本人の本分ならずや。

328
122

084923-000-8

328-122

大日本文学史

鈴木　暢幸／著

M42

DBB-0210